

～格闘技編～

男、若狭弘幸の
物語



第一章 極真空手に入門

映画『地上最強のカラテ』が上映されて、
例の初デートのときの映画『地上最強のカラテ・パート2』なんかもあったりして、
漫画では『空手バカ一代』が大ヒットしてて、
そんな影響で、世の中では、
極真空手は最強で、それはそれは恐ろしい世界だと思われてて。

早川も島津も

「あそこだけは、やめたほうがいい！
ホントにやばいとこだぞ、リンチに遭うぞ！」
「一週間で鼻が折れるぞ！」
「無差別だし、殺されるぞ！」
「ハイキックなんか腕の三倍も強いんだぞ、
そんなのが顔に飛んでくるんだぞ、胴体に！」

そう言って、みんなが止めた。

でも、俺は、だからこそ、やるんだ、って。

「俺は、そういう、すごい世界のなかで、
世界チャンピオンを目指すんだ！」って。

「これはなあ、俺の復讐なんだよ。
社会に対する復讐。
これをやれば、世の中が、みんなが、
俺を男として認めてくれるだろう。
だから、やるんだよ！」

本部道場に入ろうと思って、
電話帳で調べて。

ああ、池袋にあるんだなあ、って。

どうせやるなら本拠地の本部だろうな、って。

でも、その頃、渋谷に小さな、新しいホスト・クラブが出来て、
そこで働きながら極真空手の練習をするなら、
やっぱり渋谷がいいな、ということで、
『極真空手城南支部渋谷道場』へ。

まず見学したんだ。

そしたら道場で、小柄な、色の黒い男が指導してて、
それが緑健児だったんだ。

まず基本稽古が始まって

「いち、にい、さん、しい、はい！気合入れてー！」
って正拳突きして。

小柄なのに前に出て、そう叫んで。

それが後光が射してて。

やっぱり極真の黒帯ってのは、すげえなあ、って。

そして上段回し蹴り。

もう脚が180度開いちゃってる、みたいな感じで、
こりゃ、すげえなあ、って。

そうして移動稽古、型稽古へと入って行く。

俺は実戦とか試合とかしか注目してなかったんだけど、
ああ、そうか、あのすごさは日々こういう基本的な鍛錬から始まるものなんだなあ、と、

そう思ったんだよねえ。

続いて約束組手で、技の説明が始まったんだよね。

こういう体勢から後ろ廻し蹴りを放って、
それから、こうした技に繋げて、という、
そういう技の解説とかが始まったんだよね。

それが、すごい見本、見せるんだよ。
技はスピーディーで、
しかもピタッ、ピタッ、ピタッと
まるで判子を押すかのように止めて行くんだよねえ。

それを見て感動して。

すげえな。

これが空手か、って、
思ったんだよね。

それから、この人、すげえなあ、って。

もしかして世界大会とか出てんのかなあ、
ひょっとしてウイリー・ウィリアムスなんかとも戦ってんのかなあ、
なんて想像しちゃってて。

一通りの稽古が終わって、
最後、正座して「黙想」になって。

すると彼が
「まだまだ残暑が厳しくてね、

みんな、よく、頑張ってきたなあ、と思います。
稽古行くのがつらいなあ、と思うときにこそね、
道場に足を運ぶ、と。
そういうときこそ、強くなりますから」って語って。

ああ、丁寧なんだなあ、って思って。

すると皆が一斉に「オス！」って叫んで。

そうして稽古が終わって、
みんな一斉に掃除を始めて。

白帯も先輩も、そういう上下関係もなく、
みんなで雑巾がけしてんだよねえ。

そうして例の黒帯の人が、俺に近づいてきて
「これから自主トレになっちゃうんだけど、
それでも見学してゆく？」って聞いてきて。

「ええ、ぜひ！」って答えて。

その頃、
みんな全日本の選手は大会間近だから
練習で追い込んでるんだよ。

で、まずウエイト・トレーニングから始まって。

着替えるの見て、わあ、これは、すごい筋肉だ、って。

初めて見た、こんな、すごい筋肉。

まず大胸筋。

背中、後背筋の盛り上がり。

もろ逆三角で、まるで翼がついてるんじゃないか、っていう。

太い首を支えてるその肩からソウボウ筋が盛り上がり、
そこから一段下がって盛り上がっている三角筋。

そして左右の腕をつくっている上腕二頭筋、三頭筋。

まるでポパイのように丸々とした前腕。

その先にある拳には、ゴツゴツとした拳タコ。

緑健児の、その鍛え上げた肉体に、
目を奪われた。

でベンチ・プレスに横たわると、
バーベルをシャフトから外して持ち上げて、
どんどん重量がかさんできて、
一体この人、今何キロ持ち上げてるんだろう、って。

重量がかさむと、ものすごい気合を入れて
「うおおーっ！」って持ち上げて。

そうした種目を何種類かこなして、
続いてミット蹴りに。

ワンツー、ハイキック！

リズムカルにパンパンパンパン。

それを何セットかやって。

次はサンドバックでスタミナ稽古、追い込みやるんだよね。

周囲の人たちは緑先輩みたいに出来ないんだけど、
それでも緑先輩は、まわりを励ましながら、
引っ張って、って。

でも、そんなのは、まだ序の口で、
それから延々と練習は続いて。

で、その場で
「入門します！」って、
俺は入門して。

入会金払って、その場で道衣、買って。

「明日から来ます！」って。

そのまま手に道衣持って、
道衣を抱きかかえて。

ああ、あのウイリー・ウィリアムスが着てたのと
同じ極真会のロゴ・マーク。

うおお、俺も、この組織の人間になれたんだ、って。

夢にまで見た、極真会の人間になったんだ、って。

もう電車のなかでも、わざと極真のロゴ・マークが見えるようにして。

そしたら、まわりの奴が
「あ、あいつ極真のやつだ」って声ひそめたりして。

第二章 緑健児との出会い

そうして次の日、9月1日から、
俺の稽古が始まったんですよ。
これが24歳のとき。

まずは休まずにがんばる、っていうのが、
俺の決めたこと。

毎日夕方、5時から稽古して、
夜は7時から始まるメインの稽古に出て。

最初は体力がもたなかったんだけど、
俺も若かったから、続けてゆくごとに、
体力がもつようになって。

そうしてスパーリングなんかに参加させてもらえるようになって。

怖かったんだけど、
率先してスパーリングには出た。

ボディにパンチを食らったら、こんなんなるのか、って
そういう痛みを知って、
苦しくて苦しくて、
だから、いつも「うわああああー！！」って
奇声あげながら、必死に立ち向かって。

でも高校生くらいの子に、ボコボコにやられて。

ローキック食らって、痛くて便所は座れねえし、
立ち糞したからね、ポトポトと。
ズボンにひっかかっちゃったりして。

もう万年、脚の痛み取れなくて。
蹴られ続けてるから、脚ね。

顎もハイキック食らって、もう、いつも痛くて痛くて。

でも、それでもやり続けた。

「じゃ、スパーやる人、前へ」って言われて、
俺、脚が痛かったり、顎が痛いんだけど、
ここで出ないと男じゃねえ、って思って、
もう毎回、出たね。

そうして、また腹打たれて、脚蹴られて、顔も蹴られて。
でも「うわあああー！」って奇声張り上げて耐えて。

そしたら道場で

「またキチガイがきた」って
そんな奇声上げるもんだから、
そんなふうにはづされたりして。

でも、逃げたくない。
道場も休まない、
スパーから絶対、逃げない。

夜は湿布臭い体で店に出て、
顎に湿布張ったまま仕事してたりして。

ごっつい拳タコできて、そんな手で水割り作ったりして。

それでも、練習は休まない。
毎日、練習に行く。
毎回、スパーはやる！

でも、この痛みは、
どうしても、どっかで回復させなきゃいけない、って考えて。

そうしてスパーやる前に
「すみません、こことこ痛めてますんで」って事前に言って。

そうすれば相手は弱く打ってくれるから。

こうして相手は弱く打ってくれるから、
逃げずに続けることができた。

そんな日が続いて、
ある日、緑先輩が「よし、飲み行くぞ」って。

そうして先輩たちと数人で居酒屋で
「おまえ、根性あるな。大きなヤツは、あんまり根性あるヤツいないんだけどな」って言われて
。

「オス！ありがとうございます！」って。

「でも、ひと言いたいんだけどさ。
おまえ、ここ痛めてますからとか言って、
相手が弱く打ってくれてなのに、
おまえは全力で打ってやがんのな」

「えっ！」

そう言われて初めて気がついた。
俺、そうだったんだ。

スパーで逃げたくない、ってことだけを考えてて、
そんなことにすらも、まったく気が付かなかった。

緑先輩の、そのひと言で、みんな爆笑。
それで、いい雰囲気になったんだよねえ。

ほんとに、ただ必死だった。
なにが辛い、って、もう右も左もわかんない、
初めて食らう痛みという、
この白帯、色帯の頃が、いちばん、つらかった。

その後、全日本の選手なんかにもなったわけなんだけど、
それよりも、この入門したての、
白帯、色帯の頃のほうが、ずっと、つらかった。

だから俺が指導する時代になっても
みんなに、そう言った。

「まだ入門したてのみなさん、白帯、色帯のみなさん、
今が、いちばん、つらいときだと思います。
自分も経験してきたことですから、その気持ちは、わかります。
でも、これを乗り越えて強くなれますから、
みんなで、がんばってゆきましょう」って、
そうアドバイスしてたよね。

それ以来、緑先輩が俺に目をかけてくれるようになって、
「おまえは背も高いし、体重つければ絶対、強くなるから」って言ってくれて。

そうしてマン・ツー・マンで稽古つけてくれるようになって。

今度は皆で飲みに行くんじゃなくて、
「よし、飲み行くぞ」ってマン・ツー・マンで飲み連れてってくれるようになって。

その酒の美味しいこと！

それは安い居酒屋なんだけど、
店で飲む高級な酒の何十倍も美味しい。

冷たい生ビールが、喉越しを通って行って。
体の痛みも、疲れも、何もかも、
癒されてゆく。

解き放たれて、ゆくんだよねえ。

次元が違う。

男の酒、っていうかね。

そうして緑先輩が

「おまえ、頑張ってるよなあ。
こんだけ食らいついてくるやつ、いないもんなあ。
おまえ過去に何かあったろ？」って。

「え...」

「仕事なにやってんの？」

そんな話から、俺は今のホストの話から、
子どもの頃の話とか、死んだかあちゃんの話とか、
そうして天涯孤独になっちまったんだ、っていう話を、したんだよ。

ちょっと潤さんに似た雰囲気、緑先輩にはあって。
だから話やすかった、っていうのも、あったんだと思う。

緑先輩は黙って俺の話を聞きながら、

時折、ビールをあおりながら、
深く頷いて。

「それから」って。

「そうかあ。そうかあ...」って
俺の話に黙って聞いてくれて。

実はこの頃、緑先輩はというと、
第4回世界大会の代表権を懸けた全日本ウエイト制大会を間近に控えてて。

ようするに、このウエイト制大会で優勝しないと世界大会に
出場できない、という。

緑先輩は持病の腰痛が厳しくて、
それでも朝から晩まで、きつい練習をこなして、
「痛てえよお、痛てえよお」って言いながらも、
そうして病院に通いながら、
ほんとうに強烈に厳しい練習を続けてて。

だから世界大会に出場して引退しよう、と。

「まあ、おまえも知ってるように、
引退を懸けてウエイト制に臨むんだけどね。
おまえも俺の田舎の奄美と一緒に来て、田舎の会社で働きながら、
そこで道場を出して、世界大会を目指しながら練習して、
そこで、いい子を見つけて結婚して。
おまえが天涯孤独なら、そういうのも、いいんじゃないか」

目頭が、熱くなった。

自分の選手生命を懸けた大事な試合を間近にしながら、
練習でこんなに疲れてるのに、
俺なんかの話を、こうやって親身になって聞いてくれていて。

本当に強い男ならではの、
ふところの深い、ほんとに深い、
愛情で包んでくれてるみたいで。

すぐに返事は出来なかったんだけど、
ああ、この人が東京に居る間は、
とりあえず奄美に帰るまでは、
この人に尽くそう、と。

決めたんだよね、その場で。

こうして俺は極真空手の世界に、
もう、どっぷりと入って行って
体重も70キロくらいに増えてきて。

こうして、だんだん、俺は夜の仕事に行かなくなって行ったんだよねえ。

第三章 空手漬けの日々

そうして俺は緑先輩の家に住むようになった。
このとき緑先輩は渋谷にワンルームのマンションを借りてて。

俺は朝6時に起きて建築現場で日雇いで働いてて、
「ってきます」って。

「おー、いってらっしゃい」と見送られて、
夜は緑先輩と自主トレをするという、
そんな生活が始まっていったんだ。

そして、それが終わったら2人で酒を飲む、という。
それが毎日。
もう毎日、睡眠時間3時間くらい。
現場の休憩時間、コーヒー飲みながら、こっくり、こっくり、よ。

それが現場監督が人使い荒くて
「おまえ体格いいから、
そこにあるゴミ、下のコンテナに積んでくれ」って。

鉄屑とかコンクリーの屑。
もう嫌ってくらいズタ袋に詰まってて、
それも各足場にあんじゃない。

夜、練習なのに、こういう…。

最初は、もう、ちんたらやってたんだけども、
もうブチ切れちゃって
「うわああー！」って気合入れながら
「緑魂じゃわい！」って叫びながら、
もう、ガンガン片付けて。
もう筋トレのつもりで、いや、もうケンカのつもりでやってたよねえ。

もうバカになっちゃって。

もう、あっ、という間に終わったよね。

まわりのヤツらは引いてたけどね。

若かったんだろうねえ。

緑先輩と夜、練習して、
昼間は、こんな仕事して、という日々。

そうして、その日も昼間の仕事を終えて、
夜、道場で練習をしてるとき、
道場の電話が鳴って、緑先輩が
「はい、もしもし」と電話に出て。

「おい、若狭、電話だぞ」と代わってくれて。

えっ、俺に？
誰だろう…。

おふくろのお姉さん、おばさんからの電話だった。

「おねえちゃんなんだけどね。
居場所が、わからなくなっちゃったの…。
おじさんの家に引き取られてたんだけどね、
躰が厳しくてね、家、出ちゃったんだって」

でも、どうして、おばさん、ここの電話番号わかったんだろう。

ああ、そうだ。

実は数日前、かあちゃんの墓参りに行ったんだよ。
その墓に置手紙してて、
そこに、ここの道場の電話番号、書いてたんだった。

それを、おばさんが読んだんだ。

置手紙の宛名は「おねえちゃんへ」と。
今どうしていますか？
自分は、ここの道場に居ますーそういう置手紙。

「それでね、今、おねえちゃんは家出ちゃって、
どうしてるか、わかんないんだよね」

「ああ、そうですか...」

緑先輩は、すぐそばで練習してるから、
悪いから、こっちから連絡します、って、すぐ切って。

そうして練習が終わって、
また例のごとく緑先輩と酒を飲んで。

そのとき、緑先輩が「あの電話、誰からだったの？」と
ポツンと聞いてきて。

誰からの電話なのか緑先輩は知らないから。

で、おばさんからなんです、って。
実は、こういうわけで、と話したんだよね。

「あ、なんだよ、そういう事情だったのかよ。
俺、そういう事情だって知らなかったからさあ。
なんだよ、俺に気つかうなよ。
せっかく連絡くれたんだから、
じっくり話を聞けばよかったんだよ」
と言ってきて。

でも、俺、あれだよなあ...
ああ、ねえちゃんも俺と同じ、
天涯孤独になっちゃったんだなあ、って、
そう思ったんだよ。

道場には高校生の数見がいて、
この頃は八巻先輩とは面識はあったけど、
まだ一緒に練習はやってなかった。

緑先輩はというと、
例のごとく、ひどい腰痛のまま、
それでもハードな練習を続けてて、
朝は蒲田の道場で10時半から1時くらいまで選手稽古。
その後、サンプルイで地獄のウエイト・トレーニング、
サーキット・トレーニング。
そして夕方は一般稽古。

俺が仕事を終えて夕方、道場へ行くと
もう、いるんだよねえ。

それにしても日増しに疲労が溜まって、
やつれた顔になってって、
時折、痛そうな顔で腰を擦ってたりしててね、
うわあ、大丈夫かなあ、この人、って。

そう思ったよねえ。

それでもスパリングが始まると
「わるいなあ、みんな、また頼むよ」って、
緑先輩の十人組手。

蓄積疲労の極地という状態の緑先輩に対して、
みんな容赦なく。

手抜いたら、後で怒られちゃうから。

もう緑先輩は疲労の極地だから、
もう緑帯くらいのヤツにも、やられちゃうんだよねえ。

その頃、そのメンバーに佐伯健徳がいて、
強かったんだよねえ。
地方大会でも優勝してたし。

そういう、みんな、強い連中が、
緑先輩に向ってくわけよ。

ふらふらになってる緑先輩を見て、
思わず俺は「緑先輩、気合ですよ、気合！」って叫んじゃってて。

そしたら緑先輩も応えて「おりゃあー！」って叫んで。

これは緑先輩の、こだわり続けた練習で、
でも、もう科学の論理とかを超えた、
もう気迫だけの練習なんだよね。

そうして、いちばん最後に岩崎達也をもってきて。
この当時、もう岩崎は黒帯で、ダントツに強かったよねえ。

もう重たいパンチをさ、
胸や腹やら、ドスドスドスって、もう音が違うんだよね。

ケタの違う攻撃を浴びてたよね、ラストに。

そこで、なんとか最後に一滴のチカラを出し切って終わるんだよね。
そして、みんなで毎回、拍手して。

緑先輩は、もう道場の隅に、ゆっくり座りこんで、
ゆっくり両足を伸ばして、
荒い息をついて、
「ああ…」って顔を歪めて腰を擦って。

俺は毎回、緑先輩に駆け寄って
「先輩、大丈夫ですか」って。

すると荒い呼吸をつきながら
「ああー、大丈夫だよ、ああ、ああ…」って
もうボロボロなんだけど、その俺を見上げた眼だけは、
ランランと輝いてて。

引退を懸けた大会に臨む、
これが人生を懸けた男の眼か、と、そう感じたね。

それは地獄の底から這い上がってきた男の眼というか、
もう、いっちゃってる眼というか、
そのキラキラしてる眼を見て、
思わず背筋が寒くなったよ。

ゾツとしたよね。

「おー...、若狭...飲み行こうぜ。
飲まなきゃ、やってらんないからよお」

「はい、わかりました！」

それにしても、これも、これで、すごいよねえ。
いやあ、すごい。

これが本物の男だなあ、という。
カッコイイんだよねえ。
いやあ、憧れたねえ...

そうして、いつものようにカウンターで、
2人でジョッキの生を飲みながら。

でも、口数少ないんだよねえ。
疲れきってて。

「大丈夫ですか先輩。ちょっと休んだほうが、いいんじゃないんですか。
ちょっと練習休んで、疲労を回復させたほうが、いいんじゃないんですか？」

冷たくひえたジョッキを握りしめて、
そのジョッキを見詰めながら
「ここで休んじゃだめだ。
これを乗り越えなきゃだめなんだ。
たとえ、どんなに疲れてても、休まないんだ」って。

「俺は、おまえみたいに土台がでかかないから、
普通の科学的な練習だけじゃ勝てないんだよね。
それこそ、そういう選手たちの倍は練習しないと、勝てない」

緑先輩は、そう言ったんだよね。

そのときは、知らなかったんだけど。

実は緑先輩、このとき血便がひどくて、
もう便器が真っ赤に染まるくらいの血便が止まらなかったんだって。

そうしてビールをあおりながら、
ぽつんと「世界大会、出たいよなあ」って。

第四章 空手界のエリート集団のなかで

で、ウエイト制大会の三日前、
「明日、大阪行くから焼肉食おうぜ」って
代々木で2人で焼肉食って。

その頃は、もうクール・ダウンだったから、
きつい練習終えて一週間、休んで疲れを取って、
そしたら緑先輩、もう風貌が、すっかり変わってきて。

「おー、疲れが取れたぜ」って、
そういう、やりきった顔っていうか、
あとはやるだけだぜ、って、清々しいんだよねえ。

「先輩、俺が仕事してる時、何してるんですか？」

「そうなんだよなあ、一週間休んでたから、
やることなくってなあ。体がうずいちゃって、うずいちゃってさあ。
それでさあ、今日はパチンコやったんだよ。
この台、出たら俺は優勝する、ってガンかけて。
そしたら、ガンガン出たんだよ。
もうテンション上がっちゃってさあ。
だから、おまえに焼肉ご馳走してやろうと思ってなあ」って。

えっ、その台、出なかったら、どうしたんだろ？
そしたらテンションさがっちゃったじゃん。

この人、大丈夫かな、あぶねえなあ、って
一瞬、そう思ったんだよねえ。

緑先輩は焼肉ちょっと、つまみながら、
ちょっとだけビール飲んで。
そうして、お世話になった人たちに挨拶に行って。
サンプルイにレミー・マルタン持ってったりして。

そうして緑先輩は三日前に大阪へ。
俺は当日、みんなでクルマで大阪へ。

当日は二階席に最初いるんだけど、
緑先輩の姿を見つけて、一階へ駆け寄って
「おお、若狭、きたか」って笑顔なんだよね。

もう蓄積疲労も回復して、
前は腰痛と疲労で開脚もできなかったのに、
もう180度、両足が開いて、ピターッと、
もうヘソが床につくくらいで、
おお、回復したなあ、って思っ。

そうして試合が始まって順調に勝ち上がって行くんだよ。

そして最後、決勝は因縁の対決・三明選手。
以前、ハイキックもらって技有り取られて負けてたから。

最後の一戦。
試合前、緑先輩の肩をもみながら
「最後の試合ですから、悔いのないように」って。

「おお、わかった！」って。
もう何度も何度も自分の顔を、両手でパンパン叩きながら。

もう、見てるこっちが滅入っちゃいそうな、
そんな緊張感のなかで、
でも試合では落ち着いてて、
もう基本通りに動くんだよね。

下から攻めて行く。

パンチとロー。
受けて、基本通りに。

後半のラスト1分になるとスピード上げて、
もう、すごいパンチを繰り出して行くんだよね。

「足、効いてますよ、足！」って声援送って。
緑先輩、ローを効かせながら、
強烈なパンチを繰り出して文句無しの判定勝ち。

「おめでとうございます！いやあ、やりましたねえー！」って
もう厳しい練習見てるから、
俺も、もう自分のことみたいに喜んで。

試合後、レセプション・パーティーがあるから、って
紙、渡してくれて。
ホテルの場所が書いてあって。

緑先輩、パーティー終わってすぐ帰ってきて、
そうして俺と2人して、ずっと一緒に飲んでて。
ホテルの窓際に洒落たテーブルがあって、
そこで2人で。
おまえも奄美に来いよ、って相変わらず言ってくれて。

窓の外が白々と明るくなってきて、
なんだか、いろんな話しながら、
2人きりで、ずっと飲んでたねえ。

俺はというと、
その後、何度か道場の審査を受けて、
緑先輩に鍛えられてたから、もう体重も増えて

80キロくらいになってて。

でも80キロなんて、
まだ序の口の体だけど、
それでも道場内の色帯の試合で優勝して。

緑先輩は、いよいよ世界大会に向けた練習が始まった頃、
俺も緑帯で内弟子になって。

そうして寮に入って、
その頃、先輩には、もう佐伯健徳が既に内弟子、
通いの内弟子が入来先輩と緑先輩と八巻建二がいて。
八巻建二は途中で名前を「志」に変えて、
八巻建志になって。

入来先輩は、相変わらず明るくて元気で。

それにしても内弟子の生活ってのは、きつかったねえ。
なにがきつい、って、束縛されるのがねえ。

まず朝の練習――朝練に出る。
まず内弟子は10時前に道場に行って、掃除をする。

で、先輩たちが10時過ぎに集まってくるんだけど、
まず大抵、緑先輩がいちばん最初に来て、
それから入来先輩、八巻先輩が来て。

もう、朝から憂鬱なんだよね。
あーっ、って感じ。

八巻先輩も、ただでさえ怖い顔なのに、

むすーっ、っとしてんだよね。

「この間の書類整理の仕事、終わったの？」なんて言うんだよね。

「あっ、今日中に終わらせます」って答えて。

でも返事してくんないんだよねえ。

もう、おっかなかったよねえ。

そんななかで、

入来先生が明るくて、

うまく冗談言ってくれて。

「おい、八巻、最近、若狭のほうが背が高くなったみたいだぞ」

「えっ、そんなバカな」って。

そんな冗談で、まわりが和んで。

俺たちも、そんな冗談で殺伐とした雰囲気から逃れられて。

八巻先輩は、なにかと俺たちの仕事をチェックしてて、

「おい、若狭、たまには、うるせえ、バカ野郎って言ってやれ」なんて、

そんなふうに冗談言ってくれて。

ただ黙って睨みつけてる八巻先輩と違って、

入来先輩は、そういうムード・メーカーというか、

ホッとさせてくれる存在だったよねえ。

で、朝練のメニューは、まず池上本門寺まで軽めのジョギング。

ゆるやかな階段じゃなく、裏の急な階段をダッシュ。

このダッシュは10本。

もうケツから足から、もうパンパン。

さすがの緑先輩もハアハア言っていて、

でも緑先輩は全部トップ。

1セットも落とさない。

こだわってたねえ、そういうことをね。

もう後半になると鉄棒掴まないと階段降りれなくて、
ゲーゲー吐いてるやつもいたからねえ。

このダッシュが終わって多少のインターバルがあって、
その後、4キロくらいの道のりで
道場に帰るんだけど、もう競争なんだよね。
ぐわーっ、って競争して戻ってゆくんだよね。

俺はというと階段ダッシュとかは苦手なんだけど、
でも中距離は速くて、
何回かこの練習を重ねるうちに俺も体力がついて、
一度、緑先輩を抜いたんだよね。

もうダントツに速い緑先輩を抜いて、
やったあ、って思ったよね。

そうして何度もチラチラ後ろを見て、
もう追い込みかけられちゃうんじゃないか、って。

そしたら俺、道1本、曲がり角、間違えちゃって。

そしたら後ろから緑先輩が
「おーい、そっち違うぞおー！」って声かけてくれて。

ああ、ちきしょおー、って。

そのせいで緑先輩と一緒に並んじやって。

「うおーりゃああー！」
「でりゃああああー！」って、
2人で気合上げて、もう、すざまじいデッド・ヒート。

それで最後の最後に、俺は抜かれちゃって。

もう、そのまんま、道場で待ってる廣重師範にオスの挨拶もできないまま、そのまんま道場の床に2人して、ぶっ倒れちゃって。

俺なんかも、もうハアハア、苦しくて。

そしたら同じように、ぶっ倒れてる緑先輩が、
ようやく上半身、起こして
「若狭、おまえ最後の最後にあきらめたる」って。

そうなんだよ、最後の最後に、俺はあきらめちゃったんだ。

俺はこのとき、初めて、あきらめた、って感覚を知ったんだよね。
あ、だめだ、っていう。
苦しさから逃れたい、っていう。
この男には勝てない、という。
この男なら、勝ちを譲ってもいいかな、っていう。
そんな複雑な、あきらめちゃう、っていう感覚。
タコの糸が切れるように、
もう自分じゃ、つなぎようが、ないんですよ。

俺はあのマラソンの一戦で、
初めて知ったんだよね。

でも、これが俺のいちばんの後悔で、
ああ、あの男に勝てたのに、って。
勝てたのに、という。

これが、いちばんの後悔なんだよね。

でも、そんなやりとりを見て、
廣重師範は喜んでくれて。

「おまえ、若狭、緑と張り合うなんて、すごいなあ」って。

あっ、って。

そこで初めて気がついて、
俺と緑先輩2人して「オス」って師範に挨拶して。

師範への挨拶も、できなかったという状態だったもんだから。

でも廣重師範は本当に喜んでくれて
「若狭、おまえには地のスタミナがあるな。
うん、いいよ、いいよ」って。

で、その後は2人一組になってサンドバック。
自分のコンビネーションっていうものを、
お互いに作ってんだよね。

片方がガンガンと打って、
それ終わると、もう片方がガンガンと打って、
それが15分間続くんだよね。

その後、30秒ラッシュを5セット。
インターバルは15秒でね。

その後はキックミットでワンツールのパンチからのハイキックをダブルで蹴る。
それを3分、2分、2分。
もう走ってきたし、もうキツくて、みんな、よだれ垂らしながらやってたよね。

でも師範は「みんな腰入ってないよ」って。

その後、ガンダムを3分、2分、2分。

相変わらず廣重師範は「そこ蹴りまでつないで」「はい、間合い考えて」ってチェック入れて。

まだビッグミットがない時代だったから、
サンドバックとガンダムが主流だったんだよね。

それ終わって、みんなで30分くらいスパーリング。

そうして、この朝練で初めて八巻先輩ともスパーをやるようになって。

蹴りが、すごい。

もう上段前蹴りとか飛んでくるから。

スパーンと、ぶっ倒されちゃって。

必死で、なんとかよけるのが精一杯だったよねえ。

緑先輩もパンチからスイッチして上段廻し蹴り、

佐伯君もハイキック巧くて、

もう顔、蹴られまくりで。

この当時の極真空手の城南支部って言ったら、

もう極真空手のなかでも名門、エリート軍団ですよ。

そんななかで俺なんかも居て、

俺なんかは不器用で、そんなふうな空手は出来ないんだけど、

でも、俺は俺のスタイルみたいなものが、

ようやく出来上がりつつあって。

パンチ、膝蹴り、ローキックで攻めるという、

俺は前に出て行く組手なんだよな、という。

後ろに退っちゃったら気持ちも退いちゃう、っていう、
そういう不器用な空手なんだけど、
俺なら出来るな、という。

精一杯ではあるんだけど、
俺には根性があるな、という。
それは確信したよね。

第五章 緑先輩と離れて...

こうして激しい練習が続く日々。

内弟子の月給は5万円。

だから緑先輩は俺なんかのことを気にしてくれて

「ちょっと若狭、来いよ」って裏に連れてって、

こっそり1万円とか、くれたりした。

「いいから、取っとけ。

これで飯でも食えよ」って。

そうして、やってきた世界大会。

優勝は松井。

緑先輩は順当に3日目には残ったが、

マイケル・トンプソンに敗れてしまった。

しょっぱなに後ろ廻し蹴りで技有りを取られるという、

不本意な敗北で、緑先輩は、かなり落ち込んでいた。

この大会を目標にして、引退を懸けて、

それこそ命懸けで望んだのに。

そして緑先輩は空手を引退。

実家の奄美へ帰ってしまった。

「おまえは、これからの人間だから。

東京で、しっかり修行を積むように。

大会とか出てさ、それから奄美に来いよ」と。

俺は1人、まるで取り残されたような感じで、

道場の雑用をやりながら練習を続ける日々。

八巻先輩と真正面からガツガツと撃ちあえるくらい体力はついてきて

「おまえたち、また相変わらずだな」と廣重師範に褒められたりも

するようにはなったんだけど、

でも、やっぱり、それでも心にぽっかり穴が開いたみたいな感じになっちゃって。

内弟子には十代の連中が多くなり、

俺はというと25歳で雑用が多くて、

そんな雑用のために毎晩、寝不足になっちゃって。

「こんなの、やってらんねえ」という、

そんな愚痴が多くなっちゃって。

気がついたら、寮に帰らなくなっちゃってて。

ふらふらと放浪生活みたいな、そんな感じになっちゃってね。

ああ、でも練習は、やっとかなきゃ、と思って、

1人で中野サンプラザの地下にあるトレーニング・ジムに通うようになって。

ここにはサンドバッグがあったからね。

そこで練習してたら、

その頃、ここに、いろんな分野の格闘家が集まってて。

ジムに行かなくなったキック・ボクサーとか、

元・極真空手の全日本に出ていたんだけど、

その人もセンスがあって、かなり期待されてた人だったんだけど、

彼は道場で、みんなと一緒に練習するのが嫌で、

いつも1人で練習してた城西支部の吉井さんという人なんだけど、

ついに道場に行かなくなっちゃって、

ここで1人で練習しているという。

いわゆる半端なヤツらの集まりだったんだよね。

そんな人たちと、

一緒にミットやったり、スパーリングなんかもやるようになって。

あとはゴジラ・マニアのサンボ家。

ゴジラの映画をいつも追って観てて、

「ゴジラってのは、いつも顔が同じかというと違ってて、
第何作目では、顔のここの筋肉が、こう動くんだ」って、
自分の顔のカタチを変えてね、笑わない真剣な調子で言うのよ。

「第何作のゴジラの大腿三頭筋は3つに割れてて、
あれはスクワットやったら相当、拳がりますよ」って。

ぼそぼそと低い声で、真顔で言うんだよねえ。

ピクリとも笑わないで、

サモン・ハウサクみたいな顔してねえ。

ある日なんか「今日はゴジラ対ビオランテ、観て来ましたよ」なんて、
パンフレット手にしてて。

「ビオランテなんか、すごいんですよ。
クチを開いたらね、喉の奥まで、びっしり細かい歯が生えててね、
クチのなか全部が歯なんですよ」って。

「ああ、そうですか」って聞いてたよねえ。
ああ、これから練習なのに、テンション下がるよなあ。

それで練習終わってロッカー・ルームで、
また話しかけられて。

「若狭さん、一緒に飯食い行きましょうよ」って。
で、またゴジラとビオランテの話ですよ。

そうして中野駅の近くの学生がいっぱいいる、
安くて活気のある店で
いらっしゃーい、って感じの、そういう店に入って。

そしたら、またサモン・ハウサクが

「それでビオランテの最終武器は、ですね…」とか真顔で言いだして。

うわあ、またゴジラの話かよお。

もう、こっちはゴジラでおなかいっぱいなんだよ。

それで、もう「何になさいますか」って

注文を聞かれたときに、もう思わず

「ゴジラ対ビオランテください！」って大声で叫んじゃったんだよね。

そしたら、もう店内のお客が大爆笑しちゃって。

もう、ウケちゃって。

もう、いっぺんに、みんなの視線集めちゃって。

いやあ、ちょっと快感だったよねえ。

そしたらサモンが「なにを言いだすんだキミは！

そんな定食はない！」って、真顔で。

もう真剣なんだよねえ。

いやあ、でもキミが僕を追い詰めたんだよ、って。

第六章 無所属の空手・風来坊

まあ、そういうのもあったりして、
そこで知り合った他流派の連中の紹介で、
土道館関東大会に出場した。

埼玉の体育館でやったんだけど、
ごく小さな規模の大会なんだけど、
俺、これ以上ないよな、っていう、
忘れられないよな、っていう、
それくらい、いい試合して。

1回戦は茶帯の小さい子で、
ボディへの膝蹴りと顔面膝蹴りで、
技有り2つ取って、難なく勝って。

問題は2回戦で、
小林昭男という選手で、
身長180センチ、体重100キロを超えるパワー・ファイター。
ベンチで150キロ、スクワットで260キロを上げてたから、
重戦車って感じだよな。
彼は後々、土道館の全日本大会で優勝して、
看板選手になってゆく人なんだけど。
他流派も極真の大会に出場できるようになって、
彼もかなりいい線いったという強豪だったよ。

元々は極真会館の本部にいて移ってきた選手で、
この当時からポスト・村上竜司の呼び声も高い選手で。

それで俺はこの時は187センチ、91キロの身体で出場。
95キロの体重を4キロ絞って、動きやすいベスト・コンディションだった。

俺はプライドと意地があったよね。

極真空手の城南支部っていうね、
そういう空手界の最高峰、
エリート集団のなかで練習してきたわけじゃない。

俺は緑健児と八巻建志という超一流選手と、
ガッツリ真正面からど突きあってきたわけじゃん。

こんなところで絶対負けられない、っていうね。
そういう意地と面子が、あったよね。

で、激突して。

本戦開始。

最初、小林選手のパンチ力と圧力を体感してみようかな、って、
そう思ったんだよね。
まず、この選手のチカラを体におぼえさせる、という。

胸パンチからローキック、ボディへと、
ダーン、ダーン、ダーンとフルパワーで撃ってくる。
全然、退かないんだよね。

でも俺は頭のなか冷静にして、こう思ったね。

この相手にはステップを使って呼び込んで、
前蹴り、カウンターで膝蹴りを取って行こう、
そのほうが有利だな、と、
パッと一瞬、思ったんだよ。

このときは練習でバックステップ、スタミナ稽古を
もう嫌ってくらいやってきたから、ためらいはなかったね。

スッ、スッと、すぐ切り替えができたんだよ。

そしたら案の定、相手はガンガン前へ出てきた。
俺を追っかけるカタチで出てきた。

そこで、すかさず例のカウンター攻撃をやり始める。
距離を取って前蹴り、近づけば膝蹴り、パンチ。
時折、ガンガンガンと詰められて俺がサイドに廻れない場面もあったけど、
その際は思いっきり打ちあった。

練習のときに思い描いていたイメージを、そのまま使うことができた。

が、そこで突然、目の前が真っ白になって、
耳にピーンと金属音が走って、
この一瞬、意識が飛んだというか、
なにが起こったのか、わからなかった。

で、気が付いたら手の平を床について膝まずいてた。

床についた手、そして床に、
だらだらだらっと鮮血が滴り落ちた。

思いっきり右ストレート、顔面パンチを食らって、
後に唇6針縫う裂傷受けて。

俺たち空手の選手は、競技ルールで、
顔面パンチはない、って頭があるから、
だから、こうして顔面にパンチが来るのを
まったく予想してないもんだから、
だからモ口に食らっちゃうわけで。

つまり不意打ち、という、
そんな衝撃があるから、こうした重症を負うし、
倒れてしまう。

もともと顔面パンチが認められてる試合だったら、
こんな怪我はしないし、こんなふうには倒れないもんなんだよね。

で、このとき、主審が俺を気遣って、いろいろ何か言ってくるんだけど、
ああ、なんか言ってるな、っていうのは、わかるんだけど、
何言われてんのか、わかんなくて。

真空、だね。
そんな感じ。

そのまま立ち上がり、視線を自分の道衣の胸元に落として、
プーッと真っ赤な霧を噴いた。

もう、俺、イっちゃった。
ムカーッとした。

”こいつは殺す、絶対殺す、ブツ殺す！”

俺も死んでもいい、だがな、おまえは必ずぶっ殺す！
地獄の底まで追いかけて、必ずブツ殺してやる！

格闘技人生25年、
こんなに相手が憎い、殺してやる、
俺も死んでもかまわない、と思った試合は、
このときが初めてだった。

「はい、構えて」と主審が仕切り直しをしている最中、
俺は「おらーっ！」と大声で吼えて、
そしたら相手も「うおらーっ！」と叫んで。

もう、お互い、完全にイっちゃってた。

向こうも土道館の看板しょっちゃってるし、
前へ出る圧力組手だから絶対に退けないし、
強いやつは、相手の感情を察して、
ここで絶対に負けない、っていう、
そういうものを持ってるんだよね。

でも俺は、もう激怒してるから、
そんなこと、まったくこのときは考えもつかないで、
ただ、生意気な野郎だ、ブツ殺す、っていう、
まるでガキの喧嘩みたいに激昂してた。

で、続行の合図。

頭が真っ白になるというのは、
まさに、このことを言うんだろなあ。

今、自分がどこで何やってんのかすら、
まったくわからない。
ただ、吼えながら、打って打って、打ちまくるだけ。

そこでは、もう今まで描いてた計算だとか、
テクニックなんかは一切なくなって、
ただ真正面に立って打ち合うだけ。

そんな世界に2人共、入ったんだ。

そこで「ドーン！」と、本戦終了の太鼓の音。

「判定お願いします。判定一！」と叫ぶ主審の声。
赤1本、白1本、主審は「赤！」で俺に上がった。
副審2名、主審1名の3名だから、俺の勝ちだ。

やったぜ！

だが、そこで審判席に座っていた土道館の添野館長が
パッと手を挙げて「ちょっと待ってください！」と、
試合場の審判を全員呼びつけた。

場内がザワついて、どうしたんだろう、という感じで。

俺は試合場の中央に立って待ちながら、
人差し指を立てて叫んだ。
この野郎、やってやるぜこの野郎。

「ああ、もう一丁、もう一丁！何回でもやってやるぜ！」と
場内にアピールしてた。

すると添野館長がマイクを持って立ち上がって言った。

「若狭選手は他流派で、小林選手はウチの土道館の選手で、
えこひいきするわけじゃないが、
2人共、優勝候補で、今すごい良い試合しているから、
ここで終わらせるわけには、いかない。
完全に決着がつくまで、やらせてあげたい。

よって試合、続行！」

場内、ワーッとわいた。

「お互い、構えて、続行！」

主審のその掛け声が場内の歓声のなかに飲み込まれていく。

もう一体どのくらいの時間が経ったのか、
どれくらい走ったのか、
痛みすらも感じない、
受けなんてものは、みじんも存在しない、
2人して、フラフラになりながら、
死力を尽くして、ただ殴りあってた。

目の前に、ぼんやりと、
でも、それだけは、はっきりと見えるのは、
相手の道衣だけで、
それは血で真っ赤なんだよね。

相手も返り血、浴びてるから。

朦朧とした意識のなかで、
それは遠い感覚なんだけど、
そのなかでも「負ける」っていう、
そういう気持ちは、まったくなかった。

このままやり続けても、負ける、っていう、
それだけは無かった。
究極の感覚っていうか。

後に新極真の全日本大会で、日本代表を背負うそうそうたるメンバーと
死闘を繰り広げることになるんだけど、
それは、いわゆる空手界では一流の舞台なんだけど、
この土道館関東大会は、言ってみれば超マイナーな大会の、
この一戦なんだけど、

この、まったく陽の当たらないマイナーな試合ならではの独特な凄みというか、
迫力っていうか、この感覚というか、
小林選手も死力を尽くして闘っているということを、
肌で感じたねえ。

俺にとってこの一戦は、忘れられないよねえ…。

後半、序々に小林選手の力が落ちてゆくのが、わかったんだ。
少しずつ、だけどね。

そこで俺は左の縦拳の下突きを三連打した。
いち、に、さんと、バン、バン、バンと。

すると相手の頭がさがったのが、わかった。

「よし、動きが止まった」と心のなかで感じた。
そこで顔面に上段膝蹴り一閃。
今、思えば、よくあの状態で、よく上段につなげられたよなあ。

その膝蹴りは「ガツン！」という感覚があり、
小林選手の口元に決まった。
相手の歯が真っ赤な血に染まってゆくのが見えた。

動きは止まっているのに、倒れなかった。
効いてんのに…すげえやつだよ。

そこで下突きのラッシュ。
ボディに膝。

「うわあああああ———！」と叫び声を挙げながらのラッシュ。

頭さげて効いてんのに、退がないんだ。
でも動きは完全に止まったた。

そこで「ドーン！」と終了の太鼓。

俺もフラフラで、立ってるのが、やっとだった。
歯を食いしばって、朦朧としながら立ってた。

判定は1、2、3本、すべて赤。
ああ、これで俺の闘いは、終わった。

正面に礼、主審に礼、お互いに礼。
両者、ふらふらになりながら抱き合った。
そして俺は、やつの腕を掴んで、天高くかざしたんだ。

見たかあ、これが俺たちの姿だあ！ーと。
これが男同士の意地、命懸けた闘いなんだあ！！ーと。

そんな感覚に襲われてた。

そうして、そのまま会場の隅で、ぶっ倒れた。

後にも先にも、
こんな真正面からのド突き合い、根性戦、
そして燃え尽きた感覚というのは、
この試合だけだったんだ。

その後、三回戦、四回戦、五回戦を難なく勝ち抜いて、
この大会で優勝。

表彰台に上がるんだけど、激励を受けるんだけど、
そんなことは、どうでもよかった。
俺との一戦で小林選手は敢闘賞を受けるんだけど、
俺より低いところに立っててね、

それが気になってたよね。

なによりも、あの一戦だったなあ。

第七章 空手、ケンカ、仕事、そして恋愛

こうして大会は終わって。
また中野サンプラザの地下軍団。

そこに勇志会の松井館長が、いたんだよね。
まだ数人を教えてるくらいだったんだけど、
そこでスカウトされるんだよね。

「うちでやんないか。
今は小さいけど、そのうち大きくしたいから、
チカラになってくれないかなあ」って。

この当時、勇志会は上石神井で週に2回だけやってる、
間借りしてるという小さい道場だったんだけど、そこに顔出して。
そこに素質のある若い子を何人か見て、
目がギラギラしてるという、
ああ、こいつらと一緒に試合出たいなあ、っていう、
そういう感じになったんだよね。

選手のチームリーダーを引き受けたい、って
俺、言ったんだよね。

何も知らない連中だったけど、根性だけはあったんだよね。
で、俺は城南の選手トレーニングを、そのまま持ち込んだんだよ。
みんな歯食いしばって頑張ってたよ。

一方でサンプラザの地下軍団との練習も続けてた。
もう毎日が空手漬けだったね。

その当時の俺の仕事はというと警備会社で交通誘導してた。
このときが31歳の頃、昼は警備会社で日給1万1千円は貰えてたから、
警備会社の寮に寝泊りして月1~2万くらいだったから、
寮は一軒家を改築して、一部屋に2~3人で住んでて。

だから経済的にも余裕があった。

練習終わって仲間たちと一杯飲んでも5~6千円は残るし、
寮は上石神井にあって偶然にも道場に近かったから。

だから警備の仕事が終わってから、
練習して、夜は地下軍団の知り合いの高田馬場の居酒屋で、
2時間くらい皿洗いのバイトしたりして。

そのバイト仲間にウイングの戸井勝(とい・まさる)という若いレスラーがいて、
後樂園の試合、観に行ったんだよね。

もう皿洗いの仕事とは、まったく違ってて、

カッコよかったよねえ。

小柄だけど筋肉質な肉体で、鍛えてたなあ。

彼はミル・マスカラスに憧れてプロレスラーになったからねえ。

もう派手な技使って。

でも試合見てたら、あれ、腕おかしいなあ、って。

やっぱり腕折ってたんだよね。

でもプロだから、凄いよねえ。

「来い！」って、そのまま観客席に頭から突っ込んで。

いやあ、こりゃ、すごいなあ、って。

すごいプロ根性だなあ、って。

次の日から巡業に出ちゃうから、

もう居酒屋の皿洗いの仕事には来なくなった。

何日かして雑誌『週刊プロレス』を読んだんだよね。

そしたら腕にがちりギブスした姿の写真が掲載されてて

「今日は試合出られなくて、すいませんでした」って挨拶してて。

また何日かして戸井ちゃん巡業から帰ってきて、

そしたらさあ、

「もう若狭さん、ウイング入ってくださいよ！」

もう空手の噂、聞いてますから！
もう決まりですよ、決まり！」って、
もう強引でさあ。

いやあ、プロレスラーかよお、
どうしようかな、って一瞬、迷ったんだけど、
いかなかったよね。
やっぱ、空手だったよねえ。

それでー当初、この高田馬場の居酒屋の近くにブティックがあって、
そこのママと従業員の女の子が、飲みに来たんだよ。
俺はその従業員と仲良くなって、それで店に行ったんだ。

で、1回行くとね、またちょこちょこ行きたくなるんだよね。
洋服の他に小物も売ってたから、そういう小物を買ったりしてね。

ただ、もそーっ、と行ってもしょうがないから、
毎回ギャグを考えていったんだよね、
ウケようと思ってね。

俺の友だちに業界かぶれしてるやつがいて、
なんでも、さかさまに言うんだよね。
コーヒーのことを「ひーこー」なんて言ったり、
「おお、ごーしんが変わったぜ」なんて信号渡ったりしてて、
それをヒントにギャグつくっちゃって。

「そいつが、ある日、ふる一つぱーらーに行っちゃってさあ、
いつものようにカッコつけちゃって足組んじったりしちゃってさあ、
そこで"ふる一つぽんち"のことを
"ちんぽふる一つ"って言っちゃったんだよねえ。
"ちんぽふる一つください"って」

そしたらゲラゲラ笑ってウケちゃって。

休みの日、交通誘導の現場にね、お弁当持ってきてくれたりしてね。
公園で2人で食ったよねえ。
おれ、なんか緊張しちゃって、
なかなか飯が喉のしたへおりてゆかないんだよねえ。
そういうことがね、あったよねえ。

あるとき警備会社の上司が、
俺と彼女を飲み連れてって来て。
上石神井のパブに連れてって来て。

丸いカウンターで内側に何人か女の子がいて、
俺たちはわきのテーブルに座ってね。
俺と彼女は隣同士で、上司は正面に座ってるわけよ。

で、俺の視界には背後のカウンターの様子が見えるんだけど、
上司はそれを背にしてるから見えないわけよ。

上司は日頃から、俺の面倒をよく見てくれる人で
「おまえら結婚しろよな」って言って来て、
すごい応援してくれるんだよね。

「若狭、こんなバカな男なんだけど、
こいつは純粋な男なんだよね。
今の若者にはない純愛が、おまえたちにはあるんだよね。
なんとか応援してやって欲しいんだよね」っ
て言ってくれるんだよね。

そういう、ほのぼのとした雰囲気であ、
なんだか幸せな、平和なムードなのに、
さっきから、ずっとカウンターの方から、
殺気感じてて。

なんかドカチンみたいな若いのが3人して、

ずっと、こっちを、チラチラと、ガンつけてんだよねえ。

上司は背中向けてるから、わかんないんだけど。

ああ、まずいなあ、これは嫌だなあ、と思ってるんだけども、
どうにも小便がしたくなっちゃって。

でも小便するには、そいつらの、
すぐ後ろをって行かなきゃなんないんだよねえ。
そうして、しょうがないから、そいつらの後ろをって
トイレ行って、小便して、流しで手を洗って。

そしたら、その流しに鏡があって。

手を洗って、そうして、ゆっくりと目の前の鏡を見て、
鏡に映った自分の目を見たら急にスイッチ入っちゃって。

これは俺の男としてのプライドにかかわる。
このまま、っていうわけにはいかねえ。
急速にカチーンと燃えてきちゃって。

そうしてトイレから出ると、そいつらの座ってる椅子に、
バコーンッと蹴り入れて。

向こうも何も言わないで
「表、出る」ってことになって。

店、出るか出ないかというところで、
もう乱闘、始まっちゃって。

俺は思わず相手の両腕を掴んでて。

そのままバコーンとチョーパンぶち込んで。

相手は鼻血だして、ぶっ飛んで。

おらあ、って叫び声あげて、

そしたら相手の仲間の1人が俺の背中にしがみついて、

両腕を抱えられてっから、

ちゃんとパンチとか出せなくて。

もう1人が俺に膝蹴りとか入れてきやがったんだけど、

まったく、笑っちゃうようなお子様クラスの膝蹴りなんだよね。

それで、もう、ますます頭きちゃってさ。

「うおおおーっ！」って怒鳴り声あげてパンチを振るうんだけど、

背中から抱きつかれてて両腕抱えられちまってるから、

もう全然、チカラ入らないんだよねえ。

その背中にしがみついているヤツを、まず振り

払っちまえばいいんだけど、

俺なんか、もう興奮しちゃってて、

もう、わかんなくなっちゃってるから、

おい、なんで俺、チカラ出ねえんだ、なんでチカラ出ねえんだ、って、

もう焦っちゃって。

なんだよ、喧嘩に強くなりたくて空手やってんのに、

全然、空手、役に立たねえじゃねえかよ、って、

そんなふうを感じちゃってて。

相手が3人いたら空手は役に立たねえじゃねえかよ、って、

焦りまくったよね。

そうしたらチョーパン食らって血流してるやつが、

この野郎って、何か棒を手に持ってふりかざして、

もう、物凄い殺気で

「この野郎、ぶっ殺してやる！」って叫んで向かってきて、

うわあ、こりやまずい、俺もこれまでか、って。

そしたら店の女の子たちが、
ばあーっと飛び出してきて
もう体張って「やめて、やめて！」って、
俺たちの間に割って入って止めてくれて。

いやあ、女ってのは度胸すわってるよなあ、って
そう思ったよねえ。

見ると上司なんか、もう呆然と立ちすくんじゃってて。

そうこうしてるうちに、
おまわり来て。

おまわり、こいつらに「なんだよ！」なんて
突き飛ばされちゃったりしてて、
おいおい、情けねえ、おまわりだな、
なんて思っちゃったよねえ。

まあ、そうこうして、俺だけ隅に連れてかれて。

「あんた相手にケガさせたんだから、訴えられるかも知れないよ」って、
おまわりに、そう言われちゃって。

「えっ、そんなこと言われたってね、おまわりさん、
相手は3人なんですから、こっちだって必死だったんですよ」

「うーん、気持ちはわかるんだけどねえ、
相手にケガさせちゃったからねえ」って
言ったんだよね。

そこに上司が来て

「こいつは1人なんだよ、1人で必死に闘ったんだ」って。

じゃ、おまえは何やってたんだよ、って話だよねえ。
でも、まあ、おまわり相手に俺を必死になってかばってくれて。

「これはある意味、正当防衛でしょう！」とか言ってくれて。

「いやあ、こればかりはねえ。
気持ちは、わかるけど法律ってものがありますからねえ。
相手が訴え出しちゃったら取り扱わないわけにはいかないんだよねえ」って、
おまわりはそう言うんだよね。

「まあ、今日のところは住所と勤め先、控えさせてもらいますよ」って。

そうして3人で、すぐ近くの俺が住んでる寮に帰ってきて。

「いやあ、まいったね」

「つかれた…」って俺が言って。
いやあ、もうホントに疲れちゃって。

「いやあ、さすがに棒を持ってこれらたときは、
あれは正直、蒼褪めましたよね」

「うーん、でもなあ、
ああいうとき、若狭にしがみついちやダメなんだよ。
若狭、身動き取れなくなるから。
ああいうときは相手にしがみつかなきゃダメなんだ。
そこんところ女はダメだよなあ、わかってないんだ」って、
その上司が言うのよ。

でも、ああそうだったんだ、って。

相手の1人が俺にしがみついていたのは、わかってたんだけど、彼女もしがみついていたなんて、全然わかんなかった。

興奮してたんだよねえ。

冷静さを、まったく失ってたんだよなあ。

「うーん、なんだろうな、って、
表に出たら、もう修羅場なんだよなあ。
ちょうど若狭が相手にチョーパン入れる時だったんだよなあ、
もう相手は、もうガバガバ口から血流しててなあ、
ありゃあ、7針は縫うぜやあ」って、
もう上司、ものすごい興奮してんの。

「じゃ、ちょっと小便してくるわ」って上司が便所に行って。

つまりあの乱闘のとき、
彼女は俺にしがみついていたんだよなあ...

「先輩は、なにやってた？」って彼女に聞いたら
「わたしもわかんない」って。

まあ、そうこうして3人で横になって、
そのまま寝て、朝になって、それぞれの職場へ出勤して。

そしたら俺の上司なんか、
もう朝から他の上司に報告してて
「若狭はすげえんだ、もう相手は血だるまだあー！」って。

話が乱闘の展開が、さらにすごい大袈裟なものになっちゃってんの。
そうして、みんなの前で
「若狭、おまえ、ちょっとはおとなしくしとけよな」って言うんだよ。

「まあ、若狭は俺が面倒見てやってるから、俺の言うことは、なんでも聞くから」って、他の上司じゃ、こうは行かねえんだからな、

みたいなの。

おまえら俺の真似して若狭にこんな説教なんかしたら、大変なことになるぞ、みたいな、そんなふうに言ってんだよねえ。

まあ、たしかに、この人にはホントに世話になってるんだけど。

ま、そうして結局、あいつらは俺を訴えたりはしなかった。あいつらも男だったんだなあ、と。

俺はというと、また、いつものように試合に

向けて練習の日々。

昼間の仕事、夜は皿洗いなんかをしながら。

そして合間を見つけてブテックに顔出して、

そんな合間に会ってる、っていう、そんな感じだったよね。

第八章 結婚

彼女の年上の友達で、その人は金持ちで、
自分の家の他に四畳半のアパートとか借りてて、
ほんとは良くないんだけど、
そこが俺たちの愛の巣になったよねえ。

2人で待ち合わせして、
俺は練習終わってから、彼女は店閉めてから、
そうしてアパートで会って。

お風呂の道具を揃えて、
近くの銭湯に行ったんだよなあ。
歌謡曲の『神田川』みたいなことをやってたんだよなあ。

冬でねえ、寒いな、寒いな、なんて言って。

風呂から出たら酒と鍋の材料、買って。
甘酒なんかも飲んだなあ。
酒粕買ってきてね、そうして作って飲んだなあ。

その頃、練習とか試合とかで骨折したりとかしてたから
「ちょっと横になって飯食うわ。カラダきついから」って。

そうするとさあ
「ここ痛いよ、大丈夫？」って、
俺のカラダを擦ってくれるんだよねえ。

そうすると俺は、まるで、
解き放たれるような感じ、だったよねえ。

痛みもね、つらさも、孤独感もね、
みんな解き放たれる、っていうねえ。
羽を休める、っていうねえ。

そして...これが、すごい寒い日で、
俺はインフルエンザにかかって高熱出して
アパートで3日くらい寝込んでた。

その間、彼女はというと、
仕事から帰ると、もう、ずっと俺を介抱してくれて。

そうして、ようやく具合が良くなって、
近所のラーメン屋さんに行くんだよね。

そこに置いてあったテレビで、
第5回の極真世界大会の試合が放送されてて、
緑先輩が優勝したことを知るんだよね。

ああ、これが俺の先輩だあ、なんてね。
そんなことを言いながらラーメン、食ったんだよねえ。

その後、しばらくして、
彼女は体調悪くなってきちゃって、
ほんとに、しんどそうにしてるんだよねえ。

なんだろう、とにかく医者行ったほうがいいよ、って。

そして医者行ったら、
「あ、これは妊娠してますね」って言われるんだよ。

で、そのことを彼女から電話で聞いて
「やっぱり妊娠してたよ」って。
「ああ、そうかい」って。

それで俺は、すぐ直感で思ったね。

あれは俺が大熱出してたとき、
緑健児が世界大会で優勝した日に出来た子なんだな、って。
高熱出しながら、やっちゃったんだよね、ははは。

ま、だから、まあ俺は
「よし、これは産むぞ」って言ったんだよね。

次の日から仕事で、交通誘導やりながらも、
ずっと、名前、考えてたよねえ。

男の子だったら夢のある名前がいいなあ、
女の子だったら愛のある名前がいいなあ。

プーッポー、まだ通れないの？
ああ、すみません、まだ待ってくださいー、
なんて言いながら、頭のなかでは、ずーっと、
うーん、どんな名前がいいかなあ、って考えてたんだよ。

で、女の子だったら「愛」にしよう。
一文字で。うちの死んだおふくろと同じ名前にね。
男の子だったら夢を信じると書いて「夢信」(ゆめのぶ)。

なんでもいいから、夢を持って、
その夢に向かって、突っ走る男になってもらいたいなあ、って。

健康であれば男の子でも女の子でも、どっちでもいいんだけど、
でも、やっぱり男の子が、いいよなあ、って。

当初、2人で部屋を借りるお金もなかったし、しょうがないから2人して、彼女の実家の赤羽に挨拶に行っ

て。両親健在で、小さい呉服屋さんやって、でもお店はなくて、展示会とかあると品物を出してる、っていう、販売店なんだけど、小さな規模で、細々とやってて。

この両親が、すごく、いい人で。

おとうさんが、懐の深そうな人で、温和な感じの人だったよね。

それで子ども生まれるんです、って言ったら、びっくりしてたよね。

「将来の設計とかは、どうなの？」と聞かれて、なんとも答えられなくて「今の仕事をやり続けるしかないんで。それで空手は続けます。絶対に」と、そんな曖昧な返事しかできなかつたんだよね。

向こうの両親は、ただ、うーん、と唸るだけだったんだけど結局は2人のことだから、2人で決めるしかないんだから、って。そう言ってくれたんだよね。

この時、俺は30歳。彼女も同じ歳。

彼女はどんどんお腹が大きくなってくるし、俺はというと警備会社の寮での生活を続けながら、彼女の様子を見に行ったりしてて。

でも、あんまりお腹が大きくなる前に
結婚式しなきゃ、って。

それで結婚式。

5月で、川口のでかい建物の結婚式場。
高いところで見晴らしのいいところで。

100人くらい集まってくれて、
ほとんど彼女の関係の人で。

俺は何十年振りかで、
親父の弟さんのところに電話して、
高校まで面倒見てくれたおじさんに、
結婚するんです、って話して。

電話口でおばさんが出て、
すごく喜んでくれて。

それで結婚式に来てくれて。
俺の親戚もばらばらっと来てくれて。

それで式が始まって、
俺はこの日のために演武を用意してて。
それが、どんな内容のものかというと、
ブロックを2つテーブルの上に並べて、
廻し蹴りで割る、と。

あと、もうひとつは、
ドルフ・ラングレンが来日して世界大会で演武したのを見て、
そこからヒントを得たやつなんだけど、
瓦を十枚ずつ両サイドに並べて、
それをジャンプして両手同時に鉄槌で割る、という、
それを瓦でなく、ブロック4つずつ並べて、
ぶっつけ本番だから、
体重乗せて、思いっきりぶっ叩けば割れんじゃねえかな、って思って。

ブロックとブロックの隙間にサングを入れて。
ベタ乗せじゃ割れないから。

で、結婚式やる前、
式場で、誰を呼ぶとか、料理はどんなの出すかとか、
そんな、いろんな打ち合わせをやるんだけど、
そんなことよりも、俺は演武のことしか頭になくて、
よーし、もう目にモノ見せてやるぞ、
ぶっつけ本番、やってやるぜ、って。
そのことしか考えてなくて。

1人1万のご祝儀制にして、
式場代は安かったから、うまく、それでまかなえた。

それで、いよいよ当日。

みんな丸テーブルにパラパラと座って。

俺は城南支部の人たちも呼んでて、
木浪と河原来て。
同じ釜の飯を食った連中。

緑先輩は忙しいだろうな、と思って、
わざわざ俺なんかの結婚式に呼んだら悪いんじゃないかな、と思って。
世界チャンピオンだし。

おれなんかと次元が違う人になっちゃったからねえ。

でもね、後で俺が結婚した、って緑先輩、
誰かから聞いて連絡きて。

「なんだよ、おまえ、なんで知らせてくれなかったんだよ。
おまえの結婚式だったら、どんなに忙しくても絶対行ったのに」って
そう言ってくれてね。

いやあ...うれしかったよねえ、ほんとうにねえ。

後は勇志会勢とサンプラザ地下軍団。

俺は、もう、すでに控え室でウォーミング・アップしてたよね。
それで「よっしゃ！」と気合入れて。
俺が先頭に立って、後輩が台車に乗せたブロックを後ろから運んでくれて。

テーマ・ソングに乗って。
プロレスラーの三沢のテーマ・ソングで。

スポット・ライトを浴びて、バーンとドアが開く。

ドーンと真っ直ぐな花道で、
すごい歓声浴びて、そうして俺は舞台に上がって行ったんだよね。

そして、まず型を披露して。
そしたら今度、セッティングに入って。
黒子と化した後輩たちがテーブル運んできて、
ブロック並べて、ばばばっ、て、やってくれんだよね。

まず廻し蹴りでブロックを割って。
ブロックの面に対して水平に当てないと割れないから、

角に当たると脛もケガしちゃうし。
だから水平、水平、水平、って、
もう1ヶ月くらい、それだけ考えてたね。

これは上手く行った、1発で、バカーンと。

次は左右のブロック割りなんだけど、
これは舞台が小さくて置けないから、
じゃ、しょうがないから絨毯のまん前に置くか、って、
そういうことになって。

一段下がって、絨毯の上に立って、
呼吸を整えて、かっこつけて演出をかもしだしてね。

みんな写真、バチバチ撮って、
みんな前に集まって来ちゃったんだよねえ。

そうしてジャンプして、思いっきり、ぶっ叩いたんだけど、
ブロック割れなくて、ただ絨毯の上に、
ドコドコッと崩れちゃうだけで。
衝撃が逃げちゃうんだよね、絨毯で。

それで、また積み重ねて、でも、また崩れて。
それを2回やったんだよね。

もう腕は、みるみる腫れて、ふくれ上がってきちゃって。
これは、もう3回目だ、これは、絶対、割らなきゃ、って。

場内シーンとなってる。

「よっしゃー！」って、
思いっきり、ぶっ叩いたんだけど、
やっぱり割れなくて。

もう、この世の終わりじゃねえか、っていう、
もう腕は痛えし、こりゃ、どうしようか、って、
こりゃ、もう逃げ場ねえぞ、おい、
明日から男として生きてゆけねえぞ、おい、って。

もう腕の痛みが全身にビリビリきてて、
痛みと、せつねえ、っていう、
もう、どうしようもない。

そうしたら勇志会の松井館長が、
「若狭、左右両方じゃなく、右1本で肘でやれ」って
アドバイスしてくれて。

肘は痛めてないから、って。

それで、なんとかドーンと割った。

みんな拍手してくれたけど、
俺のなかでは、もう、なんとも、
せつねえ演武だったよねえ。

それで、おじさんが、いちばん最後にスピーチしてくれて。

「私が親代わりの…」と挨拶してくれて。
泣けたんだよねえ、これが。

弘幸は小学校5年から高校まで家に居まして、
思春期で、いろいろ複雑な思い、さびしさとか、
いろいろ抱えながら家で暮らしてたと思うのですが、
今こうして皆様の愛情のなかにいるな、という
皆様のおかげで素晴らしい結婚式を挙げる事ができて、
感無量であります、と。

場内は静まりかえっちゃって、
俺は、こりゃ、やばいな、って、
泣けちゃうな、って。
ごまかしてたよね、横向いたりしたりしながらね。

第九章 死と新しい生命。カネを得るためにプロを目指す

それで...

子ども、いよいよ産まれる、っていうとき、
嫁さんのお母さんが倒れちゃって。

明け方、5時くらいに。
倒れて、いびきかいて。
脳溢血。

俺は嫁さんの実家に泊まることが多くなってて。
そんなときに。

「お母さん、倒れてんだけど」って、
女房のおとうさんが俺たちの部屋に呼びにきて。

そして降りていくと、台所の床に倒れてんだよね。

いびきかいて。
ゆすっても起きないし、ピクリとも動かないんだよね。
救急車呼んで運ばれて。
病院のなかで待ってて、調べてもらって。

で、医者が診察室から出てきて、
脳の血管が切れたおそれがあるから、って、
レントゲン写真で、ここが、ばあーっと白くなっている部分が、
出血していて、手術しなければならない、って。

俺たちは一旦、家に戻って。

でも容態が変わって予定だった手術をする前、
翌日の夜中の3時頃に病院から電話かかってきて。

もう、死んでたんだよね。
お化粧、塗ってあったんだよね。

搬送されたとき、もうすでに医者も手の施しようがなかった、っていう、
そういうことだったんだらうね。

次の日、お通夜、葬儀の準備とか、
それを、お父さんが1人でやってたんだよね。

お寺の手配とかも、そういうの1人で。

それで葬儀が終わって、四十九日まで、
いろんな人が、毎日毎日来るのよ。
家の呉服関係の人たちとかね。

それらを、おとうさん全部1人でやってて。

それをやらないと、ガクンときちゃうから。
それで精神状態を保ってたんじゃないの、
という、そんな感じだったよねえ。

あるとき朝早い仕事が入ってて
5時くらいに起きて、下に降りて、
何気なく、おとうさんのほうを見たら、
お骨抱いて寝てたんだよね。

いやあ、せつなかったねえ。

たぶんお骨に語りかけて、そのまま寝ちゃったんだろうね。

横向きに、こうしてお骨抱えてね。

女房はというと、もうお腹大きくて、
実の母親が死んだんだからショックだろうと思うんだけど、
でも家事とか、いろいろやりながら、
もう子ども産まれるから気張ってなきゃいけないから。

「がんばんなきゃ、がんばんなきゃ」ってね、
独り言つぶやきながら、家事やってたよねえ。

そして翌月の7月5日、仕事中に1本の電話が入って
「産まれたよ」って、女房のおとうさんの声。

「じゃ、仕事終わったら、すぐ病院のほうへ行きますから」
「うん。行ってきたらいいよ」って、
すぐ電話切って。

王子病院行って。

どうなんだろうな、男の子かな、女の子かな、なんてね。

まだ夕方5時で、こうこうと明るい夕方に、
うきうきしてね、病院に足運んだっけな。

で、病院について、名前言って、
それで女房が泊まってる病院のドアをパッと開けたんだよね。

2つベッドが置かれてて、
ひとつは入ってなくて、その奥のベッドに
女房が寝てたんだよ。

おお、来たぜ、って言って。
大丈夫だったかい、すぐ産まれたのかい、って。
で、子どもは、って。

「そこにいるよ」って。

すぐ横の窓際に、小さな入れ物に入ってて。

いたよ。

おお、と思って、そのまま抱き上げて。
両手の平におさまっちゃうくらいで、
首を固定しながら、抱き上げてね。

そしたら手足をバタバタさせて泣くんだよね。

ああ、この感触、亀みたいな感じだなあ、って。
ほら、亀を甲羅を裏返して手の平に乗せると、
こう手足をバタバタさせるじゃん。

あんな筋肉の躍動感っていうのが、
手の平に伝わってきてね。

生きてる、っていうね。
生命、っていうね。

そういうね、感動っていう。

ああ、男の子じゃん。
やったね、よし、って思ったよねえ。

そうして2～3日で退院して、
女房が赤ん坊連れて戻ってきて。
おかあさんの仏壇に子ども見せて。
「入れ替わりだね」って女房が言って。

「ナムナムしようね」って、
うわーん、って泣いてたね、なんにもわかんないからね、子どもはね。

で...

当初は部屋借りて住もうと考えてたんだけど、
おかあさんが亡くなっちゃったから、
急きょ予定が変わって、

この家で、このまま、おとうさんと一緒に住むことになったんだ。

でも、この当時から、おとうさんの商売も上手く行かなくなってて、
もう着物とか、みんな着ない時代になっちゃったし、
それで商売で五百万とか借金抱えちゃってたし、
家のローンとかも滞っちゃったりしてたんだよね。

それで女房の弟は、まだ高校生だったし。
私立高校だったし。

なにからなにまで金かかるという、
おとうさんも大変な時期だったんだよね。
銀行とか、もう、どんどん借金増えてきちゃってて。

こりゃ、俺も一生懸命働いて、
家にお金入れないと、って。

それで、うーん、どうしたら金入るかなあ、って、
朝から晩まで働くか、って、
でも空手はやめたくないし、
うーん、どうしたらいいかな、どうしたらいい

いかな、って
考えて考えて。

そしたら、
あっ、プロになりゃいいじゃん、って。

な—んだ、そういうことだったんだよ、って。

で、プロになったんだよね。

第十章 空手最後の試合と思いながら

この頃、K-1があって、
そこには佐竹雅昭とかアンディ・フグとか活躍してて。

俺が独り者だったら大阪行って、
正道会館に入ってアピールして、
K-1に出て、っていうことは考えたんだけど、
毎日、大阪には通えねえしなあ、
単身赴任で行く、ってのも出来ねえしなあ、って。

警備会社も世話んなってるしなあ。

プロになる、って勝手に俺一人で決めたところで、
じゃあ、はいっ、って、すぐカネくれるわけないもんねえ。

そりゃ、やっぱ、ある程度、仕事は続けないと....。

それで、いろいろ調べて、
周囲の仲間たちからも聞いたりして、
そうしたら土道館はマーシャル・アーツ連盟を組織してたから、
ここでトップ選手になれば、K-1に出れる、と。
道が開けてくるな、と。

よーし、と。

それで空手からキックに転向するぞ、と。

で、これが空手の試合最後にしよう、と、
そういう意味を込めて土道館の全日本大会に出場。

この全日本大会は、世界大会の代表権がかかってたから。

最後の空手、やっぱり世界大会に出たかったから。
世界大会に出て、空手をやめよう、と。

世界大会は3階級に分かれてて、
ひとつ重量級は村上龍司が決まってて、
もうひとつのポストは、今回の全日本大会の優勝者だけが入れるという。

優勝候補に小林昭男がいるから、
こいつを倒して優勝しないと世界大会には出られないわけで、
初めて大きなプレッシャーってものを感じて。

ちくしょう、絶対に世界大会に出るぞ、ちくしょう、って。

それから猛練習が始まり。
サンプラザの地下に通い、
同じく中野区にあるフジ・トレーニングセンターに通って。

フジ・トレーニングセンターは八巻建志も通ってたから。
ここでスピード強化と心肺機能のアップを目指す練習を教わるんだよね。

サンプレイは筋肉のひとつひとつを鍛え上げて行くというメニューなんだけど、
フジ・トレーニングセンターはというと、同じサーキット・トレーニングではあるんだけど、
回数は少ないけども、短い時間にどれだけ出来るか、という練習法で、
サンプレイもきついけど、フジ・トレーニングセンターの練習もきつかったよね。

この他に勇志会の練習もあって、
週6練習してたよねえ。

若かったよねえ。

で、蓄積疲労が取れなくてねえ、
もう、とにかく飯だけは食ったよね、
もう、ガツガツ。

それでも、がんばって練習続けてたら、
カラダがパンクしちゃって、
大会2週間前に発熱して寝込んでちゃって。

もう仕事にも行けなくなっちゃって。

それで猛練習が続けられなくなっちゃって、
軽めの練習が続いて。

そしたら熱は下がったんだけど、
もう不安で不安で...。
こんな軽い練習やってて、おれ試合出れんのかな、
スタミナなくなっちゃってんじゃないかな、って。

今みたいに科学的なトレーニングなんてない時代だったから、
もう、それこそ、もう、ひたすらガンガン猛練習やり続けなきゃダメだ、って
そんなふうに思い込んでたから。

で、大会2日前にフジ・トレーニングセンターに行っちゃうんだよね。

そしたら会長がいて

「おお、若狭クン、明後日試合じゃないか、がんばれよ」って声かけてくれて。

「いやあ、会長、実は自分、熱出しちゃって
2週間、ほんと息も上げてないし、
自分がどういう状態なのか、わからないんですよ。
だから今日、息上げておきたいんです。
最後のスーパー・サーキットお願いします」

「えっ、明後日試合だっていうのに、そんなことやるヤツはいねえぞ」

「いや、でも、ここで自分の状態ってものを知っておかないと、
夜も眠れないんですよ」

「う〜ん...ほんとだったら、そういう自殺行為はやらせないんだけど。
格闘家っていうのは精神の世界だからな。
本人がそっちのがいい、って言うんなら、
俺は本人の意思を否定するタイプじゃないから。
でも、これはほんとに賭けだぞ。いいか、恨むなよ」

で、立ち上がって「よし、やろう」ってことになって。

気だるいもなにもなく、バーンってやったよね。

ああ、動けるじゃねえか、って。
で、闘志もわいてきた。

それで試合当日を迎えたわけよ。

試合会場は埼玉にある大きな体育館。
朝8時頃、勇志会のメンバーと一緒に会場入りすると、
皆一斉に、俺をガーンと睨みつけてくんだよね。

トイレですれ違ったりしても、
こう睨みつけてきやがるし、
すんげえ険悪な雰囲気。

会場の客たちとか、そういう選手たちの関係者とかなんだよねえ。

もう土道館ってったら、ただでさえ雰囲気悪いのに、
もう、すんげえガンくれちゃって、
ああ、俺はこれから試合なんだから冷静になろう、って
そう思ってたけど、もう頭きちゃってて。
この野郎ども、おいしいのいっぱいくれちゃってんじゃないのよ、っていう、
もう頭きてて。

俺はここで初めてトーナメント表を見て、
俺と小林が決勝で当たるというふうに組まれてるな、
ということを知ったんだよ。

そこに俺の姿を見つけて、
小林が駆け寄ってきたんだよね。

もう、清々しい実にさわやかな顔つきで、
俳優の若き日の佐藤浩一みたいな顔つきで、
「オス、若狭さん、今日は決勝ですね！
お互い、がんばりましょう！」って、
それだけ言うと、オスと頭を下げて、
また、パーッと小走りに去って行って。

ああ、こいつは、やることをやって、
ここに来たんだなあ、と。

体調も、精神状態も、
もう充分やりきった、という状態で
ここに臨んだんだなあ、という感じで。

それで俺は初めて、
ぶあーッとプレッシャーってのを感じたんだよね。

あいつの方が状態が良いんじゃないか、という。
そういう何とも言いようがない焦り、というね。

でも試合が始まったらカンケーない、という、
そんなふうに分身自身を言い聞かせて、ね。

ウォーミング・アップして、
まずビッグ・ミットで3分、2分、2分やるんだけど、
これは、いつもやることなんだけど、
この日は身体が動かなくて。

身体がだるくて、重くて。

これは、ただ単にプレッシャーで身体動かないのかな、
と思ったんだよね。

それで1分間ラッシュを3本やって、
それでも身体がだるくて動かなくて、
うわあ、調子上がらんねえなあ、って思って。

1回戦はシードで2回戦からなんだけど、
その間、シャドウとかやって身体動かしてて。

それで2回戦、土道館の黒帯とやったんだけど、
難なく本戦で押し切って勝って。
そこで勇志会の松井館長のアドバイスがあって。

「ちょっと身体が硬いから、
もっとシャドウとか柔軟やって身体を温めて、
リラックスしてやるように」って。

「もっと的確に急所にパンチを撃つ、無駄な動きをしないように」
というアドバイス。

そして3回戦、相手は大型の選手で、
ゴツかったねえ。
頭突きかましてくんだよねえ、
主審にアピールしたんだけど気づかなくて、
ただ「続行、続行！」って言うだけ。

一瞬、俺もやり返してやろうかなと思ったんだけど、
俺がやったら注意取られちゃうからね。
他流派だからね。

それで、もう頭突きにかまわず、
もう前に出て、圧力かけてパンチと膝で押して。

そしたら相手は俺の道衣掴んで、
巴投げしやがって。
これがキレイに決まっちゃって。

この土道館のルールでは、瞬間的な掴みとか、
投げ技はOKなんだよね。

そこで俺、頭きて、
もうブチッと切れて、
めったくそぶん殴って、ガンガンぶん殴って、
それで本戦、文句なしの判定勝ち。

で、一方の小林はというと、

同じく1回戦シードで2回戦はカカト落としで1本勝ち、
2回戦はボディの下突きで技有り取って勝ち上がってて。

調子良さそうだなあ、と。

そして迎えた準決勝、
この人は、前から知ってたんだけど、
まあ、試合でしか見たことないんだけど、
まるで力石徹みたいなね、
ギョロっとした上目使いの目で。
なんかシブイんだよね。

西久保って人なんだけど、
土道館の全日本大会中量級で2連覇してんだよね。

その頃、印象に残る選手で、
佐藤塾で安部っていう小柄な選手がいたんだけど、
緑先輩と一緒に地獄の特訓を受けてた人がいたんだよね。

勇志会にも出稽古に来て、
俺もスパリングをしたことがあるんだけど、
膝が柔らかくて、タテ蹴りがスポンと入ってきて。

普通、タテ蹴りすると軸足がクルリと回転するんだけど、
そうして蹴り足に力を乗せるんだけど、
阿部って選手は軸足はそのまま、
そのまんま蹴りが入ってくんだよね。

しかも、それが威力が強くて、
この1発を俺はスパリングのときに食らって、
鼻折れたんだよね。

たぶん異常なくらい膝の関節がやわらかいんだろうねえ。

いやあ、すごい蹴りだったよね。

こんなヤツ、いるんだよなあ、
世の中に、って、そう思ったよねえ。

それで、この阿部選手は土道館全日本中量級でも
1本勝ち、技有りの山を築いて決勝に上がってたんだよね。

そこで西久保選手と激突するわけよ。

例の上段廻し蹴りをしのぎながら、
パンチ、ローで西久保選手は攻めるんだよね。

それで時折、ラッシュで攻めると、
向こうもラッシュを仕掛けるとい、
そんな展開になってたんだよね。

そして最終延長で安部の動きが、
徐々ににぶってくるんだよね。
ボディが効いてきてんだよ。

それでラスト30秒で膝蹴りでダウン奪って。

マットに膝ついて西久保を見上げる安部の目ってというのは、
あれは忘れらんないよなあ。
心、折った目っていの。
そういう、あきらめた目なんだよなあ。

ああいう目を、まざまざと見たなあ。

俺も経験したことがあるし、

だから、わかるんだけど、
安部もそうなんだな。

一瞬なんだけど、ああ、効いちゃったよ、っていう。
そういう目なんだよな。

文句なしの判定勝ちで、正面に礼。

西久保選手は勝っても笑顔ひとつ見せないで、
そのまま試合場を降りて行くんだよねえ。
サムライみたいだなあ、って。
超シブいなあ、ってね。
そう思ったよね。

で西久保選手は中量級の選手だから、
75キロあるのか、80キロはないと思うんだよね。
俺は90キロをはるかに超えていたから、
無駄肉もなかったし、サーキット・トレーニングやってたから。
まずまずの身体だったよね。

だから負ける気はしなかったんだけど、
そういう選手だって知ってたから油断はならない。

まわり込まれるんじゃないかな、とか、
体重判定になるかな、とか。

俺は他流派の選手だから、
判定になったら負けるからな、って。
そういうふうに警戒してたよね。

それで試合が始まって、
西久保選手は、もうフル・スイングでパンチを撃ってくるんだよね。
ブーン、ブーンって。
遠心力使って、新極真の新保選手みたいに。
真正面から撃ってくるんだよね。

1発1発を大事に撃ってくる。

ちょっと面食らったんだよね。

やっぱ強えなあ。

連覇してるやつは根性決めてくるんだなあ、と。

無差別の大会に挑戦しても、
それでも逃げたり、まわったりしないで、
真正面から撃ってくる。

こんな小さな身体で、よくこんな強烈なチカラが出るな、
と思ったよね。

で俺は体重使って、真正面からの撃ち合いにこたえて、
左のローキックを撃ちながら、時折、左の膝を正面から入れて行って。

そうしたら西久保選手が退き始めて。

これは効いたわけじゃなく、
物理的な問題でね。
体重差で押されて。

そうして西久保選手が左の上段廻し蹴りを放ってきて、
これに対して俺は右の内廻しのカカト落としを合わせて。
身長差も結構あったから。
これで西久保選手が一瞬、崩れたんだよね。

このカカト落としは練習してたんだよね。

やっぱり上段、蹴りたいし。

俺は上段廻し蹴り、蹴れないから。
蹴れない理由のひとつは、俺はでかいから、
相手がなかに入ってきて密着しちゃうから、
間合いが取れなくて上段廻し蹴り入らないんだよ。

もうひとつは、得意じゃない、っていうことがあって。
無理して蹴ってバランス崩れちゃったら、
相手に押し込まれる可能性もあるから。

で、カカト落としを練習した。
内廻しとか。
これはパンチのジャブみたいな感じで。

これだと身体バランス崩れないから。

それで西久保選手は俺のカカト落としを受けて、
身体がのけぞって、片足になったんだよね。

そこを、すかさずパンチ、膝、パンチ、膝の圧カラッシュで、
ババババッとまとめたんだよね。

そこで本戦終了の太鼓が鳴って。

旗が全部、俺に上がって。

それで試合場、降りて、ひと息ついてると、
西久保さんが俺んところに来るんだよね。

「いやあ、強くなったねえ」って言ってくれたんだよね。
彼はひとつかふたつ年上だったから。
で俺もスックと立ち上がって不動立ちになって
「今日はどうもありがとうございました」って深々と頭さげて。

そのときに俺の脳裏をかすめたのは、
西久保選手、調子よくなかったのかなあ、
それとも、やっぱり体重差で押されちゃったのかなあ。
でも、この人にとって、それでも足を使って逃げる空手は、
この人にとっては自分の威厳にかかわることだったのかなあ、って。

去ってゆく西久保さんの後ろ姿見て、
サムライだなあ、ってね。
そんなふうに感じたよねえ。

それ以来、西久保さんは大会から姿を消したよね。

噂すらも聞かなかった。

なんか、それがねえ、
カッコよかったよなあ、って。
1人の男の生きざまとしてね、
いさぎよい、っていうかね、
カッコよかったなあ、って。

で、決勝戦になるわけよ。

決勝戦になる前に演武とかやるじゃん。
それを会場の隅で、ぼーっと見詰めてて。

それで周囲の観客席の話し声が聞こえんだよね。

「関東大会の再戦だな」
「ここで小林は勝てないとダメだよな」っていう、
そういう話し声。

おお、みんな敵だな、っていう感じ、だよな。

おお、やってやるぜ、っていうね。
そういう感じよ。

戦略としては、
最終延長で絶対に底力っていうのは出るはずだから。
俺も練習してきたわけだから。

絶対、最終延長まで引き分け、引き分けになる。
俺が有利でも引き分けになるから。
そこで最終延長で体力全部出し切ってラッシュして、絶対に勝ってやる。

それが俺の戦略だったんだ。

そうして迎えた決勝戦。

お互いに見合って。
前回の試合で、お互いわかってるから。
本戦は技の交換という感じだけで終了して、
そして延長戦に入る。

そしたら小林選手がガンガン前に出てきて。

ここで俺はミスをするわけよ。

ああ、ここは体力を温存しとかないと、
最終延長で出し切るんだから、って。
引き分けに持ち込もう、と。

これが、よくなかった。

延長戦が終了。

それで副審判が1本、小林に上がって。
ここは決勝だから、あと2本は引き分けになるだろう、と
そう思ってたんだよね。

そしたら主審が小林に。

ええっ、ていう感じ。

とりこぼした。

ガクガクガクって崩れたよね、心が。

これで世界大会出場できない。

これで空手、終わりにしよう、って思ってたのに....。

リザーブ選手にはなったんだけど、

結局、出れなくて。

仕方ない。

第十一章 キックの世界へ

こうして稼ぎにするためにプロに転向。
まずキックの元・極真空手だった黒崎先生がやってる
黒崎道場に出稽古行って。

埼京線の戸田公園駅から電話して
「今から行きますから場所どのへんになりますか？」って聞いたんだよ。
それで黒崎先生が電話ごしで
「まず五差路まで来なさい。そこに看板が出てるから、わかるから」って。

ああ、あの極真の伝説の男・黒崎健時の声だよ、すげえなあ、って。
緊張してなあ。

なんか祭りもやってて、人混みで、
迷って、迷って、ようやくたどり着いて。

外観はでっかいビルで、
1階は黒崎さんの住まいなんだろうな。
ラウンジみたいになって洒落てて。
そこに、でっかいベージュ色のブルドックいて。
うわあ、黒崎さんの顔だよ、って。

飼い主に似るんだよね。

それで近寄ると人なつっこいんだよねえ、
でっかいブルドックが尻尾ふって。

それで2階へ1段、2段と階段上がってって。
で、扉をノックして、がばっとドアあけて。

「あ、さきほど電話しました者ですが」って言ったら、

黒崎先生から、いきなり大目玉食らって。

「声が小さい、はい、もう一回」って、
それで、やり直したんだから。

「ずいぶん、遅かったんじゃないのかい」って。
道場の隅にテーブルがあって、
そのソファに座ってて。

「いやあ、すいません。迷いまして」
「キミは人に聞く、って知恵はないのかい。
ダメだよお、そんなことじゃ。
そんなんじゃ、リングの上で、バーンとひっくり返っちまうぞおー！
一事が万事だあー！」

ははあーっ、て感じだよねえ。
そこまで、こだわるかい、っていうねえ。

「で、キミは今まで何をやってたんだい」
「いや、フルコンタクトの空手をやってまして」
「キミは身長と体重はいくつなんだ」
「187センチの95キロくらいです、普段は」
「ウソだ、キミの身体はね、ウソ筋肉で出来ているんだよ。
空手の選手はねえ、みんなウソ筋肉。
ウエイト・トレーニングばかりやってやがって。
まず、その筋肉を全部取れ！」

えっ、とっちゃうんですか、って思ったよねえ。
言わなかったけど。

これまで筋肉、つけろつけろ、って言われる世界のなかにおいて、

それは、いやあ、だって必要でしょ、筋肉。

それが、どうも原野を走る黒人みたいなね、細い身体の筋肉が、黒崎先生は良いと思ってるふうなんだよねえ。

「本当の筋肉は、カラダが細くでも芯があるんだ」とか言ってるし。

道場には4~5人くらい道場生がいて、
ずっと黙々と腕立て伏せ3000回とかやってんだよねえ。
もう夏の暑い日に、もう床が鏡みたいになるくらい汗かいちゃってて。

いやあ、でも、これは伝説の男だからなあ。
今までと全然違うけど、こりゃ1発、俺もやらなきゃなあ、って
思ったんだよねえ。

それで「明日から来なさい。水を一滴も飲まないで来なさい」って。

「ええっ...」

「どいつもこいつも水摂り過ぎなんだよね。練習中に汗かくようじゃダメなんだ。
おまえのカラダは水びたしだあ、まず、その水を全部とるんだあー！」って。

それで次の日、真夏の炎天下のなか、
水一滴も飲まないで、行ったよねえ。

まず腕立て500回、腹筋500回。
「これは初心者クラスだ」って言うんですよ。

うわあ、って。
こっちは、もう一日中、水、一滴も飲まないもんだから、
もうフラフラよ。

飯食うときも一切、水飲まない。
もう、みんなゴックンって感じよ。

もう飯よりも水だよ、水。

で、初心者クラス。

「じゃ、今度はリングの上、あがれ」と。

ジャブとワンツー、それは俺がいいって言うまでやれ、と。
ステップ使いながら。

それが、もう延々と続くんだよねえ。

こっちは、もう脱水症状。
もう、水、水、水って感じだよ。

それで黒崎先生が言うんだよね。

「パンチは突くんじゃなく撃つんだ。
おまえのは突いてるんだ。撃て！」って言うんだよ。

それからサンドバッグを
「俺がいいと言うまでやりなさい」って。

もう、こっちはフラフラなもんだから、
それも、まだまだ延々と続いているわけで、
もうパンチとローだけ、フラフラになりながらやってたよなあ、
もう必死になって。

初日はこれだけで終わったんだけど、
もうフラフラで、こりゃ、とんでもないことになったなあ、って。

練習終わってシャワー浴びて
「水は飲むなよ」って言われたんだけど、
頭から顔に伝って流れる生ぬるいシャワーのお湯をね、

こうクチでチュ、チュと飲んでんだよねえ。
人間はねえ、そうしちゃうんだよねえ。

そうしてシャワー浴び終わって、
階段降りて「失礼します」って挨拶すると、
黒崎先生はビール飲んでんだよねえ。

茶色のビンが細かい汗かいてて、
真夏ですよ、ビールは冷たいんだろうなあ、って。
あれほどビールが飲みたい、っていう、
そう思ったことはないよねえ。

もう黒崎先生のお言葉なんて、耳に入らないよねえ。
もうビールばかり見てたよねえ。

「明日はスパーリング・パートナー、用意しとくから」って言うんだよね。

水は一滴も飲むなよ、って。

そしたら奥さんが奥から大きなナシを持ってきてくれて。

「これ食べなさい」って。

「うわあ、ありがとうございます！」って。
それを両手で受け取って。

今まで冷蔵庫に入ってたんだろうね、冷たいんだよね。
もう、早くこの部屋から表に出て行きたくて。
早く、このナシを食べたくてねえ。

道場に行くと、こうして毎回、奥さんが冷たいナシをくれてね。
これだけが楽しみだったなあ。

帰りの駅までの夜道、そのナシにむしゃぶりついて。

このナシの甘味と、いやあ、美味かったよねえ。

もう一滴でも地面に垂れるのがもったいなくて、かじると同時に吸ってたよねえ。

そんなときに頭のなかで思ったよねえ。

あの力石徹ってのは、すごかったよねえ。

二階級のバンタムに落としたでしょ。

地下室に籠って、最後、脱走して、

水、水って、そしたら水道が全部、針金で縛ってあって。

そしたら白木洋子が

冷たい水はカラダに毒だから、って、

ぬるま湯をもってきてくれて。

でも、それを力石はザーッと床に流しちゃって。

この力石徹、取り乱してしまって、すいません、って。

そうして、また地下室へ戻って行っちゃうんだよねえ。

俺だったら飲んじゃうよねえ。

いやあ、あの力石徹ってのは大した男だったよねえ。

そんなこと考えながら夜道を帰って。

次の日、スパーリングの日。

道場へ行くと、1人のかい男がいて。

バンテージを巻きながら肩越しに俺のほうに振りかえって。

彼が誰か1発でわかった。

全米クルーザー級のチャンピオン、
ドン中谷ニールセンだったんだよね。

それで俺も柔軟はじめて、
俺も中谷と話をして「身長は何センチだい」なんて話かけてきて。

それで黒崎先生が入ってきて
「おお、2人共揃ったかい。ウォーミング・アップをしたら、
2人共ヘッド・ギアをつけるように」って。

まわりの者はリングを囲むように、って。

で、これが俺の生まれて初めてのリングでの顔面有りのスパーリングだったんだよね。

3分5ラウンド。
時間を見るやつは、おまえだ、とか黒崎先生が、
周囲の薄暗い感じの道場生たちに指示してて。

「はじめー！」って始まって。

構えるとニールセンはサウスポーで。
空手と間合いは全然違って遠くて。
やっぱ空手と違うもんだなあ、って。

右足がいちばん近い距離にあったから、
そこにイン・ローとかね、
そうして、まずニールセンの右足を攻めた。

空手だったら前足のローはパン、パンってよけられるんだけど、
よけないんだよね。
ああ、こりゃ入るわ、と思って、そうしてパンパンと蹴ってたんだよね。

そしたら、いきなり左ストレートが飛んできて。

俺はぶっ倒れて。

これが最初のダウンで。

頭がガーンとなっていて。

これがグローブのパンチなのか。

これまで拳で叩かれたことはあるんだけど、

グローブは頭全体が、ぐわーん、ぐわーんと揺れる感じで。

グローブのが効くんだよね。

立ち上がったんだけど膝がガクガクしてて。

まるで雲の上に立ってるような感じで。

モノが2重に見えて。

それでガード上げなきゃ、って思いながらも、

パンチ打たなきゃ、って思って。

ニールセンのガード越しにパンチをラッシュするんだけど、

空手ではラッシュできるわけなんだけど、

真夏で汗吸ったグローブが重くて、

なかなかラッシュできないんだよね。

それと空手はボディに打ち込んでるわけなんだけど、

キックは顔面だから打点が高いんだよね。

肩の力が保てなくて、もう2、3発打ったら止まっちゃうし、

グローブ重いからガード下がっちゃうし。

肩の筋持久力がなかったんだよね。

それでガードが下がったところをパンチ食らって、
2度目のダウン。

そのあと立ち上がったらダウン、立ち上がったらダウンで。
もう触られるだけで倒れちゃう。
脳が揺れちゃってるから。

たぶんニールセンのほうも、
こりゃ、やばいなあ、って困ってたんだろうと思うんだけど、
止め入らないから、そのままやり続けて、
結局、3ラウンドで「止め」が入って。

でも今、考えると、
よく3ラウンドまでやらせたよなあ、っていう感じだよね。

死んじゃってたかもしんないよなあ、まじでなあ。

これが俺のキック初体験。
こりゃ、すごいもんだな、と。
キックをなめてたね。

減量して、こんなことやってんだから、
やっぱプロはすげえな、って思ったよね。

次の日、道場行っても、まだ目がまわってた。
根性がねえ、って思われるのが嫌だったから、

次の日も行ったよねえ。

でも1週間くらい目がまわってたよねえ。

あの蒸し暑さ、それで水の不足。

「おお、来たかあ。昨日は、まあ根性あったなあ。

1ラウンドで左ストレート食らったからなあ。

こっちは素人なんだから、奇襲戦法で行くしかねえんだよ。

特攻魂で。

最初っから倒そう、っていう気持ちで行かなきゃダメなんだよ。

おまえは最初っから、何か得ようとか、何か経験しようとか、

そういう考えだったろ。

倒そう、っていう気構えがないとダメなんだよ」って。

黒崎先生が、そう言うんだよね。

えっ、この人、なんということを言ってるんだいって。

これスパーリングじゃないですかい、って思ったんだけど。

でも逆に、それが気に入ったよねえ。

やるなら、やる。

倒すつもりでやる、っていう。

それが気に入ったんだよね。

俺はこうして毎日、毎日、黒崎道場に通って、

ある日、体重計に乗ったら85キロとかになってて。

1ヶ月くらいで10キロくらい体重が落ちてたんだよね。

毎日毎日、水は飲まないで我慢してんだけど、
ある日、突然、もう、こりゃ、しんぼうたまらん、って
ガバーと飲んじゃったり。
いつも甘いジュースに憧れてて、
もう思いっきり買い込んでガーッと猛然と飲んだり。
お菓子を山盛り買い込んで食らいついたり。
それでも、そんなことすると罪悪感に襲われて。

でも、それでも10キロ痩せちゃったんだからねえ。

もう腹筋が見えて、もうカッコイイ身体になってて。
ウルトラマンパワードみたいになってて。
今まで見たことのないような肉体になってて。
頬もげっそりコケて。

腕立て、腹筋の回数も増えて。
持久力がついた。

そして相変わらず最後にもらうナシが、
それだけが楽しみで。

こうして2ヶ月くらい黒崎道場で練習して、
よし、ここは、もういいだろう、と。
俺なりに充分やることはやったぞ、と。

そうして勇志会を脱退して、本格的にプロ・デビューするために、
士道館の神田道場へ。
そこにはプロ選手たちが、いっぱいいたから。

いよいよ、プロだな、と。

第十二章 まずはアマチュアの大会からのスタート

士道館の神田道場を任されている村上竜司さんは、
当時、すでにアンディ・フグと闘ったりしていた。

自分も過去2回、空手でも竜司さんに負けてたし。
だから顔は知ってるから。

行って、自分は結婚して子どももできたし、
義父さんも商売うまくいなくて借金あるし、
だから自分は格闘技の世界で、どうしてもカネを稼がないと、と
そういう理由を話したら、居酒屋で飯おごってくれて。

そうして入門して。
練習内容は黒崎道場と全然違ってて。

「空手をベースにやったほうがいいよ。
まったく別世界だって考えないで前へ出るんだよ。
空手やってたやつは打たれ強いし、足腰も強いから。
ただボクシングは、少し練習したほうがいいね」って。

ボクシングは肩の入れ方が深いんだよね、
空手とは、ちょっと違う打ち方だからね、って。

ああ、なるほど、と。

それにしても初めて道場行ったとき、
ヘビー級の選手に右ストレートでKOされて。
横になってたんだけど鼻血が止まなくて、
あれは、まいった。

顔面パンチは慣れてなくて、まったく見えなくて。

次の日は休みだったんだけど、

竜司師範がマンツーマンで指導してくれて。

そして夜は、相変わらず居酒屋で飯おごってくれて。

めきめきと上達してゆくのが自分でも、
もう手にとるようにわかってきて、
ああ、俺はこの人と合ってるな、って。

そう思ったんだよね。

そういう日々が流れていって、
当時、トーア杯っていうのが開催されてて。
優勝賞金500万円だったから、
プロもアマも、みんな、それ出たよね。

その頃、大阪の佐竹か、東京の村上か、という、
どっちが優勝か、なんて騒がれてたんだけど、
でも、そんななかでも竜司師範は、俺を教えるのを止めないんだよね。

俺のコーチを続けてくれて。

「なかなかベースがいいからね。
ただ空手クセは取らないとな。
上体を柳のように柔らかくして、
ガード・ポジションを、もっと早く戻すことを意識して」
と教わりながら。

そうして練習が終わって、
また、いつものように居酒屋でおごってもらってるとき、
竜司さん、トーア杯の試合近いのに、自分ばかり教わってて、
自分ミット持ちますよ、竜司さんも練習してくださいよ、って言ったんだよね。

そしたら

「いや、最初が肝心だから。
わしが練習始めたら、おまえに教えてやるヤツいなくなるから」って。

「わしのことは気にしなくていいから。
右フックが、なかなか良くなってるから。
あれはKO取れるパンチになってきたから。
春にはアマチュアの大会に出すから、
そのつもりで」って言われて。

そうして、いよいよトーア杯の当日がやってきて、
俺はミット持ってアップに付き合っ
竜司さんの得意パンチの左フックを打ち込むんだけど、
数日前に左の腕のじん帯を故障しちゃって。
激痛が走って、やっぱり打てないんだよね。

それで急ぎよ、コンビネーションを右に変えて。
よく、変えたよなあ、急ぎよ。

そうして試合が始まって、
ここで打ちたいんだろうなあ、っていう場面がいくつかあって、
やっぱ左はジャブしか出せなくて。

ローと右のパンチで倒すしかなくて。
ひとつ試合が終わるたびに、控室に戻って左肘を
氷で冷やすという。

ああ、この人、大丈夫かな、っていう、
そんな感じだったよね。

途中、添野館長が控室に顔出して

「リュウちゃん、大丈夫かい」って、やさしい言葉をかけてくれて。

すると竜司さんは「オス、オス」って、
もう眼光の光は落ちてない、っていう。
そんな感じだったよねえ。

それで準決勝戦、USA大山空手の黒人選手が出てきて、
すごく強い選手で、こりゃ、もう、やられちゃうんじゃないかな、
っていうくらい強くて。

中肉中背の選手なんだけど、
黒人特有のバネがあって、
スタミナもあって、始終、ラッシュ攻撃が、すごいんだよね。

こりゃ、ヤバイっていう試合展開が続いて。

でも最後の最後にローが効いてきて、
結果、竜司選手のKO勝利。

そして決勝戦、竜司さんの教え子のヘビー級選手に勝利して優勝。

控室で自分のバッグに荷物を入れてる竜司さんに
「いやあ、この状態で、すごかったですね。
今日は勉強になりました」って
そう言ったんだよね。

そうしたら竜司さんが、こう言ったんだよね。

「男だからねえ、あきらめらんないからねえ」

いやあ、竜司さん、カッコいい。

いやあ、男だよなあ。

そして、ついに、俺の番を迎えたんだよ。

当時、アマチュアの顔面有リトーナメントは、

新空手の大会しかなくて、

そうして5月に東京武道館でやった。

正道会館の宮本選手とか、

そういう、いろんな有望視されてるヘビー級の選手たちが、

結構、出場してたんだよ。

この頃、極真空手が分裂したときで、

だから極真の選手たちも何人も出てた。

結構な顔ぶれだった。

そこのルールは、まず腰より高い蹴りを

8本以上は出さないといけなくて、

慣れてる選手は最初の1分以内に8本出すんだけど、

おれみたいなローキック主体の選手にとっては、

こりゃ、厄介なルールで。

ほんと厄介なことになっちまうんだよ。

まず1回戦、でかいヤツで身長190センチ以上あったな。

塚本より全然デカかったな、土台が。

試合開始、まず30秒以内に8本、蹴っちまおう、と。

それから自分の空手が始まるな、と。

それが蹴るたびにランプが点いて
「蹴り4本」とか言ってんだよね。

そういうの聞いて、ああ、あと1本だな。
とにかく蹴っちまえ、と。
それから俺の空手が始まるな、と。

時計見たら、あと1本足りないや、って。
そうして急いで1本蹴って。

「蹴りOK、蹴りOK！ラスト1分」

ええ、ラスト1分かよ。
ここからおれの試合になるんかよ。

けったいなルールだなあ、こりゃあ、って。
いまだに、わからない。
なんで8本の蹴りなのか。
いやあ、わからない。

なかには相手に8本蹴らせなくて、
それで相手を失格にさせて勝っちゃう選手なんかもいたりしてて。
ダウン奪ってても8本蹴ってないと失格負けだから。

あれは、わかんないルールだったなあ。

おれはというと、さあ、今から初めて試合が始まったぞ、と。
前に絞って、クラウチング・スタイルで前に出て。

相手がパンチ、バンバン打ってきて、

それをグローブでブロックしながら、
右ローを合わせて行って。

もう、バッカンバッカン蹴ったよね。

で、見る見るうちに相手の足が、
内側にカクン、カクンと傾いてゆくのがわかったんだよね。

さあ、こいつは効いてきたぞ、と。
コーナーに追い詰めて、ジャブからの右フックを
一呼吸でパパンと入れたら、まともに入った。

バカーンと入って、そこでレフリー・ストップ。
文句なしのTKO勝ち。
倒れなかったけど戦意喪失させたから。

1分間で勝った、って感じだよね。

そうして控室に戻ったら竜司さんが喜んでくれて。

「おお、いいね、今日はスピードも乗ってるねえ。
わしが教えたんだから間違いない。
今日は優勝できるから、間違いないから。
とにかく腰より高い蹴りを8本蹴れよ。
失格になっちゃうから、とにかく8本蹴れよ」って。

そして2回戦、こいつもデカイヤつだったなあ。

試合始まって、いきなり相手が左パンチを出してきて、
それに対して、かぶさるようにして打った俺の右フックがキレイに入って。

そしたら相手が俺にクリンチしてきて。
おれがパッと退がったら、相手は前のめりに、
もんどり打って倒れたんだよね。

いきなりダウン奪った。

相手はまた立ち上がったんだけど、
そして続行になった。

これで俺は勝てる、と思った。

相手は、いきなり8本蹴って、
それから、こいつは俺に抱きついて、
クリンチばっかになっちゃって。

おれは間合い取れなくて、パンチがうまく入なくて、
もう、ぐちゃぐちゃな試合になっちゃって。

おれは、もう頭きて、カーツとなってる。

そして試合終了になって、
アナウンサーが「若狭選手は蹴りが8本足りません。
自動的に失格になります」だって。

なんだよ、これ…。

これで、おれの負け。

で、こいつ、その後の試合も勝って優勝してやんの。

もう、やってらんないよなあ。

控室で正道の宮本選手と話して

「ダウン取ったら関係なく勝ちだと思ったんだけど」って言ったら、
「いやあ、若狭さん、ここのルールはダメなんですよ」って。

そこに竜司さんも来て

「いやあ、ダウン取ったから決して負けやしないと思ったんですよ」って話して。

あいつが優勝で表彰式やってて、

おれは面白くないから帰ったんだよね。

そしたら格通の記者が、おれに格闘技通信の賞をくれて、

それが、おれの居ない表彰式にポツンと置かれてやんの。

あとから格通見て、ああ、わるいことしたなあと思って。

そしたら後日、わざわざ道場に取材に来て、

トロフィーを持ってきてくれたんだよね、

「若狭さん、期待してるんですから。がんばってください」って。

いやあ、うれしかったよねえ。

おれは試合には負けたんだけど、

14オンスの重たくて、でかい、ザブトンみたいなグローブで、

普通、重量級は10オンスだから。

K-1なんかも10オンスだから。

そんな、でかいグローブつけても、

おれは2人倒してるから。

自信ついたよね。

俺はKOできるパンチ、持ってるな、と。

それで竜司さんも同じように、おれにすごい期待かけるようになって。

「いやあ、絶対、若狭さんの時代くるよ」って言ってくれて。

夜に皇居を2人して走りながら、
そんなこと言ってくれるんだよね。

「いつか、絶対、でかくなる。
それが、わしゃ、おまえを男にしてやるんじゃ。
おまえは、わしのとこの門、叩いてきたんじゃ。
そりゃ、それなりの理由があるんじゃろからな。
わしに任せとけえ。
おまえを男にしてやる。それが、わしの仕事じゃからな」って。

そうして話ながら走ってて、
で竜司さん、手鼻するんだよね。

うわあ、って。

手鼻さえしなきゃ、なあ。

ここで今、やらなきゃ、
かっこいいところなんだけどなあ、って。

後姿見ながら、そう思っちゃったりしてて。

それから...数ヶ月が経って、
年末、日進会館主宰の姫路でトーナメントがあって。

招待受けて、俺と阿部修司っていう、
竜司さんのところの俺たちが呼ばれて、
それで出たんだよね。

それがさあ、あれよ…。

すんげえ、寒くて。

山のなかで、朝早く体育館に入ろうって行ったら、
もう外は霧が凍ってて、
もうキラキラ光っちゃって、もうダイヤモンド・ダストですよ。

「いやあ、もうキレイだよねえ」って。
阿部も「いやあ、キレイですよね」って。

もう、そう言うしかないもんね。

会場入ったら、リングがあって、
音響設備と照明なんか、テストしてて、
すごい豪華で。

もう、すごい音、低音で響くし、
照明なんかもディスコみたいに、グワーッと
まわって光ってて。

でも暖房ないの。

こういう設備にばっか金かけちゃって、
暖房費ないんだよね。

もう、寒くて寒くて、
試合終わるたんびに日なたぼっこしてたよね。
もう会場内も寒くてたまんないから。

まず、日進会館のトーナメントは
当日、くじ引きなんだよね。
30人くらいの無差別級トーナメントで。

で、阿部と「やるなら決勝で当たりたいよなあ」って話でて。
そしてクジ引いたら、お互い近い番号になっちゃって。
「うわあ、やっちゃったい」って、お互いシラーっとなっちゃってなあ。

「なんだよ」って2人で言ってて。

その場でトーナメント表が作られて、
控室に貼られて。

そしたら、俺と阿部のところで
バツとブロック2つに分かれてて。

「うわあ、よかったなあ！おお、あぶねえあぶねえ」って
お互いホッと胸撫で下ろして。
もう優勝しちゃったような気分だったよねえ。

竜司さんに言ったら相変わらず
うほほ、うほほ、って喜んでくれて。

それで、お互い違うブロック同士で、
とにかく、しかし寒くて寒くて。
ウォーミング・アップしても全然、汗でないし。
全然、身体あったまんないんだよね。

ありゃ、きつかったなあ。

結局、俺は3位になって。

右フック食っちゃったんだよねえ、ガッーンと。

こいつが金的ギリギリの膝蹴りばっか出してて、
わざとではないと思う。
おれは背が高いから。

ちょうど恥骨の辺りに、コツコツコツコツ入ってくんだよねえ。

おいおい、もうちょっと上蹴ってくれよ、って。
いやだなあ、って。
でも、審判にアピールしなかったから。
いやだけど、まあ、なんとかなるだろうと思ってたんだよねえ。

そしたら右フック食らっちゃって。

膝、カクっとなっちゃって。
会場がワーッと盛り上がっちゃって。

それがポイントになって負けちゃったんだよね、俺。

で、結局、こいつと阿部が試合して、阿部が優勝して。

竜司さん、ガックリしてて。
「わしの予想と違うじゃんかよ、おまえ。
なんで負けんだよ、あと一步のところまで」って残念がって。

俺と阿部が決勝すると思ってたのに、って。
いやあ、金玉に、って、そうは言えないからさあ。
あーあ、って。

ちなみに、その日の飲み会で、
日進会館の館長が酒ふるまってくれて。
みんな頭打たれたりして飲めないんだけど、
おれたちは酒好きだから、ガンガン飲んで。

そしたら阿部、べろべろに酔っ払っちゃって。
こいつ普段は紳士なんだけど、
酒飲むと、もう酒ぐせわるくて。

ガラッと人間、変わっちゃって。

そしたら審判に向かって
「おまえ、ちゃんと審判してんのかよ、おい！」って、
からんじやって、からんじやって。

おれは「すいません、こいつ酔っ払っちゃって」って、
謝りまくっちゃって。
最後には、もう小便漏らしちゃって眠っちまって。

もう完全に意識なくなっちゃってて。

そしたら館長がそれを見て、
「ああ、後はよろしくね」って苦笑いしてて。

ああ、すいません、って。

壮年部の人を手伝ってくれて、
2人して阿部をホテルに引きずって帰って。
もう完全に意識なくしちまってるから、
もう重くて重くて。

そういう重いやつを2人して、引きずるようにして連れてって。

そしたら壮年部の人に関西弁で
「こんな重たかったら、人なんか、よう殺せへんなあ。
死体なんか、こんな重いんやろなあ」とか言ってて。

この阿部ってヤツは、ほんと酒癖悪くてねえ。
士道館の道場のなかでやった忘年会のときなんか、

女の人をゲストで呼んだりする子たちがいて、
そうして女の子たちがいて、
そうして、みんなで相撲やろう、ってことになって。

「じゃ、おれも」って、
その相撲に参加したんだよね。

それで結構、年増の女の人を相手に、
おれは押し相撲みたいなことをやってて、
で、まわりは盛り上がってるから、
ウケを狙って両手で尻をワシ掴みにしたんだよね。

まわりはウケちゃって、大笑いしてんだけど、
当のおばちゃんは怒りだしちゃって。

「この男、尻触ったのよ、尻！」って叫びまくっちゃって。

で、そんな感じで道場での一次会は終わって、
じゃ、二次会へ行こう、ってことになって。
で、新宿のパブに、女の子たちも一緒にね。

そしたら阿部のやつが酔っ払っちゃって、
両サイドに女の子を置いて、
ドーンとテーブルに足のつけて、
酒飲んでんだよね。

で、女の子、挟んで、
その隣に俺が居るんだよ。
阿部に背中向ける形で隣のやつと話しながら。

そしたら、いきなり俺の背中、バーンと蹴ってきてさ。

「こいつかあー！」とか言ってて。

おれ、頭きて振り向いたら、
そのババアが「そうよ、こいつよ、こいつよ」って、
言ってんだよねえ。

おれ頭きちゃって「なんだと！」って立ち上がって、
傍にいた竜司さんが、まあまあ、って割って入って止めたこともあったんだよね。

そうすつと翌朝、いつもキチツとしちゃって
「あっ、どうも若狭さん、おはようございます」って。

もう何事もなかったかのように。

「おまえ、大丈夫かい？」って聞くと
「えっ、なにがですか？」って。

「ま、大丈夫ならいいんだけど」って。

もう先輩たちがまわりに居るのに、
テーブルに足乗っけちゃって酒飲むんだから、
強烈だよ、こいつは。

で、こいつは後に道場やめちゃうんだけど、
もう死んじゃうんじゃないか、っていう悲壮な置手紙残して。

そしたら後に添野館長が主催したMAキックの大会に、
ちゃっかりエントリーしてきたんだよね。
みんな心配してたってのに、もう、平然と。

これには、さすがの添野館長も怒ったよねえ。

「阿部は破門だー！」って怒鳴ってたよねえ。

いやあ、いろんなヤツがいるもんだよなあ、ほんとにねえ。

で、俺はというと、

その後、レスラーと戦ったりなんかもしたんだけど、

ルールがどうこうとか言って、

結局、もう、どーしよーもないドロドロの泥試合みたいのも経験したりして。

第十三章 真夏、プロ・デビュー戦の泥試合と、夜の二回戦

そうして、ようやく俺のプロ・デビューになって、
ようやく相手も決まって、ギャラは5万円だったけど、
とりあえず悲願のプロへ。

相手はミドル級のランカーで、
ソルジャー緒形ってのがいて。
試合3週間前に決まって。

体格差があるんだけど、とりあえず決まって、MAキックで。
試合知らされてから試合まで時間が短かったんだけど、
なんとか調整つけて。

初めてのプロの試合だから、こっちもワクワクしてて。
ギャラはまだ少ないけど、
よし、カネをもらえるようになったんだ、と。

これに勝って、高い報酬を貰えるようになれば、
生活、立てられる。

真夏の試合、後楽園ホール。

それまでの俺の仕事は、相変わらず警備員の仕事してて。
そこで26歳の若い監督がいて、
若いんだけど顔はすごいおっさん臭くて。

格闘技好きなもんだから
「若狭さん、絶対行きますよ」って。
彼女と一緒に行きますよ、って、
チケット半額で売ってあげて。

で、試合当日になって会場入りして。

竜司さんはメイン・イベントで。

控室にいと、竜司さんは、

普段から、もう、あっちこっち飲み歩くから、

そういうお店の人たちが、いっぱい来て、

「竜司さん、今日はがんばってください」って、

もう山ほど花束持ってきてくれて。

バーのマスターとか、キャバクラのギャルたちとか、

新宿二丁目のおかまのママも花束持ってきてたよねえ。

俺らも一緒に飲み連れてってくれたから、

みんな知ってる人たちなんだけど。

そしたら竜司さんが

「こいつらも今日、試合だから、こいつらにも、

たらいまわしに花束やってくれや」って言ってくれて。

そしたら俺の試合になったとき、

リングに上がると、

もう、ずらーっとギャルたちが花束持って並んでくれて。

おれなんかも、それ、ひとつずつ花束受け取って、

それをセコンドに手渡して。

それがゾロゾロゾロゾロ、延々と続くんだよね。

ギャルから飲み屋の女将から、オカマまで、もう延々と。

もう会場からは、おいおい、まだかよ、って、

笑いが巻き起こっちゃったりしてて。

それなのに1人だけ参加しないキャバクラの女がいて。
ガラガラ声の女なんだけど、
始めは俺と阿部とで行ってた店なんだけど、そのときは、その女、
最初おれに気があったんだけど、
後から竜司さん来たら、竜司さんのことが気に入っちゃって。

この日も
「わたしは竜司さんのために花束持ってきたのに」って、
ふくれちゃって、俺に花束くれねえでやんの。

あの女は許せないよなあ。

これから試合だってのに、
なんか余計なこと考えてたよなあ、おれ。

そのとき、極真の先輩も来てくれてたんだよね。

それで、ようやく試合が始まって。

相手はサウスポーだったから、
俺はオーソドックスだったから右のローが、おもしろいくらいに入って。
もうバンバン入って。

そしてローから首掴んで、
顔面膝蹴りやっちゃったんだよね。

そしたら原点1だって。
顔面膝が禁止されてたんだよね。

でも、もうこっちは気持ちに乗ってて。
もうロー、効いてるし。
キック・ボクサーはロー、弱いから。

だから、もう、そのままローで、ガンガン攻めて。

これはローで倒せると思ったら、
相手は、こりゃ、やばい、って、
苦し紛れに俺の胴体にしがみついてきて。

MAは、クリンチをブレイクしないから。
どっちかの意思が、しがみつきたいなら、
そのままやらせとけ、延々に、という、
そういうスタイルだったから。

こいつ、俺の胴体にしがみついているまんまで、
そうして、なんだかおれは、じたばた、
届かない膝蹴りやり続けたりしてて。

俺はクリンチは好きじゃなかったから。
俺は村上竜司スタイルで、
クリンチしないで倒しに行くスタイルでやってたから。

こっちは、もう打てねえし、蹴れねえし、
相手は体格差あるし、打たれて、こりゃヤベエってんで、
もう、おれのカラダにぶらさがっちゃって離れやしねえ。

なんだよ、男なら戦えよ、って。

おれは、もう頭きちゃって、

ヘッド・ロックしてバンバン頭叩いちゃったんだよね。

これで原点2つ目。

この後も、もう俺が殴ろうとすると、
しがみついてきて、
ローを蹴ろうとすると、しがみついてきて。

もう試合になんない、
灼熱のスポット・ライトのなかで、
どろどろの試合で消耗しちゃってて。

そうして最終ラウンドになって
「頭から水ぶっかけてくれよ」ってセコンドに言って、
もうバシャバシャバシャってペット・ボトルの水を
頭からぶっかけてもらって。

真夏の試合だからね。

もう、ずっと相撲みたいな試合で体力空まわりに消耗しちゃってたから、
この頭から水ぶっかけられて、ほんと生き返ったよねえ。
そんな感じだったねえ。

俺、よっしゃあ、って、ガバーッと立ち上がって、
このクソヤローが、って、相手のコーナーを思いっきり睨みつけて、
パンチとローを打つゼスチャーを全身でやったんだよね。

男だったら、打撃で戦えて、アピールして。

そしたら会場もワーッと沸いて。
分裂したての極真の連中も来てて、
そうだそうだ、って盛り上がって。

もう俺と同じ、会場の連中も
ずっと煮え切らない試合見せられてるジレンマで、
「そうだ、そうだ！」って、みんなして盛り上がっちゃって。

最終ラウンドのゴングが鳴って、
俺はもうパンチとローのラッシュで猛攻よ。

そしたら相手はロープにもたれて、
また俺の胴体にしがみつikyがって。

もう突き飛ばして、そこにドコーンとパンチぶちかまして。

そしたら「わあーっ！」って悲鳴あげちゃって、
また俺の胴体にしがみつikyがって。
こいつも必死なんだよね。
必死こいて、おれの胴体にしがみつikyがって。

それで最終ゴング、聞いちゃうんだよね。

カンカンカン、って。

それで判定、おれ原点あるから、
おれの負け。

おれは思ったね。

これはキックの試合でもない、空手の試合でもない。
男の試合じゃない。

「なんだよ、この試合はよおー！
男だったら、離れて闘うもんだよ、打撃で闘うもんだよ！」って、
試合場で怒鳴ってたよねえ。

もうエキサイトしちゃって。
なかなかリングを降りなかったよねえ。

昔のケンカのあのことを思い出してたよねえ。
おれにしがみついていた、
あの小泣きジジイ戦法。

あれを思い出してたよねえ。

でも、この日の試合で、いちばん会場が盛り上がったよねえ。

俺は自分の戦績に、この試合は入れない。
これ、試合じゃないよ。
ほんとに。

もうセコンドに、もういい、もういい、って抱えられるようにして、
リングを降りて。
もう俺、興奮しちゃって怒鳴りまくって。

そしたら花道で格通の若い記者がいて
「どうでしたか試合は」とか言われて
「俺は負けてねえー！」って叫んで。

そしたら、それが、そのまま記事になっちゃって。
この日の会場で、いちばん盛り上がった試合って書かれてて。

とにかく、もう俺は控室に戻ってもテーブルぶっ叩いて、
「いつでもやってやるぞ、この野郎！」って荒れまくってて。
荒れまくって、先輩になだめられて、
「まあまあ、若狭、しょうがない。もう飲み行こうぜ」って、
そうして、そのまま3人で歌舞伎町へ。

コマ劇場の近くで、
それじゃ、女の子でもいるところ行って気晴らししよう、って話したら、

すごい真面目そうなサラリーマン風のおにいさんが
「どんなお店をお探しでしょうか」ってビラを見せてきて。

なんかゴージャスな雰囲気、
「今日は特別に1人1万円にしましょう。
女の子もつきますし、サービス料も込みにしますので」って。

「ああ、じゃあ、ここにしよう」って。
先輩、そいつに3万円支払って、
じゃあ、3人分、これでね、って。

「じゃあ、どうぞ、どうぞ」って、
1階が立ち食いソバ屋の細長いビルで、
そこの5階に連れてかれたんだけど、
もう全然、ビラの写真と違って、きつない店なんだよねえ。

で、店に入ってテーブルに座ったじゃない。
そしたら店員が来て、いきなり
「1人5万円になります」って言うんだよ。

「えっ」

だって最初に3万円払ったじゃない。
そしたら合計18万円ってことじゃない。

したら控室からゾロゾロゾロゾロ、柄の悪いの出てきて。

「ああ、そういうことね。あー、そーいことですか」って
俺、言って。

先輩も頭来て「なんじゃ、そりゃー！」って怒鳴って。

俺は、もう、ついさっき、煮え切らない泥試合したばっかだったから、もうスイッチ入るの早かったよね。

おれは、そのまま立ち上がって、目の前に居たやつをヘッド・ロックしてぶん投げて、そのままバンバン殴りまくって。もう、いい、ってくらい、ぶん殴り続けて。

店内、薄暗いから、ハッキリは見えなかったんだけど、目の端で、先輩も暴れまくってんのは、わかったんだよね。

もう、バツカンバツカンやってんだよね。

おれ、もうイッちゃってて叫んでたよね。

「こりゃあ、包丁持ってこいやー！
刺してみろ、コラアー！
ケツ持ち呼べやー、コリャアー！
どこの組のもんじゃあ、連れてこいやー！」って怒鳴りまくってて。

「てめえー！おれを誰だと思ってんじゃあー！
士道館神田道場の若狭弘幸じゃあー！」って怒鳴り声あげて。

もう、俺は、こいつら殺してやろう、と。

初めてだよね、人、殺してやろう、って思ったの。
包丁持ってこられても、こいつら殺してやろう、と。

もう何もかも捨ててやろうと。

そうして懲役行ってもいい。
そうして懲役行っても、この人たちは、
俺を見捨てないだろうから、って。

そう思ったよねえ。

そしたら先輩が
「行くぞ、行くぞ、もういいよ」って、
俺の顔、叩いて。

俺は、もう、いっちゃってたから、
全然、覚えてなくて。
でも、ちょっとずつ我に帰って。

そうして出口に行ったら、
大柄な店長が立ちふさがってて。

「おめえ、鍵あけろ、コラァ！」って
先輩が怒鳴って。

それが、もう最後のがんばりなのか、
まあ、若い衆がいっぱい居るから、
そういうメンツあるもんだから、
もう黙って立ちふさがってんだよね。

それで先輩、バカーンって、
そいつの顔面、思いっきりぶん殴って。

もうグチャっていう音がして。

倒れ込む相手の背中に肘を、もう何発も打ち下ろしてて。
そうして鍵取って。

俺は後ろのほうにいる若い連中に
「てめえ、レジ開けえやあー、コラーッ！」って怒鳴りまくって。

さっき先輩が払った3万円、取り返そうと思って。

「若狭、カネは、もういいよ」って言うてくれたんだけど、
こりゃ、どうにも俺としては許せなくて。

そうしてレジ開けてる若い男をバコバコぶん殴りながら、
「早よせいやー！」って怒鳴りまくって。

そうして、ようやくレジ開いたら、
何万円か入ってんだよね。
それを俺はガバッとわし掴みにして、
ポケットにねじこんで。

そうしてエレベータに向かったんだけど、
なかなか来ないんだよね、エレベーターが。

もう、来ない。

階段もないし。

こうしてる間に、後ろの連中が来るんじゃないかと思って、
もう、俺、またスイッチ入っちゃって。

「こらあ、てめえら、必ずブツ殺しにくっかんなあー！
待ってろ、この野郎！」って怒鳴り続けて。

もうエレベーターの扉を、
もうガンガン、ガンガンぶっ叩きながら怒鳴りまくってて。

よく、犬が、こっちくんな、って、
猛然とワンワン吠えるじゃん。
そんな感じよ。
もう、吠えまくる犬の心境そのままだよな。

そしたら、ようやくエレベーターが来て。

そうして3人で乗り込んで。

そしたらエレベーターのやろうが3階で停まりやがって。
扉開いたら、
また柄の悪いヤクザみてえのが、ぐあーっと立ってて。

上ですんげえ音すっから、
覗ききたんだよね。

多分、このとき俺たち3人、
すごい顔して、こいつらを睨んでたんだろなあ。

お互い、黙ったまま、そのまま睨み合ったまま、
そうして、また、ゆっくりとエレベーターの扉が閉まっていったんだよね。

そして、ゆっくりエレベーターが下に降りてって
再びドアが開いて、よーやく表に出られた。

はあー...っていう。

それにしても、この爽快感。

そうして、ちょっと離れた喫茶店に入ったんだよね。

そして取り返した金を先輩に渡したら

「いやあ、これはいいよ、おまえ、とっとけよ。ボディー・ガード代だよ」って
言ってくれて。

もう2人共、もう気分爽快って感じで

「いやあ、若狭すごかったよ、いやあ、よくやった若狭」

「男をあげたねえ」ってニコニコ笑って喜んじやって。

いやあ、もう先輩たちも、

わざわざ海外から時差ボケのなか、

もう極真の組織も離れてんのに応援きてくれて、

酒までおごってくれちゃう、っていう、

そういう人たちを騙そうだななんて、

もう、俺、スイッチ、入っちゃうんだよねえ。

夜の2回戦。

やっぱ現役当時、スイッチ早いねえ。

損得とか考えなかったよねえ、あの頃は。

歳取ると、訴えられちゃうんじゃないかねえとか、

そういう損得いろいろ考えちゃうから、

さみしいよねえ。

時代とかも、あるんかねえ。

で、この、ぼったくりバー乱闘事件は、

後々、みんなに語り継がれるエピソードになっちゃったんだけどね。

みんな、うらやましがってて。

いやあ、そんな店で、

おれも暴れてみたいなあ、って。

みんな、そう思ってね、うらやましがってね。

そういう、ひとつの時代をね、

心から信頼できる先輩たちと過ごせたというね、

それは、よかった、っていう、

そういう気持ちは、今あるよねえ。

その後、月日は何事もなかったかのように

風のごとく流れてって。

試合もいくつこなして。

気がつくとおれランキング3位に君臨してた。

第十四章 サムライ・チャンネル開局記念試合に出場

そして秋から冬に変わろうという、
そんな頃、いつものように道場行ったら、
竜司師範がいて。

そのとき、まだ試合とかなかったから道場には誰もいなくて、
俺と竜司さんだけ。

そうして2人して、また皇居、走り行って。

2人で肩並べながら軽くランニングして。
いつになくおおらかな雰囲気。

「おまえ、わしんとこきて、よく、ここまで、がんばってきたなあ」って、
ポツンと言うんだよね。

えっ、なんで竜司さん、そんなこと言うんだろ、って思いながら、
俺は、ただ「オス」って返事するだけで。

どしたんだろな、って思って。

そうして皇居一周して、道場へ戻って。
マンツーマンでミット練習して。

「じゃ、今日は誰も来ないし。
もうサウナでも行こうか」ってサウナ誘われて。

新宿のサウナへ行って、
2人で、あったかい湯につかって。
すると竜司さんが、ポツポツと話だすんだよね。

それは何かというと、
今度、衛星チャンネルで、
格闘技専門チャンネルっていうのが出来て、
それが24時間、格闘技の番組を放送することになって。

この開局記念で、
竜司さんはジェラルド・ゴルドーと戦う予定だったんだけど
急ぎよ、ゴルドーが試合に出られなくなっちゃって。

「だから、おまえ、わしと試合せんか」って。

「えっ！」って言っちゃったよね。

俺なんか、まだ新米みたいなもんで、
全然、ランクが違うわけじゃない。

「ええ、俺なんかで、いいんすかつ」って。

「ああ、おまえは、わしを倒すつもりでこい。
そうすりゃ、おまえも名が挙がるから。
そういうつもりで、向かってこいや」って言ってくれて。

ああ...って思っ。

その瞬間、まるで走馬灯のように、

竜司さんとの出会いから、これまでの付き合いのことが、
ほんとに、まるで走馬灯のように頭のなかに浮かんできて。

女房と一緒に富士山に連れてってもらったこともあったし、
いろいろ美味しいものを食わせてもらったり、
親身になってコーチしてくれた日々のことが、
ぱあっ、と走馬灯のように。

あの新宿のボッタクリの店で暴れた後も、
俺、竜司さんに言ったんだよね。

すいません、
俺、その店で、ここの道場の名を名乗っちゃったんで、って。

そしたら竜司さん、
「うん、わかった。そういう連中、道場に来たら、わしに任せとけ」って。

ただ、それだけ言ってくれて。

男、だよねえ。
それに、やさしい、よねえ。

一緒に肩並べて風呂につかりながら、
そういうね、恩義が、そういう出来事が、
ぱあっ、と、頭のなかにね、まざまざとね、浮かんだよねえ…。

この時、俺は34歳。
ついに大舞台だな。

次の日から、まったく違う感覚で練習が始まるわけよ。

これまでは、ただ単に目の前に立つやつを倒せばいいだけだったのに、これから、この人と戦うんだ、と。

竜司さんは俺より2つ年下なんだけど、そんな年齢なんか関係なく、尊敬してる自分の師匠であり、兄貴であるという、そんな人と、戦うんだな、と。

憎しみなんか、もちろんないし。
ただ、この人の期待に応えたい、
自分の成長も見てもらいたい。

この人の胸を借りたい、と。

そう思って練習が始まってゆくんだよね。
感動しながらね、練習に取り組んだよね。

これは俺の人生のなかで、
深い意味で、メインになる闘いになるんだろう。

週3回、竜司さんとの選手練習に参加して、
そうでない他の日も、おれは道場に行って練習してて。
このときは、まだ、あの阿部もいたから。
こいつも俺の練習に付き合ってくれて。

よし、勝ってやろう、と。

そうして阿部相手に、もうガンガン、スパーリングやったよね。

で、この試合の審判が、

また竜司さんの師匠で松尾師範っていう人で。
神田道場の責任者で。

おれが対・村上竜司戦を意識した練習を続けてるのを
普段から松尾師範が見てて、だから当日、俺に
「いや、村上は強いからさ。危なくなったら、すぐタオル投げるから。
それでいいじゃないか。エキビジョン・マッチなんだし」っていうんだよ。

いやいやいや、待ってくれよ、そんなの。

「いや、待ってください。
セコンドのみんなも。
これは、おれにとってはハンパなものじゃないんです。
人生を懸けた試合なんですよ。
倒れても、タオルは絶対、投げないでください」って。

そう言ったら、松尾師範、深く頷いて。

「わかった」って言ってくれて。

忘れないよね、あのときの松尾師範の男らしい顔。
武道家の顔だよね。

試合は開局記念、クリスマスだったね。

いつものキックとか空手の試合だとチケットが入ってくるんだけど、
まったく違う大会だから、おれたちにチケット入ってこないんだよね。

で、そのことを女房と子どもに説明して
「だから来れなかったら、来なくてもいいよ」って言ったんだよね。

このとき夢信は4歳くらいで。

試合当日、竜司さんの家に選手集合ということになってて。
チケットないし、女房と子どもも金ないから、
だから、いつもとは違って、おれ1人だけ竜司さんの家に行って。

そしたら白いベンツと黒いベンツが停まってて。
白いベンツが俺のセコンド陣、
黒いベンツが竜司さんのセコンド陣。

みんな裏家業だから。

会場は代々木体育館で。
おれたち上下だぼだぼのボンタンみたいなジャージで、
胸に銀の刺繍で『士魂』って書いてあって。
肩にも銀の刺繍で『士魂隊』って塗ってあって。

まるで右翼の格好なんだよねえ。

周囲の人たちは、びっくりしてたけどね。
大会はアントニオ猪木さんの主催だったから、
周囲のプロレス関係者とか、びっくりしちゃってたねえ。

ちなみに、この格好で六本木行ったとき、
ウルトラマンの塩谷が働いてたバーへ行ったんだよね。
ウルトラマンに入ってた塩谷。
そうそう、自殺しちゃったあの塩谷ね。
そしたら「あっちの人たちが呼んでますよ」って。

見ると、もう外国の金髪のダンサーたちが、
おれたちに「サムライですか」とか、
もうキラキラした目して、そう言うんだよねえ。

いやあ、あれは気持ちよかったなあ。

で、試合ですよ、代々木体育館に入って、
パンフレット渡されて、でかいんだよねえ、パンフレット。

そしてバツと開いたら、早々たるメンバーが出場してて。
そして見たらカラー・ページで、
俺と竜司さんのことが紹介されてんだよねえ。

おれも竜司さんと同じように、
写真と経歴が、まるまる1ページで載ってんだよねえ。

いやあ、すげえな、って思って。
こんなにデカデカと紹介されるの初めてだったからね。

緊張もしたよね。

そのまま通路入って、竜司さんと別々の控室入って。
わりと早く入ったもんだから時間あって、
精神の統一をしたり、セコンドとしゃべったりしながら、
それでウォーミング・アップに入るんだよね。

そこまでは、いつものことなんだけど。

それでセコンドが、
今、始まっている会場の状況を説明しに来るじゃない。

で「次の次ですよ」って伝えにきてくれて。
「じゃ、そろそろ行くか」って。

道衣に着替えて通路に出るんだよね。

会場に向かって、セコンドと一緒に通路を歩いて行って、
会場に出る直前、係りの人がいて柵があつて。

前の試合、リングでやってるのを見て、
この次だな、って、そこで待ってて。

そして係りの人が
「音楽が鳴ったら出てください」って。

俺は青コーナーで竜司さんより先に入場するから。

音楽が鳴るのを待っているとき、
あの日、あのときテレビで観た、
俺が格闘の世界に入るきっかけになった、
あの浜田剛史の試合のことを思い出してたよね。

尊敬する人、自分の師匠と闘う大舞台。
こんなの男として、一生に一度、あるかないか。

よく、こんな俺に、こんな大舞台を与えてくれた。

ほんとに、感無量。

これから俺の人生に、どんな大きな試合が組まれようとも、
この試合以上のものはねえな。

もう、どうなってもいい。

今日この日、この試合だけで、もう、どうなったっていい。

音楽が鳴って、

係りの人が俺の胸の辺りを手で抑えながら

「まだ待ってください。まだ待ってください。

5、4、3、2…」って数えて、

「はい、どうぞ」って。

もう、頭、パーとしちゃって、

もう、どんな音楽流れてんのかも、わかんないまま、

そうしてリングへと歩き出したんだ。

バンって、スポット・ライトが俺を照らして。

スポット・ライトは、眩しくて、

まわりが真っ暗で全然、見えなくて。

ただ足元をたよりに歩いたんだよね。

もう、昂揚しちゃって。

気持ちがいいんだよね。

人生の晴れ舞台。

もう、心から気持ちいいんだよね。

ずっとテレビ・カメラが俺を追ってて、

そうしてリング下で、やっぱり、ぐわっ、って

リング上を見上げるんだよね。

うおお、眩しいもんだぜ、って。

そうしてリングに上がって、
ロープに背中なんか預けて、背伸びみたいに伸ばして。

そしたらアナウンサーの声が聞こえるんだよね。

「若狭選手は村上竜司選手に憧れてこの世界に入ったわけですから、
これは、まさに夢の舞台、大舞台ですね」

とか言っちゃってんだよ。

ああ、聞こえるもんなんだなあ、って思いながら、
そうなんだぜ、おれはやるぜ、って。

「おお、やってやるぜ！」ってセコンドに向かって叫んで。

もう頭、イッちゃってるから。

今度、赤コーナーから竜司さんが登場してくるんだよね。
対戦相手としてリングから竜司さんを見るのは初めてだったから、
ああ、来たよ、来たよ、って。
あ、すげえなあ、やっぱり、って。

普段、一緒に遊んだり、酒飲んだりしてるのとは、
まったく別人みたい。

やっぱ、すげえなあ、エンターテイナーだなあ、ってね、

そう思ったよねえ。

それでリングに竜司さん、入ってきてさ。

それで中央で、それで主審の松尾師範がいて、
注意事項、なんかやって、
おれと竜司さんは向かい合ってた。

おれは心のなかで
"今日は出し切りますよ"ってね。

両者コーナーに戻って、
そのとき竜司さんは絶対、早いラウンドで倒しに来るな、と。
だから抑えめに戦って、あの左フックだけは絶対、警戒して行こう、と。

1ラウンドとか2ラウンドとかでは、
絶対、倒されたくないから。

練習でも竜司さんとやって、
あの左フックで倒されたことあったから。

あのフックは全然、見えないんだよね。
だから絶対、あれだけは、って。

で、ゴングが鳴ったんだよ。
カーン、と。

で、案の定、倒しに来たね。
コンビネーションで、ロー、ミドル使いながら、
パンパンパーンと、キレのある攻撃で倒しに来たよね。

俺はというと、いつもは顎の辺りのガードなんだけど、
コメカミまで腕のガードを上げて、
竜司さんの攻撃に対して、1発、2発だけ返すという、
わざと、そういう動きにしたんだよね。

竜司さんはキレイに、強烈な左右のローキックを打ってきて、
ああ、このローで誘って、パンチで仕留める気だな、って。

ああ、やっぱり強いな。
こりゃ、みんな倒れるわな、って。

でも、おれは絶対、この両腕は下げないですよ。
絶対、KOはされないですよ。

スネ受けもしなかった。
スネ受けする、ってことは、その時点で、
もう既に下に意識が向いちゃってる、ってことだから。

だから、そのまま強烈なローをもらってて。
ああ、このロー食らい続けて5ラウンドもつかな。

でも、いちかバチかだな。

そうして終始、村上竜司リードで試合が進んで。
でも、これは、おれの想定内。
あの猛攻にあわせてたら、おれはやられる。

1ラウンド、2ラウンドは、これでいい。

もう、足は捨てる。

竜司さんは、これまで5ラウンドやったことないから。
5ラウンド、おれがもつか、竜司さんがもってゆくか。
勝負だ。

絶対、KOされない、っすよ、竜司さん。

あなたの十八番の左フックは、絶対、もらわない、っすよ。

1ラウンドが終わってセコンドに戻って、
差し出されるペット・ボトルの水を、グーッと飲んで。

するとアナウンサーの声が、またしても聞こえてくるんだよね。
余計な声が。

「さすが村上選手、切れ味がすごいですよね」って、
竜司さんのことほめまくってて。

「いやあ、若狭選手、あれだけローキックを受けて、
もつんでしょうか？」とか言ってて。

そしたら、もう1人が

「うーん、若狭選手も村上選手にあこがれて、この世界に入ったんですから、
もうちょっと、がんばらないといけないですよ」とか言っちゃってんのよ。

このド素人が、こりゃ、作戦なんだよ、黙っとけ、って。
イラつくんだよねえ、ヤツらの声が。

するとセコンドは俺の気持ちを察してくれて、
やさしいんだよね。

「大丈夫、若狭さん、見えてる、見えてるから」って。
ローをもらってることには、ふれなかったよね。

それで2ラウンドが始まって、
コメカミ辺りにガードを、ガッチリと上げて。
そのグローブにパンチが来るんだけど、
ガードしてるから大丈夫。

ローは効いてたけど、
おれも反撃してるから、
丸々3分間、もらい続けてるわけじゃない。

倒しにきてる竜司さんの動きを、
おれはグローブの隙間から見てた。

2ラウンドも終わり、お互いコーナーに戻ってきて。
ああ、2ラウンド、しのいだな、と。
足にしても、そんなに効いてはいない。

これは、おれは空手の世界に後に復帰して、
初めてわかったことなんだけど...
ローキックっていうのは、間に時間を置くと効いてくる。
空手の試合はトーナメントだから丸1日あって、
試合と試合の間、その時間が長いから、
だんだん足が張ってきて、効いてきちゃう。

ところがキックはインターバルが1分だけ。
こうした短い時間では、足はそんなには効いてこないんだよね。

このとき、
おれが竜司さんの強烈なローキックを何発も食らってても
耐えられた理由は、これだったんだ。

もし、これが空手の試合だったとしたら、
たとえ竜司さんとの試合に勝ったとしても、
次の試合では足がダメになって負けてたろうね。

そして2ラウンドを耐えたおれは、
落ち着いてきた。

よし。

3ラウンドのゴングが鳴って、
今度、俺の攻撃が始まる。

竜司さんは倒しにきてたから、疲れがきてる。
それが、わかった。

竜司さんが向かって来る。

これに対して、スッと小さなバック・ステップをして、
そして左のジャブ、ジャブ、ジャブ。
続いて時折、膝蹴りをボンと出しながら。

竜司さんが前に出るとき、カウンターを取ってゆく。

おれは、これまでスタミナ使ってないから、
動けるんだよね、このラウンドは。

そして3ラウンド、イーブン。

セコンドと話して。

「今のイーブンくらいだよな？」

「ええ、イーブンくらいですね。

足、大丈夫ですか？」

「うん、大丈夫」

「パンチだけは、もらわないでくださいよ。

相手、倒しにきてるから」

「うん、わかった」って。

そんな会話して。

かなり落ち着いてきてて。

そしたら審判の松尾師範が興奮しちゃって、

おれのところにやってきて

「次、4ラウンドだぞ、4ラウンドだ。

うん、若狭、いい試合だ」って、

それだけ言ってパッとレフリー・ポジションに戻って行って。

この若狭、二本の足で立ってる以上、負けてないですから。

絶対、タオル投げないでください。

そういう、おれの気持ち、松尾師範、わかってくれてんだ。

そして4ラウンド開始のゴング。

いつもなら今のラウンド集計どうなってるんだろ、って

おれの頭のなかで、そういう計算が始まるんだけど、

このときは、まったくなかった。

この試合、そもそも勝ち負けなんて捨ててるから。

ただ、おれを出しきろう、と。

絶対、倒されないぞ、と。

それだけだから。

それだけが、おれの試合だったから。

そうして、このラウンドから

一進一退の攻防になってゆく。

竜司さんはペース・ダウンしてきて、

竜司さんは左のジャブから右ストレートを打ってきて、

おれも、それに応えて、

左ジャブから右フックを打ち返して。

バコーンとヒットして。

どうですか、竜司さん。

これが竜司さんに教え込まれた右フックですよ。

おれ、ニヤッと笑っちゃって。

うれしくて。

何がうれしい、この瞬間のすべてが、うれしい。

でも、さすが竜司さん、

倒れずに強烈に反撃してくる。

するとアナウンサーの声が聞こえてきて

「あ、このラウンド、若狭選手、盛り返してますね」とか言っちゃってて。

でも、もう1人のアナウンサーが
「ああ、そうですか」とかそっけなくて、
この野郎とか感じながら。

そうして、ついに最終ラウンドのインターバル。
レフリーの松尾師範、ますます興奮してきて
「いいか、若狭、5ラウンド、5ラウンド！
最終ラウンドだぞ、最終ラウンドだぞ！」とか言いなきて。

レフリーは、こうして両サイドに、
ラウンド数を教えに来てくれるわけなんだけど、
これ、ありがたいんだよね、あれ、次、何ラウンドだっけ、って、
わかんなくなるときあるから。

でも、この試合、このラウンドを
おれは数え間違えはしない。

そして迎えた最終ラウンド。

よし、これで、自分は、もう出し切る。
もう出し切りませぬ、竜司さん。

そして猛然とラッシュ。

竜司さんは俺の猛烈な攻撃を、
両腕をガッチリとブロックしながら、
こうして、ゆっくり上体を揺らしてて。

なぜか、ここで俺、泣けたんだよね。
目頭がグッと熱くなった。

竜司さん、もっと来いや、もっと打って来いや、っていう、
そんな竜司さんの心の声が聞こえたんだよね。

そんなこと竜司さん、ひと言も言ってないんだけど、
おれが勝手に思ってるだけなんだけど、
おれには、そんな竜司さんの心の声が、聞こえたんだ。

もっと打って来い、もっと打って来い。
男をあげろや、若狭。

そうして強烈な攻撃を続けて、
もうバッコン、バッコン、殴り続けて、
バコーンとロー蹴って。
竜司さんのコーナーの近くで、
俺の猛攻が続いてて。

そんな攻撃の一瞬、
俺の左腕をすり抜けて竜司さんの右ストレートが入ってきて、
これが俺の顎にガツーンと。

頭が大きく揺れて、
この瞬間、意識が朦朧とした。

やべえ、効かされたのわかつちゃったかな。

このとき、とっと一、って、
女房と子どもが俺を呼ぶ声が聞こえて。
ああ、来てんだなあ、なんて、
一瞬、ぼんやりとした頭で、そう思って。

そしたら竜司さんのセコンド陣もさすがで

「竜司さん、今の効いてますよ、効いてますよ、顎ですよ、顎！」って
アドバイスが飛んできて。

竜司さんが向かってきた。

残り時間1分半。

やべえ。

こりゃ、極真魂。

空手の最終ラッシュ。

やる、のみ！

「うお————っ！」

叫びながら猛然とラッシュ。

パンチ、蹴り、体力が続く限り、

体力が切れても、ただ根性、もう魂のみで、

ただ打ちまくる。

その結果、俺が一方向的に打ちまくって、

最後の30秒は、竜司さん、まったく手が出せなくなって。

竜司さん、ふらふらになりながら、

おお、若狭、強くなったなあ、

遠慮すんな、打ってこいや、もっと打ってこいや、って。

そんな竜司さんの心の声が、おれには、たしかに聞こえたんだ。

俺は猛然と打ち続けた。

そして、試合終了のゴングが鳴り響いた。

判定になる。

「ジャッジ赤、村上竜司。ジャッジ...青、若狭弘幸」

場内、おおっ、と
どよめきの声が響いて。

そして最後の審判が「ジャッジ...赤、村上竜司」とコールされて。

また場内が、大きくざわめいて。

俺は判定負け。

でも、そんなことは、どうでもよかった。
おれは、最初から、この試合、勝敗なんて関係なかったんだ。

それで、すぐさま俺は竜司さんのコーナーに走って行って
「今日は自分のために、どうも、ありがとうございました！」って頭さげて。

ほんとに感謝の気持ち。
ほんとに、うれしかったんだよ、おれは。
心から、うれしかったんだ。

そしたら竜司さんが

「いやあ、若狭、よくやった。よくやったよ」って言うてくれて。

で、そのまんまリングを降りて、

控室へ戻って。

マスコミも追っかけてきて。

控室までマスコミがバアーッと入ってきちゃって。

「いやあ、村上さん、今日はどうでしたか？

弟子と戦って、どうでしたか？」って。

それで竜司さん、おれのことをアピールしてくれて。

記者たちは、竜司さん、今日は調子悪かったんじゃないんですか、

とか言っちゃってて。

そしたら竜司さん、

「いやあ、こいつ強かったよ。あの判定、おかしいよ」って、

竜司さん、そう言ったんだよね。

それ聞いて、おれ、もう興奮しちゃって、思わずテレビ・カメラに向かって

「いや、竜司さんはね、今日この試合を組んでくれたのも竜司さんで、

今、自分がここに居られるのも、全部、竜司さんのおかげなんですよ。

竜司さんは、おれのことを拾ってくれて、

いちから教えてくれたんですよ。

今日、自分の身をもって、自分を対戦相手に選んでくれたんですよ。

今日は勝ち負けなんてね、眼中にないっすから」って、

そんなこと、おれはしゃべりまくってた。

そしたら竜司さんが

「いやあ、若狭、おまえは余計なこと言わんでいいぞ」って、

そう言ったんだよね。

それで、ふっと横見たら、

女房と子ども居んだよ、俺の。

あれえー、来てたの、って。

よく金あったねえ。

いやあ、ないから、とにかく会場きて、
でも高いから、お金ないし。

後楽園ホールの試合と違って高いから。
会場入り口で、ぼうぜんとしてたのよ。

そしたら場内の音が聞こえて、
青コーナー若狭弘幸、赤コーナー村上竜司、って
そういうアナウンスが聞こえてきて。

ああ、試合はじまっちゃう、
どうしよう、どうしよう、って。

それで近くに立ってた警備員さんに、
すいません、お金が足りなくて入れないんですけど、
いま会場で呼ばれたのはうちのダンナで、
会場に入ったら誰かからお金を借りて払いますので、
お願いですから入れてもらえませんか、って言って。

そしたら警備員さんが一緒に控室まで連れてってくれて、
そこに居た俺の兄弟分のヤクザ者が、
俺の女房と子どもの分のチケット代、払ってくれたんだよねえ。

いやあ、なんてこった、なあ。

「いやあ、悪かったねえ。

すぐ今回のファイト・マネー入ると思うからさ、
そしたら返すから」って、そいつに言ったら、
そしたら「いいよ、いいよ若狭の兄弟。
今日はいい試合、見させてもらったからさ、
たまたま通路きたら、おかあちゃんきてて、試合始まる前に、そこで会って。
事情聞いて、お金ない、って聞いたから。
だから、俺が2人分、払っといたから。
いいよ、いいよ、おごるからさ。
ファイト・マネーは家族で美味しいもんでも食いなよ」って、
そう言ってくれたんだよねえ。

いやあ...。
うれしい言葉だったなあ。

金なんかじゃないんだよ。
そこにある気持ちがね、うれしいじゃない。
ありがたいもんだよ、ほんとうに、
そういう気持ちがね。

ほんと、みんなに感謝したい。

ありがとう。

そうして身支度して、
カバンに荷物入れて、忘れものないように。

で、控室を出たら、
そこに巨大な冷蔵庫みたいな大巨人が立ちはだかってて。

目の前のグレイのスーツの胸元しか見えなくて、
ネクタイをたどって、ずーっと見上げると、
なんと伝説の巨人ウイリー・ウィリアムスだったんだ。

あの頭巾、かぶってるし。

15歳の初デートで、フラレるの覚悟して観た、
あの映画の熊殺しのウィリー・ウィリアムスですよ。

それにしても、いやあ、俺、見上げるってことないもんね。

いやいや、でかいわな。

「ユー・ナイス・ファイター」

ニコッと笑って握手、向こうから手差し出してきたんだよ。

いやあ、めっちゃ感動したよねえ。

「いやあ、サンキュー・ベリマッチ」って、
両手で握手したよねえ。

その日は、最高の日だったよねえ。

ただ、ただ、それだけだったよ。

第十五章 元ムエタイ王者との対戦

そうして月日は流れて...

勝ち星を、それなりに積んで行って、
ファイト・マネーも上がって行って、
10万円貰ったりすることもあった。

スポンサーも付いて、ボディ・ガードやったりもして、
収入も良くなってきたんだ。

そうして、いつものように俺が道場で練習してたら、
関係者がやってきて

「今度の対戦相手決まったぜ。
誰だと思う？
元ムエタイ王者のウイチャーンだぜ！」って。

ウェルターの王者だったんだけど、
今はミドル級になってて、
フリー・ウエイトでいって、もう契約決めたから、って。

その代わりウイチャーンが6オンス、
俺が10オンスのグローブとのこと。

「ああ、わかりました」って。

1月のMAキックの主催は土道館で、
タイトルは『マッハ』。

この試合はファイト・マネー20万の他に、
スポンサーが激励金とかで10万単位でくれて、

もし勝ったら30万円くれるという。

つまり勝てば60万円。

その他、スポンサーが、また他の関係者なんかを呼ぶと、
そういう人から、また激励金なんか貰えて、
そうなる80万くらいになっちゃう。

すげえ。

こんな大金、見たことねえぜ。

こりゃ、ファイト・マネー5万で辛抱してきた甲斐があったってもんだぜ。
就職もしないで、こんな大金貰えるになるなんて。
こりゃ、家計に助かるし、貯蓄もできるぜ。

いずれK-1にも出られるようになれるぜ、これは。

俄然、ファイトがみなぎってくる。

で、情報を収集しよう、と。

ウイチャーと過去に対戦したやつらに話を聞いたんだけど、
みんな1ラウンドでKOされてて、
肘でザックリと額切られて。

じゃ、どんな技、持ってんの、って、
どいつもこいつも明確な回答が出て来ないんだよね。

まあ、肘だから、
やっぱ腕の選手だろうな、と。

だから村上竜司戦と同じように腕のガード上げて、
やるしかないな、と。

それから試合をイメージした練習が始まって、
出稽古にも積極的に行った。

ライト級王者の佐藤堅一、
同じくライト級ランカーの武藤、
それからフェザー級のスネーク加藤とか、
後に加藤はムエタイ王者を倒したという、いい選手だったよね。

それから後にK-1で活躍することになるヘビー級の大石亨、
そんなメンバーと一緒に練習を始めるんだよね。

正月休みを返上して、茨城で合宿を組んだり。

コーチに須田さんという人がいて、
この人はカイロプラクティックを経営してる人で、
後に新極真の鈴木国博選手のコーチをするわけなんだけど、
この人が茨城にジム持ってるから、って。

そうして茨城の合宿所に行ったら、
もう喫茶店もなにもなくて、
「じゃ、3時まで自由時間とする」って言われても、
もう、そこは原っぱしかなくて、
ここで自由時間だからって、なにして遊ぶんですか、
お山の大将でもやるんですか、って。

そんなやり取りがあって。

「じゃあ、おまえらが寝泊りする公民館に案内するから、
まず布団おろしちゃえよ」ってことになって。

布団、クルマに積んで持ってってるからね。

で、公民館に入って布団おろして、
時間になるまで、のんびりして。

コーチが時間だからって呼びに来て
「じゃあ、やるか」って
「しょうがねえよな」って。

それにしても寒くて寒くて。

みんなミットとか持って、田んぼのあぜ道を歩いて。
ぞろぞろぞろぞろ歩いて。
なかにはキックの短パンはいてるやつもいたりして、
こんな寒いなかを。

そうしてジムに着きました、と。

それ見て、俺は啞然としたよね。

そこはジムと言うよりは、
もう農家なんだよね。

もう耕運機とか藁とか積んであって、
そこにリングだけがドーンと置かれてんだよね。

扉もなんもなく、一応は屋根だけはあるんだけど、
「こりゃ、倉庫じゃないすか」って言ったら
「いいんだよ。ただで貸してくれるんだから」って。

ああ、まあ、そうっすね、って。

しかし真夏ならムエタイ風でいいんだけど、
真冬の吹きっさらしで。

でも練習始めると汗だくになって。

1日練習して。

そうして夜になったら須田さんのマンション行って、
奥さんがいて、すごい料理ふるまってくれて。

これは嬉しかったよねえ。

須田さんはカイロプラクティックの店を持ってんだけど、
夜はコンビニでバイトしてたからね。

お金ないのに、でも好きで、こうやって、
コーチとかやってくれてんだよねえ。

「おまえら、明日5時からだからな」って。

「わかりました」って、
もう気分良くなって部屋帰って寝たっけ。

そうして朝5時に起きて集合場所に集まって、
田舎の体育館で広いんだよね、
そこで走りこみ、ダッシュやって。

後は外で木と木の間を抜けて走って、
俺はこれは苦手なんだけど、
みんな速くて、ひょいひょい行くんだよね。

そんな練習を1時間半くらい続けて。

その後、朝飯食って、
また倉庫行って練習して。

基礎体力。

筋トレやって、腹筋やって、いやあキツかったなあ。

それで、また須田さんのマンション行って、
昼飯食って。

だから俺たち一銭も使わないで済んで。
俺たち6人くらい居て、
マグナム酒井なんてのもいて、
後にチャンピオンになる、みんな、そうそうたるメンバーですよ。

そういう連中にね、
こうやって飯をふるまって、酒飲ませてくれて、
一銭にもならないのに、
須田さんは好きで、そういうの、やってくれてね。

やる人はね、やってくれんだよねえ。

いやあ、ありがたかったよねえ。

で、昼飯食ってて、
それで酒井に聞いたんだよ。

「いやあ、どうしたら、あのキツイ練習に耐えられるかなあ。
どうしたら、あの練習、早く走れるかなあ。
どんなこと考えながら走ってるの」って。

そしたら酒井は

「女のこと考えてます。
まわりにギャラリーがいっぱいいることを考えて。
わー、酒井さーん、なんて言われてること考えてます」って。

ばかだなあ、こいつ。

それで、こいつらも試合近いのに、
ばんばん飯食って、昼からビール飲んでるし、
夜は夜で、がっつり酒飲んでんだよね。
体重、大丈夫なのかよ、って。

「いやあ、大丈夫ですよ」って。

ビールくらいなら練習で抜けちゃうし、
きつい練習してるから、大丈夫ですよ、なんて言ってるの。

で、俺は乗用車でビスタっての乗ってて、
じゃあ、今日は、ちょっと山の温泉行って、
少し疲れを取ろうということになって、
俺のクルマに佐藤堅一と大石亨とマグナム酒井が乗って。

須田さんのクルマには他のメンバーが乗って。

実は須田さん、小さいジープみたいのを最近買って、
このクルマの性能を試したい、という、
それで山奥の温泉行こう、なんて。

さすがジープすごくて、
俺のクルマじゃ、とても追いつけなくて。

そしたら佐藤堅一が
「俺が運転かわりますよ」って。

こいつ普段、砂利トラックとか走らせてっから、
もう、すごいんだよね。
山道をガリガリガリってサスペンションの音立てて、
そしたら、なんとジープの後ろにピタッと

追いついちゃったんだよね。

「おお、やったぜ！」って、
俺たち喜んじゃって。

そしたら須田さん、せっかく買ったジープで、
こりゃ負けらんねえ、って、
猛然と逃げ切ろうとして。

でも、そのまま俺たちは頂上まで最後の最後まで食らいついて。

そうして、ようやく目的地に到着して
「どうですか、最後の最後まで食らいついてきましたよ」って言ったら
須田さん「ふーん…」って。

よっぽど悔しかったんだろうねえ、
そんな顔してたよねえ。

そんなこんなでバカな話しながら温泉つかって。
これが終われば、また地獄の特訓が始まるという。

このつかの間の休息を、
みんなで楽しんでたよねえ。
いいやつらが多かったよねえ。

そんな感じで合宿は終了して、
ウイチェーン戦が近づいてきたんだ。

そんな頃、突然、おじさんから電話あって。
高校のときまでお世話になった、
親父の弟さんから。

親父が出所して、浦和のマンションに居るから、
会いたかったら会えばいいよ、それは任せるから、って。

それで会いに行ったんだよね、
一応、報告もあるから、結婚したってということとかね。

「おう、弘幸かあ」って。

もう、べらべらしゃべるわ、しゃべるわ。
すでに酒入ってるし。
なんだか懲役の自慢話。

で「まあ、いろいろヒロちゃんにも迷惑かけたなあ、
悪かったなあ」って。

そんな話して、
やっぱ心の底では反省してるっていう、
やっぱ、そういうのって、あるんだなあ、って。

「じゃあ、おれもちよくちよく、ここにくるからさ。
のんびり暮らすといいよ。もう歳だからな。
酒もほどほどにした方がいいぜ」って。

それで、俺もちよくちよく行くようになって。
女房、子どもを連れてって行ったこともあってね。
喜んでたねえ。

「これで、おもちゃでもあてがってさあ」なんて、
やっぱ孫のことは、かわいいんだなあ、って。

こうして俺が遊び行くようになったね。

で「俺は近いうち試合あるから、見にこいよ。
今度でかい試合だから、おもしろい試合になるから」って
チケット渡して。

おお、なんだい格闘技やってんのか、
すげえな、じゃあ行くよ、なんて、そんな会話して。

それでウイチャーン戦が、
1月の終わりくらいに。
試合の2週間くらい前からクール・ダウンで、
徐々に微調整しながら気力も充実、
そうして迎えた当日、朝の10時くらいに
試合会場の後楽園ホールに行って、全選手が計量して。

それでスネーク加藤が、
フェザー級なのに身長が180くらいあるから、
いつも減量に苦しんでて、
1回目はダメで、ガーッと汗かいて、
2回目で計量パスしてたよね。

他の選手は難なく計量パスして
「さあ、飯食おう」ってことになって、
後楽園のレストランに入って。

それで、みんな、おのおの頼んで、
やっぱり炭水化物系が多かったね、
スパゲティとか、やっぱりご飯頼んでたよね、
ばくばく、と。

ドリンク系はオレンジ・ジュースだったよね、
みんなね。

で、佐藤堅一だけはスパゲティ頼んだのに
食わないんだよ。
神妙な顔つきで、皿を覗きこんだりしてて。

「あれ、なんで食わないの。

計量終わったんだから、食べたほうがいいよ」って言ったら
「いや、これ油ですね。ずっと減量してきたから油食うと、
気持ち悪くなっちゃうんですよ。
食い慣れてればいいんですけどね」って。

そんなとき思ったなあ、
合宿のときは、あんなに食いまくってたのに、
やっぱ減量するやつはすごいな、
その後、きちっと持ってくんだなあ、って。

「いやあ、一般人っていいよなあ。
仕事終わってビール飲んで、腹だしてりゃいいんだもんなあ」って
俺が言ったら佐藤堅一が
「そう、朝起きて缶コーヒー飲んでるようじゃ終わりですよね」って言うのよ。

タバコ吸ってるなんて、論外だ、なんて。

一般人の70%は肥満体質で、
カラダに脂肪なり糖分なりをたっぷり蓄えてるらしい、とか、
そんな話してたよなあ。

で、夜になって試合が始まって。

士道館軍団は、みんな同じひとつの控室で、
みんなのトレーナーをする人がいて、
ボクシングのトレーナーでオリンピックに出場する手前までいった
元選手の人で、
このトレーナーが入ってきて。

みんな緊張してる感じだったから、
俺が「試合始まったらねえ、関係ないんだけどねえ。
試合前のこの感じがねえ、嫌だよねえ。

いざ試合はじまって、いっぺんガンガンともらえば、ああ、こんなもんかい、っていう。
ああ、気持ちいいじゃん、って。
やるぜ、ってね、俺はね、そう感じちゃうんだよねえ」って、
そう言ったら「ああ、そうですよね。そういう開き直りが大事ですよ」って、
みんなが和んできて。

「そう思わなきゃ。特に俺みたいなファイター・タイプはね」って。

そしたらボクシングのトレーナーのヤツが
「おまえは、なんてこと言ってるんだ。
それじゃドランカーになるぞ。そんな考えじゃダメだ」なんて、
そんなこと言うんだよ。

そんなの打たれないのがいいに決まってんじゃない。
これは自分を暗示にかけてる、っていう、
自分を騙して気持ちをなんとか高めよう、っていう、
ただ、そういう気持ちで言ってんじゃない。

そんな気持ちも、わかんねえのかよ。

打たれたくないなら、リングにあがっちゃいけねえよ。

もう、このトレーナー、選手を引退して、
もう現役の気持ちを完全に失っちゃったんじゃないの。

キツイことを、こりゃ、ラクだ、って、
痛いことを、痛くない、って、
そうやって自分を騙してリングに上がるわけじゃん。

もう、こいつのせいで、
また、みんな気持ちが沈んじゃって、

俺も気分悪くなって。

でも、やっぱり、そうなんだよね。

打たせて、打つ、っていう、

俺の戦略は、やっぱりバカな戦い方で。

後になって、このトレーナーの言葉が身に沁みることになるんだよ。

で、試合が始まった。

最初、相手は俺の出方を見てたね。

ジャブでけん制して、そこにストレートが異常なくらい伸びてきて。

ジャブのほうの方が速いのに、向こうのストレートが入ってきて。

なんか今日、もらうよなあ、って思ってた。

出だしから、こんなに、もらうことないんだけどなあ、

おかしいなあ、って。

あれ、あれ、おかしいな、打たれるな、って感じで。

で、1ラウンドの2分を過ぎたあたり、

残り1分で、俺は左ジャブを打つと見せかけて、

右フックを思いっきり繰り出して。

ウイチャーンは、これまで俺の左ジャブばかり見せられてたから、

この右フックは、まさに、まともにバコーンと入った。

体格差があるから、

俺のパンチのほうが強いはずだから、

パンチで倒そうと、そう思ってたんだよ。

バコーンと、まともに俺の右フックをもらったウイチャーンの腰が、ガクガクガクと揺れるのが見えた。

おお、これは効かせたぜ、って思ったね。

もう空手ばりの飛び込んでの膝蹴りをバカーンと入れて、ウイチャーンは体が大きく揺れて、ロープに背中が弾かれて、俺に抱きついてきた。

俺は首相撲とかクリンチは嫌いだから、そのまま離れて、またコーナーへ戻って。

そんなとき、ニヤリと笑ったよね。

よし、こりゃ、もらった、と。
これは、俺の勝ちだな、と。

そしたら後楽園ホールの天井ってものを、俺は初めて見たんだよね。

いきなり、後楽園ホールの天井。

あれ、起きなきゃな、練習だよなあ。

あ、おれ試合してたんじゃないかって、今日。

そんな、まるで寝起きみたいに。

いきなり。

カウント8くらいで立ち上がって。

そしてウイチェーンが再び猛然と襲いかかってきた瞬間に
ゴングが鳴って、コーナーに帰って行ったの。

セコンドに戻ってきて、みんなが、

よく見て、よく見て、カッとならないカッとならない、

とか言ってるらしいんだけど、

それも、よく頭のなかに入れてこなくて。

どうも、あのやろう、ぶっ殺す、とか、

そんなこと俺は言ってたらしくて。

そこで2ラウンドのゴングが鳴って、
俺としては意識はあるものの、
チョーンとこずけば、すぐ倒れちゃう、っていう、
もう、そんな状態だよな。

そんなことウイチャーンもわかってるから、
すぐに倒しにきて、また倒れて、
すぐ起き上がって、またファイトしたんだけど、
肘打ちかなんかで打たれてまた倒れて、
また起き上がって。

そしたら添野館長がバツとタオルを投げ入れて。

試合終了。

人生、初のKO負け。

その日、1日、なにやったか、おぼえてない。
ただ、いまいました。
次ぎやったら負けない、って、そう思った。

ウイチャーンに対しては、
前の手を流されるから、
右手で顔面ガードを固めなきゃダメだったんだ。

つまり俺の左ジャブに対して合わせてくるわけだからね。

後でビデオ見て、そのからくりがわかったんだけど、

普通、ジャブはパーリングって言って、
右手ではじく、またフックに対しては右腕でブロッキングする、
というのが防御法として一般的なんだけど、
ウイチャーンはそれをしないで、
自分の前の手である左手で下へグッと流すようにして、
そのまま右ストレートを延ばしてストレートを打ってたんだよ。

試合中、俺は、そんなことに、まったく気づかないでいたんだ。

そしてKOされたとき、
俺はというと倒しに行こうと左フックから打ちに行ったら、
ヤツはスエイバックをしながら、
その左を、まるで前蹴りをさばくようにして落として、
そこで同時に半身切って、タメを作って、
思いっきり右ストレートを打ってきてたんだよ。

これは後からビデオで見て初めてわかったんだけど、
このテクニックは、まさに完璧だよな。

左手の動き、半身を切る、タメをつくるまで一挙動。
そして生まれる強烈な右ストレート。

1回転して倒れてたよね、俺。
よく10カウント聞かなかったよなあ。

上体の柔らかさ、その反応の良さ、さすがムエタイだね、って、
そう思ったよね。

でも、こんとき、
そんなこと、まったく、わかんなくって。

後に竜司さんがウイチャーンと対戦したんだけど、
俺はそのことを、もう口がすっぱくなるくらい言った。

そうして竜司さん、実際にその戦法でやって、
ウイチャーンにKO勝ちしたから。

俺も、もう一度、対戦したら、
こうは、やられねえぞ。
逆に絶対、倒せる。

くどいようだけど、それは確信したよね。

ま、仕方ないよな。

それで試合の翌日、親父の住むマンションへ行ったんだ。
会場で親父に会ったし。

「いやあ、しょうがねえよなあ、あれはなあ」なんて、
「よくやったよ」なんてね。

あんときよ、おれはてっきり行けると思ったんだけどな、
1発1発軽いよな、タイのやつは。
あれは蹴りはパチンパチンとか音するけど、
痛いのかい、あれは。

いや、痛くないよ。
あいつらポイント稼ぐために音立てる蹴りやるんだよ。

へえ、そんなもんかい。

それよりもパンチだよなあ、あの上半身。

へえ、そうかい、なんて、そんな会話、親父としたんだよ。

第十六章 鳴りやまない金属音

で...そんなこんなで、
日々は風のごとく。

しばらく試合から遠ざかった。
やっぱ負けのショックも大きかったし、
ま、対戦相手もいなかったのもあったし。

そうして数ヶ月間、試合出ないで。

実は、ひとつ困ったことが起き始めて...

金属音が、取れねえんだよね。

頭のなかで、キーンと鳴ってて。
風呂入ってると、特に。

あたまでキーンって。

あ、まただ、聞こえてきた聞こえてきた。
飛行機乗っかってるような音が、って。

それだけじゃなくて。

人が何を言ってるのかが、わかんなくなってきたら、
自分が今、何を言ってるのかも、
会話の途中で、
ふっ、とわかんなくなっちゃって。

なんか体もふわふわしちゃって、
下半身がさ、なんか雲の上、歩いてるみたいな、いつも。

練習しても、スタミナがないんだよね。
ただ、もう、だるくて、だるくてね、身体が。

思ったよね、俺は、ここまでかな、って。

ずっと打たせて打ち返すっていう、
そういう戦法だったし、
その上、毎日、酒かっくらって。
KOで負けても大酒かっくらってたよねえ、朝まで。

練習でも頭、打たれてるわけで。

これはねえ、もう、そろそろかなあ、なんて。

ああ、そろそろかなあ、って。

病院は、いかない。

そこで決定的なことを言われちゃったら、
俺の人生、それまでになっちゃうから。

しばらく休んだら回復するかな、って思ってたけど、
直んないし。

将来への不安。
どうやって生きてったらいいいのか...。
仕事は...

パンチ・ドランカー。
頭がだめになっちゃう、
底知れない不安、
これは底知れない恐怖だよ。

ほんとうに、おそろしいんだ。

自分の頭が、おかしくなっちゃう、っていう恐ろしさ。
こわいよ、ほんとうに。

あの後楽園ホールで
あのトレーナーの言葉が、じわじわと俺のなかで、
その通りだな…。

これまでヤクザの会長のお付き、
ボディ・ガードの仕事なんかもやってて、
その会長さんにかわいがられてて。

月給20万くらい貰って。
ロールスロイスのリムジンなんかも運転しなきゃなんないから、って
「じゃあ、これで免許取って」って、
ばっと40万くれたりして。
もう速攻で運転免許取ったよね。

まあ、そんな仕事してて、あっちこっちの組の親分さんからも
「若狭くん、いいね。うち来ないかな」なんてスカウトされたりもしてたから。

ボディ・ガードの仕事は秘書みたいな仕事も兼任してて
「この日にお客くるからホテル予約しといて」とか言われても、
忘れちゃって。

「あれ、今日なにがあったっけ？」って、
頭ぼうっとなっちゃってるから、
そんな仕事でもミスしちゃうんだよ。

わかんなくなっちゃう。
忘れちゃうんだよ。

つまり、それは、もうボディ・ガードの仕事も出来なくなっちゃう、

っていうことで。

じゃあ、他になにやるの。

なんの仕事が出来るの、おれ。

37歳——おかしくなってくる頭で、
しかも、この歳でゼロからやる、ったって。

なんにも出来ねえし。

家族いるんだし。

いろいろ考えちゃって。

人間って、なんなんだろう。

生きる、って、なんなんだろう、って、
そんなこと考えこんじゃって。

そうして悩んで、考えて考えて、
結局、おれはなんにも出来ないわけで、
ならば、なにかひとつ、
なんでもいいから、なにか、ひとつ、
価値を持って生きていきたい。

なんでもいいから、なにか、ひとつ。
命かけられるような、なにか、ひとつ。

それでヤクザ者になろうかな、って。

組織に入って命張って生きようか、と。

結局、それしかないし、そこに行きついちゃって...

第十七章 極真へ、再び

ちょうど、そんなある日、極真城南支部の渋谷道場が開設されて、
入来先輩から連絡あって呼ばれて。

この頃、大山総裁が亡くなって極真の組織が分裂して、
城南支部では緑先輩と入来先輩が奔走して、
なんとか新しい組織を盛りたてよう、って。

「だから若狭、おまえも祝杯にきて盛り上げてくれ」って。

そうして行って塚本たちも集まってて、
みんなで飲んで。

その帰り道、入来先輩と渋谷のラーメン屋に寄って。
そこで俺、相談したんだよ。

これから、どうするか...ヤクザの組に入ろうか、って。

そしたら入来先輩、ちょっと待て、って。

「たしかに任侠の世界は、命張ってる男の世界だから、
俺たちに似たところがあるんだけど、
でも結局、なにか悪いことしなきゃなんないんだから。
任侠だけじゃないんだから。
おまえ若狭、そういう、なにか悪いことすんの、
おまえ耐えられるか？おまえにや無理だ」って。

まあ、たしかに、なあ...。

それで、こう言ってくれたんだ。

「うちの組織入って、もう一回、空手やんないか」って。

極真空手。

おれの格闘技の世界に入った原点。

そこに戻る…。

じゃ、具体的に、どうする？

その頃、親父はというと、なんか徐々に腹が膨れてきて、

じわじわと元気なくなってきた。

この親父のこともあるし、嫁と子どものこともあるし。

緑先輩が前に言ってくれたことを思い出して、奄美で暮らそう、と。

奄美の緑先輩の両親が経営してる建築資材用の砂利集めの仕事で

使ってもらって、近くに道場構えて、

そうすれば空手やりながら生活なんとかなる。

緑先輩に相談したら

「事情は、わかった。でも奥さんとか、まわりの人はどうなの？

それがクリアになるなら…。うちで、やってくか」って言ってくれて。

よし、と。

おれは腹くくって、

それから、あちこち走り回って。

女房の身内の人たちに話して、女房も、わかった、って。

みんな賛成してくれて。

そうになったら、後はお世話になった竜司さん、
みんなにも挨拶して、あと添野館長にも…。

所沢の添野館長の自宅行って、ピンポン鳴らして。

おお、若狭か、どうした、って。

ちょっとお話しがありまして、って。

こりゃ怒鳴られるだろうなあ、って、
おれ、かなり緊張してて。

まあ、座れ、って。

奥さん、お茶だしてくれて。

「どうしたんだ？」

「いやあ、実は…」って話しだして。

親父が具合悪いこと話して、女房も子どももいるし、
家族のためにやらなきゃいけないことがあって。

で、家族みんなで奄美へ行こう、って。

そうして縁先輩の下で、また極真空手やろう、って、そう思いまして。

そしたら添野館長、すごく親身になって話し聞いてくれて。
すごく親身になって、おれなんかのことを、ほんとに心配してくれて。

「まあ、いまあっちの組織、大変だからなあ。
緑と入来が奮闘してるみたいだけどな...。
まあ、おれも元は極真の人間だったから。
わかるよ、いろいろ気持ちとかもね。
ああ、そうか...で、親父さんは何してる人なの？」

「いやあ、実は懲役おわって出てきて」

「ああ、なんだ、親父さんもケンカ強いのか？」

「いやあ、親父はケンカ弱くって、よく酔っぱらって、
ケンカでボコボコにやられてる姿を、子どものときから見てて。
だから逆にケンカに強くなりたい、って、
自分なんかは、そう思っちゃったんですけど...」

親父が懲役に行ったとは言ったけど、
放火で懲役いったとは言えなかった。
放火なんて、あまりにも情けなさすぎるから。

添野館長も聞かなかった。

「まあ、男はなあ、いろいろあるからなあ。
いっぺん会ってみたかったなあ、
若狭のお父さんになあ。気が合ったかもなあ」って言うてくれて。

パンチ・ドランカーのことも、

おれは言わなかった。

「期待に応えられなくて、すいませんでした」って、
ただ、そう言って謝ったんだ。

そしたら

「いやいや、そんなことないぞ。
若狭、おまえ、うちで、よく頑張ったぞ」って。

「よし、今日は門出だ。焼肉でも食いにいこう」って。
連れてってくれたんだ。

「あっちこっちの会場いくと、
そこで緑に会くと、必ず若狭はちゃんとやっていますか、
若狭どうですか、って、必ずそう言うんだよ。
竜司といい、うちを応援してくれてる会長といい、
おまえのことを、ほんとに、かわいがってなあ。
おまえは、いい先輩に恵まれてるよ、ほんとになあ」

焼肉、食え、食え、って、
そうして今日までのことについて、
いろいろ話してくれて。

おまえがウチに入ってきたとき、
お、でかくて、いいのが入ってきたな、と思ってねえ。

あの試合のときは、あの展開が良かったよねえ、って、
こと細かに、ひとつひとつ、しっかり見ててくれてたんだよね。

目の奥のほうから、ぐぐっと熱くなってきた。

もう、たまんない。

もう…。

たまんないです。

こうして、みんなに挨拶し終わって、
じゃあ、ってことで、
緑先輩と入来先輩も組織復帰の足固めをしてくれて。

おれも親父と話し合って。

「わかった。奄美か、行くか」ってことになって。

実は親父が服役しているとき、
親父の弟さんが、一生懸命にやってくれてて、
何度も面会に行って、
じいさんの財産分与の件で。

まあ、ほんとうは、うちの親父なんかは、
そんな、みんなの家に火を点けたりして、
会社の金を着服したりして、
だから本当は遺産なんか貰う資格なんか、
全然ないんだけど、

弟さんが、いろいろやってくれて。

おじさんだって、
ほんとうは、俺を預かったときの養育費とか、
そういうの、かかってたはずなのに、
一切、そういうことは言わないで、
親父のために考えてくれて。

新築の2400万円のマンションを買ってくれて、その他に500万円。
さらに月々の生活費15万円で、って。

もちろん一生、15万円払い続けることは出来ないけど、
まあ、当初は俺がやるから、
いずれ弘幸くんにもバトン・タッチして、
そうして財産分与、進めるから、いいね、って。

親父も承諾して。

「出所しても、これで暮らせるから」って。

そのおかげで、
親父は出所しても、ここで、このマンションで、
仕事もしないで暮らすことができてたんだよね。

だから、このマンションを売って、
そうすれば奄美で、向こうは土地とか家も安いから、
その資金で奄美で家買って、みんなで住もう、って。

親父もそうしよう、ってことになって。

よし、と。

新しい生活が始まるんだ。

第十八章 親父の死

それから、俺はあっちこっちの不動産屋を回ったり、
いろいろ手続きを進めたり、
挨拶行ったり、
もう、いろんなことをしなきゃならなくなって。

そうして、ある日、真昼間に、
親父のマンションへ寄ったんだよ。

そしたら家のなかに何人かホームレスみたいの集めて、
酒飲んで、威張り散らしてやんの。

前からそういうことやってたんだよ、親父は。

誰かに威張りたいもんだから、
ホームレスみたいの集めて。

そんな光景見て、
「なんなんだよ、おまえ」って、
思わず、あきれちまって。

俺、さんざん、いろんな手続きしたりして、
いろいろ、あっちこっち走り回ってんのに、
なんなんだよ、これ…。

「おまえみたいな、こんな、しょーもないやつでもなあ、
面倒見なきゃならねえ、
だから、こっちは、こんなにやってやってんのによお、
奄美行くのに、やんなきゃならねえことがなあ、
いろいろあんだよ！」

「へっ、なに生意気言ってやんだ、おめえは！
おれは奄美なんか行かねえ、やめたやめた。
おめえの世話にゃ、ならねえ！」

おれは、ここにいるんだよ。
ここは、おれの家なんだからな！」

それ聞いて、
俺、カチーンときちゃって、
気づいたら俺、怒鳴ってたんだ。

「おまえは酒やめらんねえし、
全然、反省してねえ！
あんたがなあ、愛人つくって遊んでるときになあ、
おふくろは、毎朝、化粧品の重たい鞆持って、
俺とねえちゃんを育てるために、
化粧品のセールスやって、
あっちこっち断られて、
それでも、がんばって売り続けて、
俺たち育ててくれて、
そうやって倒れちまったんだよ！
おふくろ病院に運ばれて、
ガンで、苦しんで、苦しんで死んでったんだ！
おまえになあ、おふくろの死に様、
見せてやりたかった！
もう、こんなに、痩せ細って、からだ、ぺったんこになっちまって、
そんなんなっちまって、
苦しんで苦しんで死んじまった、
おめえが殺したんだ、おふくろをよお！」

そう叫んだら親父の野郎、
ぶあっ、と涙ふきだして。
ぼろぼろ泣きながら怒鳴り返して。

「かんけーねえ！
おれのせいじゃねえー！」って怒鳴り散らして。

「おめえが、おふくろの人生、
めっちゃめっちゃにしたんだよ！」

「おめえだよ、
おめえが男さげるようなこと言ってんだよ！
そんなこと言ってるなあ、
おめえが自分で男さげてんだよおー！」

「こんなクソ野郎、なんだ、てめえは！
結局、こんなクソみてえな男の面倒見んのは俺じゃねえかよ！」って、
おれはもう情けなくて怒鳴り続けてた。

「おめえに面倒なんて見てもらおうなんて、
思ってねえんだバカ野郎！」

「じゃ、死ね！
死んでくれ！」

「いやあ、おれは生きて生きて、
生きぬいてやる。
弟からカネひっぱってなあ」

それ聞いて俺、マジで切れた。

「ああ、そうかい...。
じゃ、おとしまえつけれ。生きるんなら、おとしまえつけれや。
今までの、わび入れろ。
指つめろ」って、
台所からまな板と包丁持ってきて。

「生きるんなら、指つめろ、コラッ！」

俺、親父の手をガッと掴んで、

まな板の上、置いた。

そしたらグッと拳、握り締めて小指、出さない。

その拳を、おれは力づくで開いて、
ひきずり出すようにして小指、ひっぱり出して。

まな板の上に小指、乗ってて。

俺は、そうして右手で包丁を掴んでた。

そうして親父の小指に、包丁を向けて。

「自分でやれ」

おれ包丁、投げ捨てた。

「へっ…。指詰めってのはなあ、
事前に病院に予約入れとくもんなんだよ」

そんな捨て台詞、吐きやがって。

まわりのホームレスたちは、
もう啞然としてて、ひと言も、なにも言えないで、
ただ呆然と俺たちを見詰めてた。

もう、こんな親父は捨てて、
俺たち家族だけで奄美へ行こう、と。

そしたら今度は、女房が
「行きたくない」って言い出しちゃって。

当初の計画とは、いろいろ変わってきちゃったから、
奄美で子どもと一緒に暮らして行けるのか不安になっちゃって。

それに自分のおとうさんとか、
友だちとかも離れ離れになっちゃう、っていう、
そういうことも考えちゃったりし始めたらしくて。

結局、奄美行きは頓挫しちまった。

全部、無駄足。

ああ…。

結局、奄美行きはなくなっちゃったんだけど、
緑先輩と入来先輩から、もう1回、新極真に入って、
「もう1回、がんばって見ないか。
ゼロからのスタートだけど、選手としても、
まだ、がんばれると思うし」という話に変わりはなくで。

「若狭の力が欲しいんだよ」と言ってくれたんだよ。

当時、組織が分裂して、
バタバタしている最中だった。

緑先輩は女房にも
「将来は道場を持たすから」と言ってくれた。

そういうカタチでカムバックした。

その頃から、親父の体調が悪くなって、
外にも出歩かなくなって、
体は痩せてゆくんだけど、
腹だけは膨れるようになってくるっていう、
そういう状況だった。

そうして俺はというと、
空手に体を戻して行くのに苦労したんだ。

上体を低くして、
胸へのパンチとか、ボディを打たれても崩されないように。
キックはアップ・ライトで浮き足だって、
ぐにゃぐにゃにしとかなないと逆に効かされちゃうから。

たとえば硬い板だとバキッと折られちゃうわけなんだけど、
柳みたいにやわらかだと折られないでしょ。

キックでは、そうしないと。

でも空手はビシッと軸を固めないと、
ボディのパンチで崩されちゃうから。
つまり体幹だよな。

だから、そんな感覚を取り戻すために、
型とか、よくやったよね。

そうして、ついに空手の現役復帰。
入来先輩の薦めで千葉大会に出場。
まだ体は完璧じゃなかったんだけど、
とりあえず挑戦してみよう、と。

これは、どういう大会かというと、
地元で強い選手がいて、小林宇太郎という選手がいて、
全日本ベスト16、全日本ウエイト制ベスト8くらいの実績で、
彼は千葉大会を連覇する看板選手だった。

そんな実績だけで、その他に、
どんな技が得意なのか、そういう情報はまったくなかった。

そうして当日、試合会場に行って、
パンフを見たら、なんと1回戦で、
俺と当たることを知った。

ああ、そういうことかい、って思ったよね。

上段の足のあがる選手だと聞いたんで、
初めてサウスポー・スタイルで戦うことを試みたんだよね。
右前のサウスポーのほうが、
相手の蹴り足が、よく見えるからね。

相手は距離を取ってきて、
ステップを使いながら攻めてきて。

落ち着いて、淡々と受け返しが続いて、
向こうも同じく、落ち着いて攻めてきてた。

相手が右の攻撃を出してくるのに対して、
受けて左で返す、というのをやっていた。

本戦が終了、延長戦に突入して、
俺は距離を詰めて膝蹴り、下突きで、
徐々にエンジンかけてったんだよね。

延長に入って体の動きが良くなってきて、
技に体重が乗ってきて、
そうして、さらにインパクトを強くさせて行った。

左のローもクリーン・ヒットするようになって、
相手が、だんだん効いてきたのもわかった。

そこで延長終了の太鼓の音。

そして最終延長。
俺は充分、スタミナが残っていて、
いい感じで試合が進む。

そして中盤、相手のハイキックが俺の鼻を掠めるとい、
そんな危ない場面もあったんだけど、

俺のが効かせてる、っていう確信があって、
だから、焦らなかったよね。

ラスト30秒になってラッシュ攻撃。
ここで俺は、いつもと違って、
ステップを使って、左右にまわり込みながら
パンチと膝で猛攻を仕掛けてみた。

そしたら相手の動きがピタッと止まった。

想定外だったんだろうね。

普通、真っ直ぐ圧力で来るはずなのに、って。
それが、まるで小柄な選手みたいに左右にまわり込みながら攻撃なんて。
まさに棒立ち状態になってた。

そしてラスト15秒はリズムを変えて、
いつも通り真正面から、
膝蹴りとパンチでまとめて、一気に圧力をかけていった。

そして判定。
これで俺の勝ち、と思ったら、
なんと判定は引き分けに。

会場はざわめいて、シラーって雰囲気になっちゃって。

場内アナウンスで
「体重判定になります」って。

小林選手は78キロ前後、俺は95キロあったから、
そうして俺の体重判定負け。

会場は、ざわめいたまま。

しかし...こんなに判定ひどいの初めてだったよなあ。
この試合は100%、俺の勝ちだよなあ。

ま、でも、しょうがないよなあ。

キックのリングとかに立ってた選手が、
いきなり来て、看板選手に勝つ、ってわけには行かないからなあ。

でも、この試合は後に支部長会議でも問題になったらしい。
やっぱり空手の王道を行く組織なんだから、
公明正大に審判やらないと、だよな。

試合後、控室行ったら汗だくの小林選手が来て
「いや、すいません、この試合、自分の負けでした」って、
わざわざ言いに来たんだよね。

まあ、そんなことがあって。

で、今度は、この年の全日本ウエイト制重量級に
出場することになったんだよね。
このとき37歳。

かなりハードな練習を続けてて、
そうして気がつくと、いつの間にか、
頭のなかに響く例の金属音は聞こえなくなってた。

これは本当に、ほっとしたんだよね。

パンチ・ドランカーじゃなかった。

もう、頭、打たれる格闘技は絶対やんない。

いやあ、これは本当にね。

で、ウェイト制なんだけど、
この当時は、まだ体を作ってる段階だから、
あまり勝ちにこだわらず、試してみよう、という。
そんな感じだったよね。

1回戦勝って、続く2回戦で、
坂本晋司選手と当たって。
この頃の坂本選手は、若手期待の新人。

序盤、パンチの打ち合いから始まって、
それもガツガツの打ち合い。

あ、今、相手の顎に掠ったな、って、
だから、すいません、ってジェスチャーして。
そしたら向こうが
「あ、いいっす、いいす、続けましょう」って。
途中でリズム止まるの嫌だからね。

だから、あっ、いいねえ、って。
気持ちいいねえ、キミは、って感じで、
そのまま打ち続けて。

で五分五分の打ち合いで引き分け、
延長戦へ。

ここで決めなきゃ、って思って
「おっしゃ、うおーりゃー」って声だして、
パンチ、膝、ローで馬力かけて。

すると相手は動き出して、
なんか独特な感じで、

腰を低くおとして、ゆっくり、
スッ、スッと動きながら反撃してきて。

彼も、まだ若くて、
その動きも中途半端で完成されていない感じで、
圧力を逃しきれてないから、
だから、そのまま俺の圧力を受けて場外へ。

そしたら坂本選手はヤバイと思ったのか、
今度は真正面から打ってきた。
結構、きびしいパンチで、
圧されまい、としてた感じだった。

もう、お互い声だして
「うわーっ！」ってパンチ打ち合っ
短い時間だったけど、お互い出し切って。
試合終わって2人共、ふらふらになってた。

そして判定。
「白2、赤2」

場内がワーッとわいて、
そして主審が坂本選手へ。

1本差で判定負けだった。

でも、出し切った、これは、いい試合だった。

そうして東京へ帰って、
すぐ親父の家に顔出してみた。

心配になってね。

そしたら6畳の部屋で、
少し横たわりながらテレビを見てた。

「おお、来たぜ」って言ったら、
こっちを振り返りながら、
「おお、来たかあ」って。

「体調はどうだい？」
「ああ...。悪いよなあ。こうして、いつも寝っころがってんだよ」
「おでん買ってきたぜ」って、
コンビニで買ってきたおでんを、そっとテーブルの上に乗せたんだよ。

「いやあ、しかし...腹でたなあ。
それ水抜かないとダメなんじゃないかい？
医者、行ったかい？」

「いや、医者いかない。いいんだよ」

「まあ、しょうがないから、
週2回くらいは来るから、万が一のときは、
自分で救急車呼べよ、電話して」

「ああ、薬局で薬買って飲んでるから。
今、様子みてんだよ」

すっかり声に張りがなくなってたねえ。
ふわふわした感じで、しゃべってたねえ。

「それより空手のほうはどうだい？」
「うん、まあ、だんだん調子あがってきてんだよ。
世界大会を標準に合わせてるから。
将来は極真空手の道場を持ちたいとね、思ってたんだよ」

「そうかい。そりゃいいや。
おまえは俺と違って、偉いなあ。
ひとつのことを、ずっと続けてやってんだからな。
そのまま、やってったらいい」

少し足をのばして上体起こして、あぐらかいたりしながら、
こっちに背中を丸めて、テレビに向かって頭を下げてた。
なんか、ちっちゃくなったな、って思ったな。
その姿がね。

で、俺としては
「俺にはそれしかないからね」って答えたんだよね。

で、俺、思ったんだよ、そのときに。

親父みたいに一生、遊んで人生過ごしても、
俺みたいに、ひとつのことで人生過ごしても、
どっちにしても、お互い、家族が犠牲になってんだよね。

俺の家族も、犠牲になってる。
親父と、おんなじように。

結局、褒められたこっちゃんないんだよね、
俺にしても。

この当時、後輩の塚本は世界チャンピオンで、
渋谷道場でやってて、そこにも出稽古に、よく行ったよね。

そこに塩谷に会って、こいつとも、よく一緒に練習してた。
こいつはジャパンアクションクラブ所属の俳優で、
サイバー・コップっていうアクション番組に出演してた。

俳優の千葉真一が期待する大型新人。
身長185センチで、すらっと背が高くて、
カッコよかったよね。

1回だけ一緒に試合に出たことがあって、
それは城南支部内のトーナメント戦で、
クリスマスの頃に。

当日、会場で、すげえ、ガチガチに緊張してんだよねえ。
で、トーナメント表見て、俺のそこへ来て
「えーっ、先輩、なんで出るんですか」って。

「いやあ、秋に試合なかったから、出とこうと思って」って言ったら
「えーっ、痛くない？」なんて言ってくるんだよね。
笑っちゃったんだけど。

「なに言ってんだよ。
ガンガン来いよ、当たったら」って。
檄飛ばしてやったんだけど、
繊細なんだろうね。

この試合は決勝で菊洋介とやって判定勝ちで優勝するんだけど、
鎖骨折れたまんまやったんだよね、この試合はね。

入来卓也に折られたんだよねえ。
卓也、すごい馬力あったよねえ。

この俺が場外に押し出されちまって。
俺、カッとして、なんじゃ、おりゃあー、って。
俺も、ガンガン攻めて。

このクソ生意気な、コラァって感じで。
俺が後輩の若いのに場外出されるなんて、許せない、
威厳にかかわるから、もうガンガン打ち合ったよねえ。
しんどい1戦だったけど最後、ボコボコにしてやったぜ。

それで鎖骨折っちゃったんだけどね。

まあ、塩谷は負けて。

この何ヶ月か前に、塩谷の家に遊び行ったことがあって、
きれいなコーポで、お茶の間があって、ソファがあって。
仮面ライダーとかサイバー・コップとか、
自分が出演した番組のポスターが、ずらーっと並べられてて。

パンフレットとかも、自分が出た映画なんかのね、
そういうの持ってきて、酒飲みながら、いろいろしゃべって。

こんな会話したな。

俳優ってのは、そういう役に近い性格を醸し出すために、
普段から、そういう性格で過ごしたりとか、
そういうことしたりするの、って。

「そうですねえ、それがホントに大切に、
たとえばアクの強い役をやるには、
わざと現場仕事とかのバイトすんですよ。
そうすると、ほんとうに、そういうアクみたいのが出るんですよ」って。

「へえ、なるほどねえ」って。

「ところで塩谷はアクションを演じるのと、
試合で戦うのと、どっちがいいの？」

「いやあ、僕はアクションのほうがいいですよ。
なぜ、叩き合わなきゃいけないのか、ほんとに理解できないですよ。
必要じゃないじゃないですか、そんなの。
社会でたって、そんな叩き合わなくても、
やさしかったり、いい人間、いっぱいいるじゃないですか。」

どうして叩き合わなきゃならないのか、
ほんとに理解できないんですよね」

ああ、なるほど、
その通りだよなあ。

うーん、って、答え出せなかったよねえ。

そうだよなあ、必要ない、っちゃ、必要ないよなあ。
うーん、俺とは、まったく違う人間なんだなあ。
やさしくて繊細なね、そういうヤツなんだよねえ。

朝、突然、入来先輩から電話があって
「塩谷が死んだ。自殺したらしい」って。

「えっ」って。

配達バイトしてて突然、自殺したらしいよ、って。

そのとき思ったのは、彼も二枚目俳優だったから、
このまま社会の片隅でね、誰の目にも止まることなく、
ただ淡々に死んで行くのが、嫌だったんじゃないかな、って。

葬式に出たら、各芸能関係者、空手関係者の面々が来てて、
塩谷のお兄さんが挨拶をするんだよね。

「彼は彼のなかで葛藤があったようで、
最終的に彼が選んだ道だと思います。
前から彼がやりたかったことだと思うので、
皆さん、わかってやって欲しいと思います」

なんかサムライ的な、そんな感じがした挨拶で。
それ聞いて、俺は心のなかで言ったんだよね、
俺はおまえの生き方を一生涯、たたえるよ。

これが彼の生き方だったわけなんだからさ。

その帰り道、みんなで歩いて帰る途中、後輩が、
「あのお兄さんの挨拶、あんなのないですよ。
人間、生きてナンボのもんですよ。
それが自殺したのわかってくれ、なんて、
そんなのないですよ」って。

それ聞いて、
人間、生きてナンボのもんなのか、
死んで讃えるものなのか、
いろいろ考えちゃって。

でも俺は死んで、讃えたいよ。

サムライがサムライのまま死んでいきたい、みたいな、
彼は彼で二枚目のまんま死にたかったという、
それが彼の信念なんだろうね。

二枚目俳優で自殺した沖雅也と一緒にさ。

そういうことで、
でも生きる人間の価値とか、死ぬことの価値とか、
生き様、死に様とか、人それぞれに賛否両論。

いろいろ考えさせられたよね。

死生観。

たとえば、俺なんかは絶望しちゃったら、
もし絶望しちゃったら、自殺するんだろうね。

まあ、世の中や社会なんかには、
いろいろ絶望しちゃうことは、
いっぱいあんだけど、
自分自身に絶望しちゃったら、
死ぬよね。

でもね、俺は、どんなどん底に落ちてもね、
どこかに光を探す。

まだ、やれる、っていう光をね。

それは、ある種、開き直り。
おお、やってやるぜ、っていう。
それは、すなわちケンカ・ファイトみたいな。

俺は、今まで、さんざん修羅場、くぐってきたんだ、と。
それはケンカでも、もう殺されんじゃないかという、
そういう修羅場くぐってきたから、
だから多分、これからも、
どんな、どん底に落ちようとも、
どこかで光を見つけることができると思う。

歳とっても、貧乏してても、
開き直って、ね。

でも、たとえばサムライみたいに、
これ以上、生き恥晒して生きるよりも、
むしろ自殺する、みたいな、
そこにも潔さっていうのがあって。

そこには、ひとつの美学があって。

自殺もまた、生き様、死に様としての美学があり、
開き直って、ひとつの光を見出して生き続けることにも、

そこにも男の美学があるんじゃないかって、
そう思ったんだよ。

その頃、親父の家へ行ってみたら、
相変わらず横たわって、俺が入ってきたことにも気づかないで、
テレビを、ぼーっと見てるんだけど。

「おお、来たよ」って言ったら
振り返りながら「おお...」って、声が弱ってて。
もう目の焦点が合わないくらいで。

それでゲッソリ、痩せ細ってて、
まるで骸骨みたいな顔になってて。
なのに腹だけは、ぼっこりと膨れて。
そして脚なんかも、もう丸太のように太くなってて。

腹に収まりきれない水分が、脚へ行っちゃってんだよね。

内臓が、腎臓とか、
もう水分を処理できないんじゃないの。

「ずいぶん弱り果てちゃったなあ。飯食ってないんじゃないの？」

「ああ...」

「何日もか？」

「ああ...」

もう酒も一滴も飲めなくなっちゃってた。
もはや歩くこともできなかった。

「じゃあ、今から飯作るから。材料、買ってきたから」
そう言って台所で料理作り始めて、

そしたら親父が「うう...」ってうめきながらムクッと立ち上がったんだよね。

そしたら俺の背中越しに

「うう...弘幸、見とけ。これが俺の姿だ...」って。

そして振り返ったら、

金玉が、まるで、ひょうたんのよう、
たぬきの置物のように、ぶらーんと、ぶらさがってんだよね。

そして腰をゆすって見せたんだよね、

ゆっくりと。

大人の握りこぶし2つ分は、ゆうにあったよなあ。

ぶらーん、ぶらーん、と。

俺は、もう、びっくりしちゃって

「いやあ、こりゃあ、ただ事じゃないよ。
これで死んじゃうよ、救急車呼ぼう」って
電話の受話器に手をかけたんだよね。

そしたら親父が

「いいんだよ。いいんだ。俺は、これでいいんだ。
俺はここにいんだよ、俺はこのまま、ここで」って言うんだよ。

俺は、このとき、思ったね。

この男、覚悟決めたんだな、ここで。

それで俺、受話器を置いて、

わかった、と。
もう何も言わなかった。

それから2～3日して、

その頃、俺は工場でバイトしてて。

今日、バイト終わったら、
練習なしにして、また親父のそこへ行こうって思って。
で、バイト終わって外出たら、
もう土砂降りの雨で。

それが帰りがけに、
冷蔵庫に飯入ってんのになあ、
あれから飯食ってんのかなあ、親父、って思いながら、
また、おでん買って、マンション行ったんだよ。

親父の部屋がある5階までエレベーターで、
それで濡れたカサをパタパタパタッと
水を落として、そうして鍵、開けたんだよ。

それで玄関越しから、
ダイニング・キッチンの奥にある部屋で
壁に背をもたれながら、
顎を上げて、こっちを、うっすらと見てる親父がいたんだ。

顔が真っ白なんだよね。
真っ白な顔で。

それで靴脱いで近づいてったんだよ。

そしたら壁に背もたれて、
両足を投げ出すように座ってて、
目半開きで。

このときには、もう気配で、
俺はわかってて。

だな、と。

ああ、とうとう逝ったな、って。

「おーい」って、
耳の近くで言ってみたんだよね、一応ね。
もちろん反応ないよね。

で、親父の手首持ったんだよね、
そして軽く上に持ち上げてみたの。
脈がなくてね。

死後硬直はしてなかったんだよね。
ぶらんぶらんだった。

おつかれさんだったな、って、
心の中で言ったよね。

それで救急隊呼んで、
いろいろ手を施すんだけど、
当然もう全然ダメで。

「一応、警察呼ばなきゃなんないんで」って言うから
「ああ、呼んでください」って。

警察の専門医がいて、
いろいろ調べて、

「部屋に入ったとき、窓とか、扉とか開いてましたか」って。
「いや、閉まってました」って言って。

そうして1階の薬局で買ってきたときのビニール袋があって、
そこに全部、どす黒い血が詰まってて。

「ああ、こりゃ、もう吐血してますね」って。

おじさんのところへ電話して、
葬式の準備して。

嫁と俺とおじさんの3人だけで、
そのまま火葬場で、それが彼のささやかな葬式。

彼が好きだった紙パックの酒とかタバコとか、
それを棺と一緒にに入れてやったんだよね。
64歳だったね。

今、思うと、
自分で死ぬのわかってて、
自ら死を望んで、死んでった。
あんな、どうしようもない親父だったけど、
最期は自分でけじめつけて死んでったな、と。

生前、親父は、俺がガキの頃に、
よく酔っ払って、サムライのことなんかを話してたよね。
仮面ライダーの番組を変えて、男、決断を見せて、
特攻隊の物語なんかを見せてたよね。

俺は親父の生き方、まっとうに生きることができない性分の親父、
生まれながらに、いるんじゃないかな、
そういう性分の男がね。
でも心のどこかで、あがいてたんじゃないのかなあ。

彼が憧れてたサムライ、

でも、そんな生き方ができない。

そんな自分自身の葛藤のなかで、あがいてたんじゃないのかな。

最期には、やっぱりね、

その彼の、ひとつのサムライっていうか、

ひとつのケジメのつけかたとして、

最期まで謝らなかったよね、

それは、それで讃えてやろうかな、と。

生き様はどうしようもないけど、

死に様はね、サムライだな、って。

そう言ってやらなきゃ、しゃあないでしょ。

それで時は過ぎて、

翌年、全日本ウエイト制大会の季節がやって来て、

また激しい練習が始まって。

この頃から頻繁に塚本道場に行って、

塚本とか若いヤツらとスパーリングやりながら。

2人の男の死を見ながらの練習だったんだけど。

まあ、馬力かけて練習したよね。

ウェイト制は2回戦で野本選手と対戦。
世界大会の選手だし、当然、優勝候補。
そのとき、野本はローキックが強烈な選手で、
それは事前によくわかってたから、
俺はサウスポーで、だから前足で、ひょいひょいと受けたほうが
いいんじゃないかなと。

実際、狙い通りで試合中、
ローをクリーンヒットさせなかった。

右のローを右の前足でカットしながら、
左の奥足で飛び込むように膝蹴りを合わせてゆく。

野本は見切って、こっちの左の膝蹴りに対して、
さらに左側にずらしてスッと外すという、
そういう体捌きが上手かったよね。

それで本戦引き分け、
延長へ。

この大会も前年同様に1日目は延長1回しかないから、
後は体重判定になっちゃうから。

意外とパンチが重い。
グンとフォロー・スルーを利かせて、
入ってくる下突きが重かった。

延長に入ってから俺のリズムがわかってきて、
膝蹴りをうまく捌いて、
パンチ主体で攻めてきた。

ラスト30秒。

このラリーで差をつけるには、このラスト30しかないな。

そして正面からパンチ、膝のラッシュを仕掛ける。
今度は左右の膝を使って、蹴りわけて、
圧力かけて行く。

野本選手はパンチから左右のローで来た。
これに対してパンチから左右の膝蹴りを、
開いてるボディの真ん中に集めて。

これで野本はバランスを崩して、
あれあれあれ、っていう感じで、
後ろへ。

そして小豆袋がボンと投げ入れられて、
これで延長終了。

判定。

引き分け5。

うーん、と思ったよねえ、この1戦もねえ。

体重判定で負け。
野本選手が体重86キロくらいかな、
で俺は97キロあったから。

それで、終わったんだよね。

この大会が終わってから
『空手ライフ』っていう雑誌見たんだよね。
そこに緑代表のインタビューがあって、

この大会で野本選手は、俺以外のすべての試合は
技有りか1本勝ちでダントツで優勝してて、
そのことを緑代表は高く評価してて。

世界大会でも大きな戦力になる、と。

で、最後にインタビューで
では野本選手以外に誰が印象に残りましたか、
という質問があって、
「それは若狭選手ですね」って答えてたんだよね。

今大会、野本選手を最も苦しめた選手で、
あの体重判定で負けてなかったら、もっと上に行けた選手でしたね、って。

若狭選手みたいな選手が世界大会に出たら、
おもしろいと思いますよ。
彼は自力があるし、ラッシュ攻撃がいいから、って。

俺のこと、そう言ってくれたんだよね。

うれしかったよね。

で、世界大会代表のめぼしい選手たちが集まる合宿があるから、
おまえ特別に参加しろよ、って連絡も貰って、
参加したよね。

その年の無差別の全日本大会があって、
ベスト8に入れば世界大会に出場できる、と。

これに俺は出場。
このときは、やっぱり世界大会、出たいから。
「ラスト・チャンスだ」って緑代表からも言われてて。

俺自身も、それは、わかってるし、

で、がんばったんだよね。

ああ、これで最後になるかも知れないから、って、
特訓積んで。

城南の小杉道場行って、渋谷の塚本道場行って、
もうガンガン練習するんだよね。

それで大会の2週間前からクール・ダウンして、
そうすると全身の疲れが取れてきてね、
さらに俄然、ファイトがわいてきて。

で、1週間前からは軽く微調整。
筋力を使わないようにして、
拳立てもまだやりたい、でもピタッとやめるんだよね。

サンドバッグもミットも蹴らない。
もう闘志を、溜めるだけ溜めて。

食べ物は糖質と炭水化物を摂って、
もう体がどんどん回復して行って、
闘志もどんどんわいてくる。

これは、いつものことなんだけど、
そして試合の前の日、
よく寝られない日があって、
これは緑代表が現役のとき、よくやってたんだけど、
試合2日前、わざと徹夜すんだよね。

漫画喫茶行って、格闘漫画を読みあさって、
もう性欲も処理してないから、
もうグリコーゲンたまりまくっちゃってて、
いやいや、ここで抜いたらダメだなあ、って。

性欲ぎんぎん、闘志らんらん。

もう闘志と性欲は、もう兄弟みたいなもんだよね。

いやあ、よく悩ませてくれちゃったよなあ。

そうして徹夜しちゃったから
翌日、爆睡する、と。

もう闘志を漲らせるだけ漲らせたから、
前日、ふっと気持ちが落ち着くんだよね。

それで女房に
「これゼッケン、縫いつけといて」って。
「はい。わかりました」って。

そうして膝の上に道衣置いて、縫いつけてるんだよね。
その姿、見て。
ああ、もう何十回、縫い続けたのかなあ。
もう十何年間。

ゼッケン縫い付けてるとき、下を向くじゃない。
そこで女房の頬の肉とか見えて、
ああ、歳取ったなあ、って。

そう思ったね。

俺がこんな稼業やってるばかりに、
こんな汚いアパートに住んで、
こうして、ただゼッケン、縫いつけて。

苦労させちゃったよなあ。
俺と結婚したばかりになあ。
この人は、この人なりに、
いいことあったのかなあ、って。

まあ、でも、明日は試合だからな。
がんばらなきゃなあ、って。

その分、がんばんなきゃなあ、って。

朝はバチッと目がさめた。

6時くらいに。

秋、11月頃だよな、

表出て荒川を散歩して、ちょっと汗流して。

いい感覚だったな。

軽く朝飯食って、

前の日から凍らせてた2リットルのミネラル・ウォーターを

バッグに詰めて、サプリメントも詰めて。

で、道衣も詰めて。

それからバッグのチャックを締めて。

おっと、帯、忘れたぜ、って、

もう一度、バッグを開けて、なかを調べて。

やっぱり入ってないんだよね、帯が。

それで帯、入れて。

これで準備はOK。

電車に乗って、東京体育館へ。

会場、着いて。

受付行って選手の首からさげるやつと、

パンフとか記念タオルとか貰って、

控室へ、と。

1時間くらいしてから選手は全員、

会場のオーロラ・ビジョンの下に集合、と。

それで注意事項を聞く、と。

ゼッケンの若いほうが青とか、赤とか、
それから反則は厳しく取りますから、って、
そういう注意事項を聞いて。

塚本と会場で会って

「今日、先輩、がんばってください。
あれだけ練習したんですから大丈夫ですよ」って声かけてくれて。

彼、独特な深みのあるやさしい笑顔。

試合が始まって、俺は中間くらいの出番で。
相手は寺家さん、支部長やりながら選手でやってて。
俳優の松平健みたいなガッチリした男で、体重100キロあったよ。

試合が始まったら、
まず相手の重量感、圧力どれくらいあるのか、
受けて、試してみよう、って。

そしたら密着型、重戦車みたいな、
圧力かけてきて。
こっちローキック出しても間合いが近いから、
潰されちゃうみたいな。

このままだとラチがあかないなあ、と
頭のなか切り替えて、
相手が前に出てきたらフッと距離を離したりとか、
フットワークを使ったよね、1回戦からね。

そうして下段がクリーン・ヒットして、
追っかけてきたら距離取って下段、
これがヒットしてきて。

ああ、これは俺がペースを握ったな、と確信して。

でも寺家さん、すごいんだよね。
時折、密着すると、
右の上段膝がガクーンとくるんだよね。

俺、衝撃で上向いちゃって、
一瞬、頭クラクラとしちゃって。

あ、やばいやばい、って。

俺、サウスポーで構えてるから、
右の上段膝が見えないんだよね。
まったく見えてなかった。

頭ぐらぐらしちゃって、
やばかったよ。

ここで「ラスト30」って声が、聞こえたんだよね。

ああ、ラスト30ならやっちまえ、って。
猛ラッシュかけて、それで5-0の判定勝ったんだよね。

これ中盤で食らったらヤバかったよね。
体重100キロで、よく上段膝あげるよね、ここまで。

キックでは顎引いてるから、
そんなに上段膝、効かされることないんだけど、
空手は顔面パンチないから顎上がってるから、
それに顎上がってると下突き伸びるから。
だから空手の選手は上段膝、効かされちゃうんだけどね。

で、2回戦。

小泉戦。

小泉さんは現役の警察官で、
警察官は週に何回か24時間勤務があるでしょ。
そんななかで週3回、練習して、
それでトップ・レベルの選手でしょう。

いやあ、小泉さんにはリスペクトしてたよねえ。

尊敬してたよ。

でも、いいよね、格闘技の世界は。
そういう尊敬できる人と戦えて。

社会で尊敬している人と戦うなんていうとき、
仕事奪っちゃったりとか、そういうことでしょ。

でも、格闘技の世界は違うから。
尊敬できる人だからこそ勝ちたい、っていう。
それで、また改めて、お互いを認めあえるという。

そういうの、あるからね。

そうして試合開始。
密着してきて下突きをコツコツコツコツやってくる選手で、
その突きを小手落としで捌きながら、
左の膝蹴りと左のローを返して。

胸へのパンチで相手の上体起こして、
ガーンと打ち込んで、
若干、俺のほうが押してるという感じながらも引き分け。

そうして延長戦、
この細かな下突きが、そのうちの2発が
ドスドス、っと効いて。

うわっ、て。

こりゃ、やべえ、って。

ステップ使って退いて、

それを小泉選手が追いかけてきて。

そして再び「ラスト30」になって、

最後のラッシュになると俺は強いから。

もう、いっちまえ、って。

「うおおおおーっ！」ってラッシュ仕掛けて。

もう気持ち悪いんだけど、

俺、ラストのラッシュ出るんだよね。

やっぱ練習だよな、あそこまで動くの、ってねえ。

で、判定になって引き分け。

ボディを効かされたのと、

最後の俺のラッシュで相殺されて引き分けという感じだよな。

でも、この判定待ってるときに、

効かされた腹で、吐き気が止まらなくて、

うおっ、うおっ、って止まらなくて。

こりゃ、延長始まったらやべえなあ。

でも不思議と試合始まったら吐き気が止まって。

ダメージも、もちろんあるんだけど、

やっぱりキツイ練習してきたから復活も早いわけだね。

それで、これが最終延長戦、
ここで引き分けたら体重判定で、俺は負ける。

だから最後なわけで。

「うおおおーっ！」って叫びながら、
思いっきり胸へのパンチで仕掛けたよね。

小泉選手の頭は揺れたんだけど、
もう密着して離れない。
この至近距離こそ、彼の得意の間合いなわけだから。

そうしてコツコツ右の下突きを連打してくる。
俺は引き離そうと、胸へのパンチを打ち込むという、
一進一退の状態のまま。

俺は必死だった。

これは世界大会が懸かってて、
もう必死だった。

ラスト・チャンスだ、ラスト・チャンスだ、って
心のなかで叫んでた。

そして判定の結果、引き分け。
ああ、体重判定だ。

でも前回、世界大会出場してる
こんな選手と、ここまで戦えたっていう、
若干、安堵感。

そういう安堵感って、あったんだ。

ああ、まだ甘いよなあ、俺は。

甘い、甘いな…。

くそお、って。

なんだよ、体重計なんて。

もう、わかりきったことやんのかよ、ここで。

もう死刑宣告なんだから。

「おおおっ！」って、

思わず体重計乗る前に気合入れちゃったよね。

これで俺の体重判定負け。

「ありがとうございました」って、小泉選手と握手して。

「ありがとうございます」って、お互い抱き合って。

会場の拍手、すごいんだよね。

そしたら場内アナウンサー、

余計なこと言いやがって。

「若狭弘幸選手、40歳。日本代表の強豪選手相手に、

よくがんばりました！」って。

なんだよ、年齢なんて言うなよなあ、って。

でもなあ、全部、体重判定負け。

あと一步のところ…。

いやあ、ほんとに苦しかったよなあ、この頃なあ。

ああ、来年の世界大会、出られなかった。

次、世界大会は45歳かよ。

うわあ、また、このモチベーション、
上がんのかなあ、俺なあ、って。

そんな気持ちで電車乗って帰ったよなあ、俺。

世界戦逃して、落ち込んで。

どうしたら日本のトップ・レベルの選手を相手に、
どうやったら体重判定に持ち込まれずに勝てるのか。

打たれ強さはもちろん、スピード、
年齢的なものもあるし。

40過ぎた人間が、
どうしたら勝てるのか、という。

そういうことを、考えたねえ。

どうしたら、いいんだろう。

これは肉体改造の必要があるな、と思ったんだよね。
もっとナチュラルにしたほうがいいな、って。

ナチュラルはナチュラルでも、
無茶なナチュラルで。

まず破壊的な瞬発力、
試合後半でもチカラが落ちない筋持久力を備えるための、
この2つを鍛えるためのトレーニングを考えたんだよね。

その練習メニューは、
まず上半身、片手で拳立てを20回ずつ、
インターバルを置かず、すぐサンドバックを
マックスのチカラで1分半叩き続ける。
これを1セットとして4セット。

そして、またインターバルを取らずに、
体重100キロの選手に床に寝てもらって、
この人に帯をくくりつけて引っ張る。
道場の隅まで引っ張る。

道場の床は発砲スチロールで滑らないから、
30メートルも引っ張ると脚がパンパンになる。

そして、またしてもインターバルを入れず、
サンドバックにミドル・キックをダブルで1分半、
蹴り続ける。

これを1セットとして4セット。

で、最後はバービー。
腕立てして即座に立ち上がって1回ジャンプ、
これを30回やって、
今度はパンチと蹴りを1分半、
もう滅茶苦茶に叩いて出し切る。
これを2セット。

合計して10セット。

まずは威力と回数の向上を目指して、
やってたよね。

もう全身、鉛のように重くなってたよねえ。
もう、へろへろで。

これは週1～2回だけなんだけど、
3年間やってたよねえ。
まあ、試合ないときは回数少なくして。

でも後遺症、残ったよねえ。
右の肩、上がらないんだよねえ。

でも、この頃はウエイト器具使ってないから、
これがナチュラルだと思ったんだよねえ。
ナチュラルじゃないよねえ、こりゃねえ。

でも当時は、これを止める気はなくて、
相手が持ってて、俺が持ってないものは何か、
じゃ、俺が持ってて、相手が持ってないものは何か、
そういうことを徹底的に考えて。

俺は体がある。
自力がある。

だから、この自力を鍛えよう、と。

パンチ、膝、ロー。
これらの技は圧力、つまり自力が要るから。

だからパンチ、膝、ローやらせたら、
右に出る者はいない、っていうくらい、
やりこもう、と。

きついトレーニングの成果が出てきて、
ビッグ・ミットを叩いてもキレが出てきて、
筋持久力も上がってきたから後半も疲れが出なくなったんだよね。

そうして43歳のこの歳に、
東北大会に出るんだよね。

俺、強かったよね。
パワーもあるし、バンバン行けるし。
スタミナも切れないんだよね。

この試合、圧倒的な強さを自分自身、感じたんだよね。
おお、違うわ、って。

それで決勝戦、相对するのは菊洋介。
城南の後輩。
もう打ってこない、右膝上げて、
俺の左ローを警戒して逃げて行く。

なんだよ、おまえ、っていう。
最後の試合なんだから、思いっきり打ち合えよ、って。

菊は城南の道場内の決勝で、俺に左ローで負けてるから。
それで学習したんだろうね。

でも、俺はこうした、のらりくらの逃げの戦法が、
めちゃくちゃ苛ついて。

本戦で勝ったと思ったんだけど、延長になって。

焦ったね、俺。

このまま体重判定に持ってかれちゃうんじゃないか、って。
そういう焦り。

じわじわっ、とした焦り。

これは俺の心の弱さだったんじゃないかな、と。
心が強くて、そうすれば、
もっと落ち着いて仕留められたんじゃないかな、と。

それと俺と違うタイプの選手への対策。
俺は打ち合ってくる選手のことしか、考えてなかったんだ。

打ち合ってこない、
ずるずると続かされちまう選手への対策が、
まったく出来てなかったんだよね。

試合中、菊が片膝あげて退いてる姿が見えていて、
その奥足にインローを蹴って、
それで菊の片足が大きく持ち上がって。

俺は興奮し過ぎて、
スタミナは維持できてるんだけど、
ただ、ただ焦りがあって。

最終延長も引き分け、体重判定。
それで俺は負けたんだ。

そうして試合が終わって、
悔しくて悔しくて、たまんない状態のまま、
三瓶師範と握手して。

そこで言われたよね。

「もっとテコの原理を使って、
そうすれば、もっと強い力が出せるのに」っていう。

ああ、そうか、って。
俺はナチュラルとか考えながら、
結局、この数年間、ナチュラルなんかじゃなくて、
ただ筋力を鍛える練習しかしてなかったんだな、って。

テコの原理とか、そういうこと、まったく考えずに、ね。

で、メニュー変えようと思って、
サンプレイに入るんだよね。

身体の移動だとか、恒例のスーパー・サーキットとかもやってるから。
緑代表もやってた練習だから。

道場もこの時期、小岩に支部長として出して。
道場主であるという、そういう背負い込むものが増えて、
よかったよね。
モチベーション、必然的に上がってくるから。

ところが友だちのパーティーで演武やって、
右の前腕の骨を折っちゃうんだよね。

それで、しばらく練習できなかったんだけど、
ギブスして、出来ることはやったね。
まだ東北大会まで半年あるから、やれんじゃないか、って。

で、出た。
難なく準決勝まで進んで、
全部、本戦で決めて。

ステップも出るようになって、
技のキレも良かったし、

膝蹴りが、良かったよね。

それで準決勝で平野選手と対戦して、
彼は軽量級で分裂前の極真の全日本ウエイト制軽量級でも優勝してるし、
ワールド・カップにも出場してる世界代表選手。
いい選手だったよね。

試合前、入来師範にアドバイスを貰いに行ったんだよね。

そしたら

「相手は軽量級選手だから絶対、ステップ速いからな。
今回は絶対、逃すなよ」って言われて。

相手が自分の右側に入ってきたら右足を出して止めて、
逆に左側に入ってきたらスイッチして、って。
そんなシミュレーションを会場のなかでやったんだよ。

それで、ああ、次の出番だな、って。

よし、絶対、まわらせねえぞ。
絶対、逃がさない。
絶対、体重判定に持ち込ませねえぞ、って
腹決めたんだよね。

で、両者、マットの上に立って、
試合が始まった。

そしたら足止めて、真正面からガンガン来るんだよね、
フルスイングで、もう全身使って、
石みたいな硬い拳で、ガンガン、ガンガン来るんだよね。

強烈なパンチだよね。

これは面食らったんだよね。

想定外だよ、これは。
でも、すげえな、って。

で、1分過ぎた辺りで、
俺の反撃でサウスポーから繰り出す左のボディ・ブロー、
その返しで右のフック。

ボン、ボンーと当たって。

「うっ」って平野、うめき声あげて、
身体が一瞬、くの字になっちゃって、
あ、今だ、このときだ、って、
俺はそう思って、もう思いっきりラッシュを仕掛けて。

もう左右のパンチを思いっきり振るって、
バカバカ入れたんだよね。

それでも平野選手は、もう効いちゃってんだけど、
すごい形相で食らいついてくんだよね、
「うわ——っ！」って。

2分過ぎて、もう効いたボディで、
でも絶対、倒されまい、として。
それは、もう、すごい執念だったよね。

「うわ——っ！」って。

それで俺は、もうジャンプして、
飛んで、思いっきり殴りつけて場外へ出したんだよね。

ドーンと俺、平野選手の上に倒れこんで。
でも、よかったよ壇上から落ちなくて。

以前に、この東北大会で、
壇上から相手選手を落としちゃったことがあって、

もうトラウマになっちゃってんだよね。

ああ、平野、落ちなくてよかった、って。

そうしてラスト30秒。

もう技有り食らうくらいボコボコになって、

平野、胸、腕で抑えてて。

よれよれになってんのに、

それでも「うおおおーっ！」って叫んで。

絶対、倒されない、って。

すげえやつだ。

男を見たよね。

そうして俺は決勝の試合を待って、

その前に平野選手の3位決定戦の試合があつて。

平野選手は「よし」って気合入れてて。

普通、やる気、出ないじゃん、3位決定戦なんて。

それが、きっちり、まるで空手の試合の見本を見せ付けるかのような組手で勝ったよねえ。

この3位決定戦の試合前に

「平野さん、これが最後の試合ですよ。がんばって」って、

俺、声かけたんだよね。

そしたら平野選手、振り向いて

「じゃあ、自分、先行きますんで。若狭さん、優勝してくださいよ」って。

まるで特攻隊のようだった。

先行って、待ってますよ、っていう。

いやあ、カッコイイ。

あの男、ものすごい、カッコいいよ。

後で、この大会が自分の引退試合だったものだから、って。

本当に、あれが最後の試合だったんだ、って知って。

「どうも、ありがとうございました」って。

だから、引退試合だからこそ、

もう、絶対、倒されないぞ、って。

ああ、そうだったんだ。

こんなことレセプションで言われてみな。

もう、なんにも言えないよ。

もう、こちらこそ、ありがとうございました、って。

俺も深々と頭、さげたよねえ。

男だよ、平野。

すごいよ、ほんとに。

その晩は朝まで、平野さんと飲み明かしたよねえ。

それで俺の決勝戦はというと、

平野選手がキッチリ勝った試合を見せつけられて、

ああ、さすがだなあ、って。

よーし、って気合入って。

決勝の相手は増田亮一選手。
増田選手とは全日本ウエイト制で対戦したことがあって、
そのときは俺が本戦で圧勝してたんだよね。

だから相手のことは、ある程度、わかってるつもりだったんだよね。
後は集中するだけだ。
そうして黙想しながら、名前を呼ばれるのを待ってたんだよね。

試合開始早々、
もうガツガツ、もうフルスイングで、
猛然とパンチを打ってきたんだよね。

もう1発1発、威力があって。

俺はセオリー通り、左ローを合わせて行ったんだよね。
もう彼はローを受けよう、っていう気がないのが分かったから、
だからパンチに合わせてローを蹴って。

この左ローが全部、きれいにいったよね。

よし、これは効いてくるぞ、と。

ローが効いたら膝蹴りに切り替えて、
圧力かけて行こう、と。

そんな感じで戦っていたら、
増田選手の満身の力を込めたフルスイングの左の下突きが、
俺の右の前腕を捕らえたんだ。

ガッツーンと、もう激痛が脳天まで走った。

また折れた。

しかし、一度、折った腕を、
もう一度、折ったら、こんなに痛いもんなのか、と。

それくらい体験したことのないような、
激痛だよ。

でも不思議なことに、
こんな激痛のなかで、俺、頭のなかでは冷静で、
あ、これ、どうしようかな、って。

もう右の拳、握るだけで痛いし、
握れないし。

この右腕使えないから、捨てるしかないな、と。
じゃ、どうしよう。
この右腕をわき腹に固定したら、また打たれるし、
かと言ってわき腹から離したら、
ミドルキック食ったらどうしようか、って、
増田選手のラッシュを受け続けながらも、
そんなことを考えてた。

ああ、これは、やっぱり、
腕をブラブラさせてたらうまくいかないから、
わき腹に固定してしまえ、と。

もう、イチかバチか。

それで右腕をわき腹に固定させながらも、
左のローは打ち続けたよねえ。

でも、やっぱり、その腕に、またパンチ食らって。

「うわあーっ！」って。
さすがの俺も、もう試合、ぶん投げたよね。

もう右腕を抱えながら、相手に背を向けて、
場外へ出ちゃったよね。

まあ、そうして、負けちゃったんだよね。

それでその晩は、
そうして平野さんと飲み明かしたんだけどねえ、
俺はまた折っちゃった右腕、擦りながらねえ…。

第十九章 現役引退

試合が終わって、
その日のレセプションで。

俺が負けちゃったから、
何年か振りに福島に優勝が戻ってきたもんだから、
地元連中は、すごい喜んじゃって。
テレビ福島なんかも「よくやりましたね！」とか言っちゃってて。
もう東北勢の1日。

レセプションでも東北陣営が盛り上がっちゃってて、
三瓶師範なんかもニコニコだよねえ。

俺もテレビ福島のインタビューでも、
このレセプションでも言ったんだけど、
増田選手については、この一瞬のために、何もかも捨てる、という、
ただ、もう、やるだけだ、っていう、
そういう人間としての凄みを感じたんだよね。
勝たなきゃいけないとか、そういうプレッシャーはキツイんだけど、
今日の増田選手は、もう、そんなもの関係ない、と。
勝ち負けを捨てて、ただ、やるだけだ、という、
そういう凄みが彼にはあったね。

こうして俺は、いつも、こうやって試合に出て思うことがあるんだけど、
それは、こうした大会を設営、運営する地元の道場生だよね。
みんな仕事とか用事があっても、
大会のためにボランティアで働いてくれて。

だからレセプションの挨拶のとき言ったんだよ。

「そんな地元の道場生たちが頑張ってくれるから、
自分たちは試合ができるんです」って、
レセプションで言ったら盛り上がったよねえ。
いや、ほんとに感謝してるんだよね。

それで最後に入来師範に挨拶に行つて。

いやあ、入来師範は、いつも俺なんかのことを気にかけてくれて、

「今度の対戦相手は、こんなタイプだから、

こうやって攻めたほうがいい」って、

ほんとに親身になってアドバイスしてくれるんだよね。

で、俺、言ったんだよね。

「俺、一度は城南支部を出た人間なのに、

前と変わらず応援してくれて、ありがとうございます」

「いや、俺は個人的に若狭のことが好きだから」って、

そう言ってくれたんだよねえ。

思えば...俺がこの世界に入ったとき、

住むところなくて緑先輩のところに住んで、

その緑先輩が奄美に帰っちゃったあと、

俺の面倒を入来先輩が見てくれたんだよね。

当初は城南支部の寮に入ってたんだけど、

そこで若い寮生とケンカしちゃ飛び出して。

いやあ、気性が激しいもんだから、

そういう対人トラブル多くて。

廣重師範が「若狭め、おまえは破門だ」って言うのを

入来先輩が「いや、待ってください師範、自分に任せてください」って、

いつも俺をかばってくれて。

元住吉に、ほんとに、ちっちゃい入来道場、

移動稽古で「いち、に」って進んだら、もう壁という、

そんな、ほんとに小さな道場から入来先輩はスタートしたんだけど、

寮を飛び出した俺を、その道場に住ませてくれたり。

それで入来先輩は、というと、

もう、この頃、奥さんがお腹、大きくて、
小さなアパートに住んでたんだよね。

奥さん、綺麗な人で、看護婦さんで。

ある日曜日の午前中、俺が道場で寝てたら
「おう、遊び来たぞ。寝てたのか」って
入来師範と奥さんが遊びに来て。

「ああ、いや、大丈夫です」って起き上がって。

「いや、そんなに緊張しないでいいのよ」って言ってくれて、
奥さん、やさしい人でね。

入来先輩は、いつものように、ひゃっひゃっひゃっ、って笑ってて。

窓から春うららかな日差しが差し込んでて。
寝袋一枚だったけど、あったかかったよね。

「夜、寒くないですか？」って奥さんに聞かれて
「ええ、大丈夫ですよ。暖房ありますから」って答えて。

暖房のエアコンは業務用のやつだから、
これ電気代、結構、かかるわけで。

いやあ、しかし、やっぱり、暖房ないと寒いもんでして、
とは言えなかったんだけど、
入来先輩も奥さんも言えなかったんだけど、
でも、この暖房費は高くてしまったよなあ、
いやいや申し訳ないです。

で、まあ、そんなこんな、そんな感じでね、
夫婦で面倒見てくれたよね、俺のことを。
金もないのに。

それで、いよいよ子どもが産まれるときに、
もう男の子だって解ってたから
「拓夢(たくむ)って名前を付けようかなって」って
入来先輩が言うんだよ。

ああ、夢って字を持ってくるのか。

ああ、夢って字、カッコいいな、って思ったね。

だから俺も将来、子どもができれば、
夢って字をつけよう、って、
そのとき、そう思ったんだよね。

それで後々、プロになって、新極真になって戻ったんだけど、
そうして十数年経ったわけなんだけど、
池上道場と小杉道場で責任者として任せてくれて、
俺は池上は週3回、小杉も週3回、指導して。

それで給料20万円もくれたからねえ。

もう、この当時は俺も結婚してて子どももいたんだけど、
家は狭いし、遠いから、道場で寝泊りするようになって。
入来師範、蒲団持ってきてくれたりして。
週末だけ女房と子どものいるアパートに帰ったりして、
そんな生活してたんだよね。
女房は何も文句は言わなかったよね。

東北大会のレセプションで、
そういう入来師範にお世話になった、
いろんなことを回想したよねえ。

入来師範は与論出身なんだけど、

与論献法ってのがあって、
酒を回し飲みすんだよねえ。

一升瓶持って、それを茶碗にナミナミと注いで、
一気に飲み干して、これ全部、飲みましたよ、って証として、
その茶碗を自分の頭の上で1回、ひっくり返して見せて、
そうして何かひと言、言う、っていうのが
与論献法で。

そうして、みんなで輪になって、
1人ずつ、もう、ぐいぐい飲んでゆくという。

それで入来師範が東京で、
与論出身の人たちを集めて『与論会』って作ったんだけど、
この東京モンが、この酒飲めるかい、ってな感じで、
じいさんが一升瓶抱えて持ってきて、
ああ、うけて立ってやるわい、みたいに、
ガンガン飲んでたら俺、つぶれちゃったという。

そんな、いろんな思い出がね、
入来師範とあったよねえ。

で...東北大会が終わって。
俺はこうして以前、入来師範の城南支部でお世話になったんだけど、
そこから独立して、小岩で支部長をやった。

地元のコミュニティ会館で週2回、新極真空手の指導。
生徒は20人くらい。
子どもたち、兄弟なんかだと月謝割引だから、
月10万にもならなくて。

これじゃ生活できないから、
介護職をやろうと思って。

なんで介護かというと...

人間の終着点を見たくてね。

何を考えてるのかな、老人たち、って。

これは昔からのことなんだけど、

人の生き様というものに、すごく興味があって、

だから人の終着点を見て、最期のお手伝いができたらな、って。

募集を見たら、地元の施設で求人があったから、

速攻で資格取らなきゃって。

そうして資格を取るための研修を受けに行ったら、

まあ、いろんな人がいるよねえ。

50歳過ぎて流し台とか設備関係の取り付けのような仕事で当たって

遊びなんかおぼえちゃって、

もう得意げに誰かをカモにして

「こいつなんか、こんなやつなんだから、ゲハハハ！」なんて、

誰かのあげ足取って笑い者にしたりして。

「今度は介護業界にも進出して、ひと儲けしてやろうと思ってよお、

ゲハハハハハハハ！」とかなんとか言っちゃって

笑ってやがんだよ。

「でも、俺はじいさんのオムツなんか取っ替えらんねえよなあ」

とか言ってやがんだよ。

てめえ、何言ってやがんだ。

介護ってのは、オムツ交換から始まるんだよ、

って、そう思ったね。

そうして資格を取って、

求人案内見て、近くの介護施設に面接に行つて。

そしたら、その院長が

「山谷に訪問介護のステーションがあるから、
そこが人足りなくて困ってるから、
そこに行ってもらいたいんだよね」と言う。

訪問介護。

その足で、すぐ山谷に。

山谷と言えば『あしたのジョー』を
ピーンと思い出して。

上野から日比谷線で『三ノ輪』駅。

『泪橋』っていう交差点があって、
路地を曲がって。

おお、こりゃ、矢吹ジョーだぜ。

今は川はまったくないんだけど、橋もないんだけど、
単なる交差点しかないんだけど、
江戸時代には川が流れてて、
その川の橋を渡ったところに罪人の処刑場があって、
だから『泪橋』っていうんだって。

で、その訪問介護ステーションに行ったら、
その所長が水木一郎そっくりで。

アニメ・ソングのカリスマ。

で、ほんとにこの人も、この仕事に入る前、
アニメの仕事してたんだって、スタッフの1人としてね。

それで、この所長の50歳くらいの神田さんなんだけど、
終始、にこにこ顔なんだよね。

「いやあ、男のスタッフが欲しくてねえ」って。

俺の履歴書見て喜んじゃって
「こういう人が欲しかったんですよお」って。

これは後からわかったんだけど、
神田さんは体育会系の、
そういう古き時代の男の世界が好きだったんだよね。

この面接のとき、その神田さんが言うには
「この辺りはね、昔はドヤ街って言われてて、
日雇い労働者たちの溜まり場になってたんだけど、
今は介護の町に変わっててね」

昔、労働者たちが宿泊してたタコ部屋は、
きれいな個室の部屋になってて、
テレビも冷暖房も完備されてる介護所になってる。

区が、このドヤに金を支払ってるんだよね。

ドヤで介護を受けてる全員が生活保護を受けてる。

さすが介護では世界ナンバー1の国ですよ。
もう、完全に整備されてる。

不況になって日雇いの仕事もなくなって、
そういうふうに町全部が変わったんだよね。

それで神田所長が
「じゃあ、明日からどうですか？」って言うから
「ああ、ぜひ、お願いします」って答えて。

こっちは、もう右も左もわからない新人なわけで、
でも、神田所長は、もうニコニコ顔で、
すっごいやさしいんだよねえ。

「じゃあ、自転車乗って。一軒一軒、利用者さんのところ訪問するからさ。
じゃ、どういう仕事するのか一軒一軒違うから。
見てればいいからさ。ちょっとずつおぼえてくれればいいから」って。

やさしいんだよねえ。
絶対、女にモテるよねえ。
実際、モテてたもんなあ。

そうして徐々に仕事おぼえて、
やがて1人で訪問介護ができるようになって。

やっぱりほんとに1人1人、違うんだなあ、って
そう思ったねえ。

たとえば木下さん夫妻がいて。
それは、どういう人たちかと言ったら...。
ダンナさんは85歳くらいで脳梗塞で倒れて、
それから寝たきりで、こっちが補助してあげないと歩けないんだけど、
週2回だけデイサービスで外に出るんだけど、
認知症もあるし、おむつも交換しなきゃいけないんだけど、
俺たちは時間ないから、いろいろ大変で。

左の脳やられてるから言語障害があって、
あうあう、あうあう、って言ってて、
俺は何言ってるのか、まったくわかんなくて。

奥さんは70歳後半くらいなのかな、
もう、介護疲れで鬱病になっちゃってて。

この人たちは年金で暮らしてる夫婦。

俺なんかが自転車に乗って
「こんにちはーっ！」って玄関をガラガラって開けて。

もうボロいアパートに住んでんだけど、

部屋のなかも、もう散らかりっぱなしで、
奥さんはやつれ果てて、頭も禿げちゃってて。

ぱっ、ぱっと周囲のゴミを片付けて、
まずはオムツ交換してあげて。

生活援助と身体介助っていう2種類があって、
生活援助は買い物を手伝ったり、
料理を作ったり、シーツ交換、掃除をしたり。

身体介助というのは抱いて車椅子に座らせたり、
歩くの手伝ったり、デイサービスの迎えに来る車に乗せたり。

そうして俺なんかは、木下さんのオムツを交換したり、
車椅子に乗せて迎えに来たデイサービスの車に乗せたり。
このデイサービスの車がすごくって、
ウーンって金属が飛び出してきて、ガチャンって車椅子を掴んで、
車のなかに収納するんだよね。

思わず「パイルター・オン！」って叫んじゃったもんね。
マジンガーZですよ。
そしたらデイサービスの人が
「あっ、俺と同じ世代ですね」なーんて言ったりして。

で、この木下さんは、俺のことを気に入ってくれて、
俺が行くと、あうあうあう、って言って喜んでくれて。

「えっ、今、なんて言ったんですか？」って聞くと、
奥さんが通訳してくれんだよね。
慣れた介護士の人ならわかるんだけど、
俺はなに言ってんだか全然わかんなくて。

木下さんは倒れる前は会社の野球部で活躍してたし、
立派な会社で若い人を何人も使ってた人だから、
しっかりした人だからね、
だから俺みたいなのが好きなんだろうね。

「今度の試合はいつだい？って聞いているよ」って
奥さんが通訳してくれて。

俺はウエイト制の試合を控えてて、
もう追い込み中だったからね。

そうして俺が腕立てをして見せると、
木下さん「いー、にー、さー」なんて数、数えてくれたよねえ。

デイサービスの帰りも車が来て、
今度は部屋のなかへ連れて、着替えさせて、という作業。
ちなみに、このデイサービスがあるときだけ、
週2日のわずかな時間だけ、奥さんは解放されてたんだなあ。

そんな奥さんが、こう言ってくれたんだよね。

「若狭くん、いつもありがとうね。お父さんは若狭くんのことが大好きで、
今日は若狭くんが来る日なのかい、明日は若狭くんが来る日なのかい、って
いつも言うのよ」

いやあ、うれしかったね。

こんな俺でも、好いてくれる人がいるんだよなあ。

それで木下さんをベッドに寝かせたら、
枕もとにあったアンパンを「あー、あー」って言って
くれたんだよなあ。

外出て食ったよなあ、そのアンパンをなあ。

それで...ウエイト制のための練習もきつくなってきて、
自分の道場でのトレーニング、
サンプルでウエイト・トレーニングとサーキット・トレーニング、

泪橋のステーションの近くの公園で自重を使ったサーキット・トレーニングもやり続けた。

特に公園での練習なんかでは、
ふっと思ったよね。

木下さんみたいにね、
俺の空手の試合も、これで最後かな、なんて、
そんなことをね、ふっと思ったよね。

人間、一生、今のままを維持するなんて出来ないからな。

俺は塚本道場へも出稽古に、週1回行ってた。
塚本はスパリングは、いつもガチでくる。

こっちも、いい練習になるから。

塚本は、いつもニコニコして、こっちを受け入れてくれて。

塚本道場は3分20セット、サポーターなしで。
それがね、きつかったねえ。

なかには最初の10セットだけ、
一般の道場生たちも入ってくるんだけど、
力抜いてるつもりなんだけど、スポンって入っちゃって
「ああ、ごめんごめん」って。

ケガさせちゃって。

それ見て塚本が
「先輩、頼みますよお」って苦笑いして。

この頃は、塚本も道場出したばかりだったから。
やっぱり神経質になってたよね、
一般の道場生を増やしたい立場なんだけど、

それでも、来れなくなっちゃいますよ先輩、とは言わなかったよねえ。

今考えてみれば塚本にも気苦労かけちゃったよねえ。

受け入れてくれるんだよね。

懐が深いよねえ、塚本はね。

稽古が終わって、

横たわってるサンドバッグに2人で腰掛けて、

よく俺の話を聞いてくれてたな。

分支部がうまく行かなくて、

道場、閉めちゃって。

それまでお世話になった南里師範にも迷惑かけちゃったし。

そんな手前、城南に戻ることも出来ないし。

行くあてが、なくなっちゃってたから俺。

「塚本、俺が稽古に来て、まわりの支部長たちに嫌われたり、
嫌味言われたりしない？」

「そんなことないですよ。大丈夫ですよ先輩。

先輩くると、まわりの道場生たちにも刺激になるし、

もう、ばんばん来てください。お願いしますよ」って、

そう言ってくれたよねえ。

「でも一般の道場の人たちには、もうちょっと、やさしくしてね」って。

こんなことも言ってくれたことがあるんだよね。

「多分、自分と先輩は、戦国時代には同じチームだったんじゃないんですかねえ。

だから自分、先輩のこと好きなんですよ」なんて。

いやあ、うれしかったよお。

まず、この塚本っていう男は、すごいよねえ。

もう、死ぬんじゃないか、って、
それくらい練習してたよねえ。

ひとつのことを、これでもか、って、
こだわって練習してたよねえ。

もう一度、世界を獲るためにねえ。

ざっ、と塚本の練習スケジュールを紹介すると、
まず朝練。9時から。
基礎体力を中心にやるんだけど、
そうそうたるメンバーでね、鈴木国博も来てたことあったよね。

スパーリングもやるし。

それから夜の練習もあるんだけど、
塚本は1時間くらい前には来て、
自主トレやってて。

筋トレやってたね。

懸垂とか、鉄棒に足からぶらさがっての腹筋。
コウモリみたいにぶらさがって、
100回くらいやってたよね。

あれは、すごいよねえ。

上で鉄棒をパチンと触ってたからね、1回ずつねえ。

それからパンチの強化とか。
打ち方とかねえ。

それから夜の選手トレーニングに入るんだけど、
それも、そうそうたるメンバー。
みんな全日本クラスの選手だよねえ。

さすがに塚本も「ああ…」って、
疲れてるから。
それでも手、抜かないでやるんだよねえ。

で、やつがいちばんスパーリングがきついんだよね。

みんな、次は塚本だから、って。
だって、みんな塚本とスパーリングやりたくて来てるわけだから。

みんな塚本にはガチで挑むわけじゃない。
きついよねえ、塚本は。

そうやって、また練習が終わると
サンドバックにもたれて2人で横たわって。

でも自分のことよりも、人のことを気にするんだよねえ。

「いやあ、先輩、子ども、どうですか？」って。

「いやあ、サッカーのユースのフォワードでね、
アンダー18の全国大会出てるわ」

「えっ、そうなんすかあ、すごいですねえ」って。

「子どもも小さいときから、俺はかまってやれなかったからねえ。
最近、物心ついて、俺とくちきいてくれねえや。
親父の姿見て、嫌になっちまったんじゃねえかいねえ。
まいったねえ、これにはねえ」

そしたら塚本が
「なに言ってんすか先輩。子どもは、きっと先輩の後姿見てますよ」って。

やさしい男だよね。

ある日、仕事終わって夕方、
辺りが暗くなってきた頃、公園で練習が終わった頃、

帰り道、後ろから「若ちゃん」って、神田所長の呼ぶ声がして。

「今もう練習終わったんでしょ。
いいものやるからさ、ついてこいよ」って。

『エンシュア』っていう鯖の缶詰みたいな、
250ミリリットルの缶に入ってる薬剤。

「これは普通の人じゃ、手に入らないから」って、
くれたんだよね。

この薬は、末期患者を延命させるという、すごい効果があって、
味はイチゴ味、コーヒー味、プレーンというのがあるって、
これが美味しい！

それに効く！

もうウエイト制まで10日を切ってて、
疲れ果てた肉体に染み渡る。

それに何よりも、そんなふうにしてくれた
神田所長の気持ちが、うれしかった。

それで試合の前々日に木下さんの家へ行って、
「来たよー、明日いってくるよー」って。

「あーっ！」て木下さんよろこんで、
それでパイルダーオンして。
送り出して、すがすがしい気持ちでね。

で、いつもだったら、
城南支部にいたときは、みんなで集まって、
羽田からピューっと飛行機で行ってたんだけど、
今回、俺は1人だから。

金曜日、12時頃に起きて、のんびり新幹線に乗って。

真昼間の、のんびりした空気のなか、外の景色を眺めながら思ったんだよね。

女房のことを考えて。

俺なんかと結婚して、なんにもいいことなかったよな。

それなのに明るく励ましてくれたよな。

ぼんやりとね、そう思ったっけ。

順調に勝ち上がれば3回戦で青柳選手と当たる。

青柳選手は全日本でも準優勝、世界戦にも出てる。

今回も若手・青柳の優勝の声も高い。

なんとしてでも体重判定に持ち込まれないこと。

俺はこの1戦に、自分の空手のすべてを出す。

これが最後の試合になるかもなあ。

自分の空手人生、全部、出し尽くしてやる。

集大成だけ。

やってやるぜ、俺はよお。

新幹線のなか、

1人でゆっくり考えて、そうして大阪に着いて。

ホテル、チェックインして。

お好み焼き食って、ぶらぶら町を散歩して。

それから一度、バアーツと汗流して。

シャドウやって、腕立てやって、ジャンピング・スクワットやって。

そうしておくとな次の日、すぐ汗出るからさ。

風呂入って、ぐっすり寝て。

早目に起きてモーニング・サービス食って。

会場入りして。

緊張もなくて、変な意気込みもなくて。

そういう感じで。

たった1人だから、

城南支部の後輩を見つけて

「ウォーミング・アップ付き合ってくれ」って。

筋肉の張りとかも、これまでとは全然違ってて。

こりゃ、いい調子だな、って。

それで出番を待つ。

1回戦、2回戦、勝ち上がって。

次は青柳戦。

でも、これまで本戦でしか戦ってなくて、

自分の調子というものが、よくわからなくて。

ちょっと不安があった。

それで試合直前、審判席に居る入来師範のところへ行って

「自分どうですかね、力み過ぎてますかねえ」って聞いたら

「そんなの関係ねえよ、いつものようにガンガン行けよ、

男・若狭で行けよ」って。

そう言われて目が覚めたんだよね。

そうだよな、余計なこと考える必要ないんだよ。

技の上手い選手だから、

技のラリーに持ち込まれないようにしたい。

だから最初から声出して、

パンチをぶちかましていった。

そしたら青柳選手は上下にゆさぶりをかけてきて、
カカト落としからローキックとかで。
でも、俺は眼中なかったよね。

構わず胸へのパンチを、
もうフルスイングでドス、ドス、ドスと打ち込んで。
左ローもバシーンと入った。

青柳選手は、こりゃ、まともに食らい続けるとマズイと感じて、
それからは冷静に対処してた。
スネ受けしたり、左右にステップを使って。

こっちは、もう直進。
ただ、もう、ど突いて、ど突いて、ど突いて前へ。

スタミナはもつのか…。

関係ねえ、これは男の生き様の勝負じゃい！

ドン、ドン、ドーンと胸パン打って、
青柳選手を場外へ押し出した。

向こうのセコンド陣、
俺も城南の連中がセコンドについて、
もう双方、大声援。
凄く盛り上がった。

俺はというと、もう時間がもったいない。
仕切り直しになったら、すかさず前へ出て、
もうド突く！

体重判定になんか持ち込ませない。
スタミナがもつかどうか、丁か半かの大博打。

打ち続ける！

青柳選手は自分の空手が出来なくて、
顔が蒼褪めてる。

終盤、青柳選手は、どうしようもない焦りから、
俺の袖を引っ掛けて、足払いして注意を取られてた。

マット上に倒された俺も、右手に青柳選手のゼッケンを握りしめてた。

倒されまいとして、掴んで、そのまま、
むしり取ったんだろうな。

それでスクッと立ち上がって、
ここで「ラスト30！」って叫ぶセコンドの声を聞いたんだよ。

「うおおおおお————っ！」

向こうも猛然と向かってきて、
そして本戦終了。

そして判定。

あれだけ激しい試合をしたのに、
心の中は、まったく冷静で、疲れもまったくなかった。
こりゃ、行ける。

今回は行ける！

よーし、これで引き分け、延長になるだろう。
ウェイト制は初日、延長は1回しかないから。
体力は余ってる。

よし、次の延長戦、俺は命懸けてやる。
人生のすべてを、この延長戦に懸けてやる。

「判定を取ります。判定一！」

目の前の副審判2人の旗はバツと引き分けに。
そして振り返ると後ろの副審判2人は白へ。

そして主審も「白！」と叫んだ。

呆然とした。

俺の負け。

目の前の、この現実を
一瞬、受け止めることができなかった。

場内、ざわついてた。

こりゃ、ない。

これは、ないだろう…。

そんな状況のまま
「お互いに礼！」とか言われて。

そうして呆然と握手したら、
青柳選手、真っ蒼な顔して
「先輩、すいません、すいません…」って。

選手同士、わかるよね。
自分が勝ったのか、どうかってことは。

だから俺は青柳選手には罪はないから

「ああ、いいよ。明日がんばって優勝しろよ」と。
そう言ったよね。

壇上降りて、もう、ただ、ぼーっとしてた。

そのまま、ゆっくりと椅子に腰かけた。

そしたら青柳が走ってきて、俺の前に来てさ、

「いや、自分も引分けのつもりだったんですよ。

いやあ、自分も決着つけたかったです。

こんな形で終わってしまって、本当に申し訳ないです」って
謝ってきてさ。

で、俺、言ったんだよ。

「なーに言ってんだよ。明日もあるんだから。

早く頭、切り替えて。明日は俺も応援に来るからさ。

がんばれよ」って、それだけ言ったんだよ。

「わかりました。今日の若狭さんとの試合で、

パワー・ファイターとの対戦の感覚、自分、掴めましたんで、

これで明日に活かせると思います。

今日は本当に、ありがとうございました」

俺はそのまま控室に戻って着替えて、

その日の試合はみんな終わったから、

そろそろと会場を後にする人たちのなかに混じって、

俺も出てったんだよ。

そしたら流れ行く人のなかで、

小柄な50代くらいの人がビッグ・ミット背負ってんだよ。

それで俺が、ふっと声かけたんだよ。

「今日は選手の応援ですか、大変ですね」

そしたら、その人は

「ああ、若狭さん。今日の青柳戦は不完全燃焼だったですね。
これから延長だと思って、もうワクワクして見てたんですけどねえ」って。

ああ、俺のこと知っててくれたんだ。

うれしいなあ。

「ああ、ありがとうございます」

それで、そのまま人混みのなかへ消えてったっけ。

で、俺はというと、そのまま、とぼとぼと、
日の暮れかかった町を歩きながら、バッグ持ってね、
ホテルへ。

そのままベッドの上に大の字に横たわったな。

疲れてっから、うとうとしながら。

昔のことが頭のなかに浮かんできて。
走馬灯のように....。

子どもの頃のこと。
長峰くんのこと。

おふくろのこと。
おふくろの人生。

ねえちゃん...どうしてんのかな。
役所行って、探そうかなあ。

それから道場の仲間たち。

毎回、ゼッケンを縫いつけてくれた女房の姿。
俺が家に帰らなくても、必ず栄養のある食べ物を用意してくれたこと。

あとは子どもが小さかった頃のこと。

公園に遊びに行ったとき肩車をせがんできた、
そのときの子どものぬくもり。
そんなことを...苦労かけたなあ。

まわりの人たちの愛情に支えられて、ここまで来たよなあ。

いつの間にか、そのまま寝た。
着替えもしないで、深い眠りに落ちてった。
まるで海の底に沈んでゆくような感じだった。

もう、これで俺も終わりだな。

気がついたら47歳。
この世界で抜きん出ることは、とうとう出来なかったんだな。

八巻さん、緑先輩、塚本...みんな世界チャンピオンになったのに。
俺は、なれなかった。

翌日、結局、青柳は準優勝だった。

人生ひとつの幕の終り。そして、また新しい世界へ

東京に戻って。

木下さん家に速攻で行く。

「ただいまーっ！」って言って。

「帰ってきたよお」

「むにゃむにゃむにゃ」

「どうだった？どうだった？」

「いやあ、負けたよ。出し切ったけど負けた」

いやあ、そういうときもあるよ、って、
そんな感じだったなあ。

いや、次は、もう…。

体、疲れ果てちゃったからなあ。

いつものようにパイルダー・オン、して。

初夏、独特の気分のいい、さわやかな日だったよね。

それで奥さんから毎回、書類に印鑑もらうんだけど。

「奥さん、どうですか。最近は」

「いやあ、もう私も疲れ果てちゃって」

夜中、突然、起きて、わやわやとやられちゃうから。
デイサービスの時間じゃないか、って夜中2時に起きて、
騒ぐんだって。

認知症がひどくなっちゃって。

「疲れちゃったねえ」って奥さん言うの。

大変だよなあ…。

ある日、自転車に乗って、
いつものように利用者さんのところへ走ってたら、
前を自転車で走る高校生2人が、
煙草吸って、俺にガンつけやがった。

カッときて「おめえ、なに煙草なんか吸ってやがんだよ」って。

そしたら、そいつらも自転車おりて、
俺を睨みやがったんだ。

それで俺、バコーンと胸にパンチぶち込んで。

そしたら高校生、ひっくり返っちゃって、
2人して急にヘナヘナになっちゃって。
そしたら、すぐ横の家からおばさん出て来て。

こいつの母ちゃんだって。

「高校生なのに煙草吸ってやがって、
あんた、どんな教育してんだよ、えっ！」って、
この母ちゃんもろとも怒鳴りつけてやったら、
俺の職場にクレームの電話なんか入れやがって。

なんなんだろうね。

いやあ、今の日本、なんか間違ってるねえか。

そうして月日が流れて、また寒い季節がやってきて。

神田所長が転勤を命じられちゃって。
神田さん、すごい仕事ができる人だから。

この山谷に来て売上2倍、3倍にした人だから。

だから今度は本社にきて、立て直して欲しい、って。

それで神田さんの代わりに、
女の人が責任者として来るわけよ。

この業界では、よくあることなんだけど、
女同士スクラム組んで、男をやっつけるという、
そういうことがあるんだよね。

それで女の人たちがスタッフほとんどなんだけど、
この仕事は現場に出て初めて時給が貰えるんだけど、
だから現場に出られないと金貰えなくて、
そうして女の人たちは俺の評価を下げて、
現場に出られないようにして。

そうすれば俺の代わりに自分たちが現場に出られて金貰えるから。

そういうことをね、やり始めたんだよね。

もう、ありもしないことを女の責任者に言いつけるんだよ。

「若狭さんは掃除もしてないし、仕事を手抜きでやってる」みたいな、
もう全然ウソ。
そんなことを告げ口するようになったんだよ。

で、今までは神田さんが、
こいつらウソ言ってるな、って見抜いてたから、
俺にはたくさん仕事くれてたんだよね。

「俺は若ちゃん信じてるから」って。

実際、俺は利用者さんたちに、すごい好かれてたからさ。

でも新しく来た女の責任者は、
そういうウソをまともに受けて、
俺を干しにかかってきたんだよ。

「木下さんのところも、もう若狭さん、
来週入らなくていいから」って。

「えっ、どういうことですか、それ」

「いや、新しくヘルパーの人も入るし、
仕事おぼえてもらいたいから。
だから木下さんと、あとは、こことここも、
もう若狭さん入らなくていいから」って。

でも、なんとか耐えて。
金になんないから食事も減らして。

また新しい利用者さんが来たら、
俺に仕事くれるのかな、って期待しながら。

でも、とんでもない。

俺に一切、仕事つけなくなったんだよ。

なんでこんなことを...。
俺にも非があったのかな、って
いろいろ考えたんだけど、どうも解せなかったよね。

それで、たまらず神田さんに電話して相談したんだよ。

「こんな事情で仕事こなくなっちゃったんですよ。
先輩、自分のことどう思います？
なんかダメなところ、ありますか？」

そしたら

「俺は若ちゃんは、この業界あってるな、と思って、
これから伸びる素質あるし、
俺自身、若ちゃん好きだから、
どんどん仕事あげてただけど。
男同士だったら、この業界、もっとこうしないと、って
本音で語り合えるんだけど、
女は本音で語られると、すごい嫌な気持ちになるんだよ。
今そっちに入ってる新しい責任者は、
誰かに依存してないと生きていけないんだろうな。
若ちゃんは男の世界で生きてきたから、
本音でドーンって言われちゃうと、受けきれないんだよ。
逃げちゃうんだよ」って、
そう指摘されたね。

それで何ヶ月かして、
俺が木下さん家に入れなくなってから、
しばらくして木下さんの容態が悪くなったと聞いて、
それで亡くなったんだよ。

で、葬式は、俺、その女の責任者に呼ばれなかったんだよ。

俺は木下さんと友情というか、
お互いに気持ちの交流があったのに、
その会社の権力を持ってる人間の一存で、
そういうの全部、破壊されちゃうんだな。

俺はすごく頭に来て、文句言ったんだよ。

「責任者だから人に恨まれようが、私は関係ないから。
それが私の仕事だから」って。

これは許せない。

絶対、許せない。

こんなに頭に来たこと、ないよ本当に。

責任者の承諾をもらえないから、
俺は木下さんの家に行けないから。

これは本当に、つらかった。

時が流れて、でも奥さんのことが心配で。
1人になっちゃってるでしょ。

「鬱病で大変なのよ」って言ってたから、
ああ、看病疲れで大変だなあ、って思ってたんだけど、
この何ヶ月か後、奥さん、路上でのたれ死んでたんだ。

路上で、死んでるところを発見されたんだよ。

看病疲れ、なんて...。
木下さんが死んじゃったら、逆に生き甲斐失っちゃってたんだ。

これが夫婦愛ってもんなのか。

こんな一人の格闘家、

どうしようもない男が、
今それぞれの人の人生の最期を見させて頂いた。

人生てのは、
最期はお金と思ってる人が多いと思います。

でも、それ、違うんですよ。

自分で、それまでに何か持ってたか、って、
そういうことなんですよ。

たとえば今こうしてね、
パソコンとかパチパチやってるでしょ。
これって、すごいことなんですよね。

たとえば...俺が担当してる利用者さんの人で、
その人は、もう、すごいお金持ち。
立派な家もあって、息子さんもいて、こんな自分たちみたいな、
ヘルパーもいて、いたれりつくせり。
でも、その人は、いつも「ああ、早く死にたい」って。

「なに言ってるんですか」
「いや、あいつら、俺が死ぬの待ってるんですよ。
ああ、早く死にたい」って。

孤独なんだよ、孤独。

この人、元・軍人なんだよね。
毎日、同じこと話すんだよね。
シナに行ってたこと。

俺は入浴介助してるから、
そうしてお風呂に入ってるとき、
いつも話す。

襟元に三つの星が入ってる上等兵。
訓練中、米軍がいきなり上空からやってきて、
撃ってきた。

近くに麦畑があって、そこに飛び込んだ。
そうして敵が去って畑から出てきて
周囲を見渡すと、友達から何から、
そこにいた人たちが、みんな即死。

近くの川で、入浴当番というのがあって、
ドラム缶に水を入れる番。
それを自分がやってた理由、
それは一番風呂に入れるから。

一番最初に、ゆっくりと入れるから。

それを友達と一緒に。
ゆったり入れる風呂につかって、
それが一番の幸せで。
そんな幸せを友だちとやってて。
そんな友だちもこのとき殺されてて。

休みもらえた日には、衛生サックもらえて...
つまりコンドームのこと。

「おまえら非番のときは、これ使えよ」って、
町によく繰り出してた、って。

上官には「俺の酒のめねえのか」って。

「しょっちゅう飲まされたなあ。
どういうわけだか酒だけは、
切らさず入ってきたなあ」って。

まあ、シナの酒なんだろうね。
日本からも送られてきてたのかも知れないけどね。

戦後、帰還して会社で働いて。
こっちのほうが長かったのに、
いつも戦争中の話しかしない。
軍の話しかしない。

ということは、
この人にとってサラリーマン時代なんかじゃなくて、
この人にとっては軍隊の日々が、
いちばん濃い日々だったというか。

みんな多くの人たちが、
知らず知らずのうちに、
やりたいことじゃなくて、
そうじゃないことを続けて年寄りになっちゃうんじゃないかな。

この人は、軍隊の話をしてるときだけが、
ほんとうに生き生きとしてて。
こうして何か、ひとつ人生に、
これがあった、という人は、
年を取ってもイキイキしてるし。

俺は大正生まれだぞ、
昭和生まれなんて話あわねえよ、
子どもだから、って。

えみさん、八十七歳。
元・学校の先生。
二十四の瞳みたいな人。

文句一切言わない。
いつも俺が朝昼晩、ご飯つくってあげて。

いつも洗濯して。

今日ご飯これしかなくて、ごめんね、
とか言っても
「ああ、いいですよ」って、
いつも文句ひとつ言わない、ニコニコしてて、
おいしいですよ、おいしいですよ、って。
おだやかな、やさしい人で。

すごい認知症。
ものすごい熱い、やけどするお茶を
わかんなくて一気に飲んじゃうような、
そんな認知症。

それなのに頭のなかで衰えないものがあってね、
その人はお茶とお華の先生。
それも先生たちに教えてる先生だから。

木で出来てる看板、
なんとか流の師範って書いてあって。

月一回か二回、海老ごはん。
もう、ばくばく食べてくれる。
カマ飯とは、また違う。
ほんのりと茶色くて。
カマボコもアレンジで入れてみたりして。
するとダシが出てね、
よりいっそう美味しくなったよね。

「おいしいです」ってえみさん、食べてくれるんだよねえ。

結婚してなくて、甥っ子の信一郎さんしかなくて。
信一郎さんはテレビ関係のプロデューサーやってて。
えみさんは学校の先生だったから、
厚生年金が高くて三十万くらい貰えてて、

月に家賃、食費、介助とかで二十万もかからなくて。
そのお金を管理してる信一郎さんは、
掃除が終わって、綺麗になってからだけやってくる。

茶の間にふんぞりかえって

「おい、今日、トイレ汚かったぞ。ちゃんと掃除しろ」とか、
そんなことしか言わなくてね。

「すみません、えみさん、もう俺ここに来られなくなっちゃうかも」って、
そう言ったら、えみさん、飯食ってる途中で、かたまっちゃうって。

「いや、信一郎さん、俺のこと気にいらないみたいだし」

そう言ったら、えみさん、
途端に「やめないでくれ」って。

なんとか、なだめてアパートを出たら、
それでも追っかけてきてくれて、
そうして両手で、おがんで、お願いしてるの。

たまんないよね。
やめらんないでしょ、もう、これはね。

でも、この業界、結局、男のスタッフを潰しちゃうんだよね。
女性スタッフやつらのイジメ根性とか、
仕事まわしてくれないんだから、
ひでえやつらの集まりだったね。
俺は幻滅したよ。

俺は利用者さんたち、大好きだったから、
でも、この仕事をやりたくても、続けられないんだよ....。

そうして、俺は、この仕事を辞めたんだ。

ほんとに申し訳ございません。

塚本道場に行って

みんなの前で現役引退を告げた。

もう体が、もたない。

もう、ぼろぼろだよ、俺。

みんな祝福してくれた。

今まで、お疲れ様でした、って。

ほんと、みんな、ありがとう。

そうして今、俺は警備員の仕事をしている。

いい仕事先が見つかったんだ。

アメリカン・スクールで、子どもたちのボディ・ガード。

「若狭さん、いつも私たちを守ってくれて、ありがとう！」

そんな子どもたちの声が、俺には、たまらなく、うれしい。

そうして...

でも、俺の心のなかには、

まだ燃え残っているものがあって。

心のなかで、ぶずぶすと燻ってる、

燃えカスがあってね。

やっば、やろう、と。

今までのように

ウエイト・トレーニングでガチガチにやる空手じゃなくて、
もっとナチュラルな感覚で、
チカラを抜いて、もっと自然体で戦う空手を。

もう一度、立つ。

いや、生きてる限り、俺は立つ。

俺は死ぬまで、まだ俺の人生に最終章は、ない。

俺にとっての空手とは、なんだったのか。

そうだ、俺にとって空手とは「生きること」そのものなんだよ。

生き続ける。

これからも。

男、若狭弘幸の熱い物語は、まだまだ続くぜ。

とりあえず一度、俺の人生の半分の記録として終了。

この上・中・下巻に及ぶ長編、
最後まで読んでくださった皆様へ。

ありがとうございました！

押忍

電子書籍『男、若狭弘幸の物語1 ～少年時代編～』

<http://p.booklog.jp/book/16375>

電子書籍『男、若狭弘幸の物語2 ～極貧からの一発逆転・ホスト編』

<http://p.booklog.jp/book/29673>

ユーチューブ『マンガ・男、若狭の物語』

<http://www.youtube.com/watch?v=acQ47EmMUz0>

ユーチューブ『男、若狭の物語 ～格闘技編～』

http://www.youtube.com/watch?v=_w0q9dV49tl

携帯電話090-5500-9192

※ご意見、ご感想、なんでもお気軽に電話ください。

よろしく申し上げます。若狭

